



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	養護施設の卒園者の「生活構造」：「貧困」の固定的性格に関する一考察
Author(s)	松本, 伊智朗
Citation	北海道大學教育學部紀要, 49, 43-119
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29306
Type	departmental bulletin paper
File Information	49_P43-119.pdf



養護施設卒園者の「生活構造」

—「貧困」の固定的性格に関する一考察—

松 本 伊智朗

‘Labours and Social Networks’ of Young People who was
Left Residential Care for Children
— A Study on Persistence of ‘Poverty’ —

Ichiro MATSUMOTO

目 次

序章 課題と方法	43
第1章 養護問題と卒園者の進路	51
第2章 養護施設卒園者の労働生活	76
第3章 養護施設卒園者の「社会的ネットワーク」の構造	92
むすび	117

序 課題と方法

1 研究の課題と方法

1) 課題と方法

小論の課題は、今日の貧困層の子弟を代表する養護施設卒園者の「生活」の中に、いかに貧困への「固定化」の契機が存在するかということを明らかにすることである。この課題をとくことは、今日の貧困の存在形態、特にその長期的な性格を明らかにする作業の一環として位置づくものである。貧困の「固定化」のメカニズム——何故貧困から脱脚し難いのか——を明らかにすることは、今日なお大量に存在する貧困¹⁾に対抗することを主要な課題とする社会保障・社会福祉のあり方を考察する上で、不可欠の基礎作業となろう。

ところで、貧困の「長期・固定性」について分析を進める際、1) 個人の生活の流れの中での「固定性」、2) それが世代的に受けつがれるところの「世代的再生産」の二つに分けることが便宜上必要だろうと筆者は考えている。養護施設卒園者に代表される貧困層の子弟を対象とすることは、この二つを統一的に把握する可能性を持つものである。まず小論では「世代的再生産」の結果としての子弟の生活に限定して考察を進めたい。²⁾

さて、戦後日本の貧困研究の主流をなして来たのは、氏原正治郎、江口英一ら（敬称略、以下同様）等を中心とする「社会階層論」³⁾である。彼らの相対的過剰人口論、労働市場論を基礎とする社会階層論は、社会階級・階層構成の中で貧困層が占める位置と比重、及び貧困層の形成過程を把握する方法として大きな有効性を持つ。⁴⁾この際社会階層は、経済上の地位、生活構造、社会的意識などを共通とする社会集団として措定される⁵⁾のだが、実質的には職業階層として分析されることになる。また、生活構造は具体的には消費構造として分析される。これらの点のは

ちに現代の貧困を把握する上で重要な「不安定就労」、「社会的固定費目」などの概念に到る契機となるのであるが、貧困の「長期性」の一端を明らかにするという小論の目的に照らした場合、限界となるところも存在する。

江口はのちに自らの研究を取りまとめた「現代の『低所得層』」⁶⁾の序章において「低所得層」の長期的性格にふれる中で、「現代における『貧困』は、『低所得層』の特殊な労働市場と生活構造を通じて、社会的に再生産され、強化されている」としている。しかし前述の様な社会階層を実質的に職業階層に収れんさせ、生活構造を消費構造におきかえる分析視角からは、のちに検討する様に「生活構造を通じて社会的に再生産され」ている状態は、摘出し難いものであろう。⁷⁾「生活」の中に、どのような貧困への「固定化」の契機が存在するかという課題設定の意味もここに存在する。

従って小論では「生活構造」概念を分析の方法として用いる。今日、「生活構造」概念は多くの論者により論じられ、その意味するところも多様であるが⁸⁾、ここではいわゆる「国民生活研究」から貧困研究へと継承されて来た「生活構造」概念を検討する中で、小論での分析の視点を得たい。

「国民生活研究」において「生活構造」という概念を初めて用いたのは永野順三である。永野は「国民生活の分析」⁹⁾に収められた「『綴方教育』の生活構造」において、「単なる消費生活だけでなく生産生活としての勤労生活と有機的に連関」し、「そうした全体としての生活を規定する背景をも取り入れるところの生活の記録」である「『綴方教育』をとほしての生活の全体的構造的考察」¹⁰⁾を行なったのである。そしてそこにいきいきと描き出された「明日の生命に対する不安と脅威に非常にしばしばおびやかされている」貧乏人の「生活維持の抜け道」は、準戦時下において生活に対する限りない圧迫を受けていた労働者世帯の生活維持のための「抵抗の論理」を意味するものであった¹¹⁾。

また、箆山京は、「生活構造」を労働力の消費と再生産の構造としてとらえる。箆山は生活時間を労働、休養、余暇の三つに分け、余暇部分が社会的に固定化され休養に優先される構造を持つことから、労働力の順当な生産のために「最低休養の確保」を主張したのである¹²⁾。この理論は大河内一男のいわゆる「労働力保全」を旨とする社会政策論と共に「戦時国民生活研究」の主柱となるのであるが、それらはのちに「労働力のもつ生産性を低下させない条件を求めることに終始する」「能率主義的観点」¹³⁾との批判を受けることになる。しかし、同時にそれらは「戦時」という労働者生活への限りない切り下げが行なわれる時期において、ぎりぎりの「抵抗線」を示したもののなのである。

戦後箆山は生計費調査による消費構造の分析から「生活構造」の存在に関する第2の実証を与える。すなわちエンゲル線の変曲、及び所得の低下にもかかわらず消費水準は一定期間同じ水準を保つという「履歴効果」から、「生活構造」がある環境の変動に対してその構造枠を防衛する抵抗性の存在が示されたのである¹⁴⁾。

その後、江口英一は「生活構造論」を「社会階層論」と結びつけ、消費構造の分析から、貧困階層は固有の「生活構造」ないし「生活の枠組み」を「相対的により稀薄にしかもたない」¹⁵⁾ことを示した。このことは「貧困者」ほど生活の圧迫に対する抵抗の構造が弱いということを示し、「歴史性をもち、文化性、社会性をもつ人間の『生活』というものを保持することができない」¹⁶⁾「生活崩壊」の概念を導き出す。

以上、永野、箆山、江口の「生活構造」概念を概括して来たが、一貫して示されて来たことは、

労働者世帯における、労働力再生産構造を基本としながら、なおかつその中にある固有の「生活構造」の存在である。それは永野が提出した生活維持のための「抵抗の論理」の基盤になるべきものである。

小論ではこの点をふまえて「生活構造」を諸個人が自己の生活を維持、防衛しようとする生活固有の枠組みとして措定する。

箒山、江口においては生活構造を労働力再生産構造と措定するところから、具体的な分析は労働力の対価である賃金の家計における消費構造の分析に収れんすることになる¹⁷⁾。しかし、消費構造の分析からは、「生活構造」の存在、消費生活を通して見た「生活の苦しさ」を分析し得ても、永野が示した様な諸個人が「生活の苦しさ」の中でどの様に自己の生活を維持しようとしているのかという具体的な姿、及びその生活維持の方策が「破綻」していく構造が検出し得ない。つまり小論の課題である、「生活」の中にある貧困への「固定化」の契機の検出がなし得ないのである。

では今日、諸個人が自己の生活の維持、防衛しようとする生活固有の枠組みは、どの様に考えればよいのであろうか。一つには分析の対象が賃労働者である限りにおいて、生活を維持すべき所得の源泉である労働のあり方が取り上げられなければならない¹⁸⁾。そして今一つには、個人がとり結んでいる他の諸個人や、社会的機関などとの社会関係が考察されるべきであると考えられる。

今日、「生活」は自己をとりまく社会的な諸関係の中で営まれている。従って、生活を営んで行く上で失職、疫病など何らかの生活上の「事故」が生じた際、その中での生活の維持は、自己がとり結んでいる社会的な諸関係を通じてなされると考えられる。例えば、親族、知人に借金をする、福祉事務所に相談に行くなどの如くである。このような社会的な諸関係には家族、友人、職場での人間関係などの私的な関係と、公的な社会的諸サービスが含まれるであろう。これらの総体を小論では「社会的ネットワーク」と規定する。(なお、小論の直接の分析対象に即しての「社会的ネットワーク」を構成する単位については第3章で展開される。)

従って小論での「生活構造」の分析は、具体的には労働生活と「社会的ネットワーク」の構造の分析を通じてなされる¹⁹⁾。

上記の課題を明らかにするために、小論は以下の構成で展開される。まず第1章では、小論での分析対象である養護施設卒園者の社会的性格を明らかにする。そのために、今日の「養護問題」の性格、及び卒園者の進路の実態について分析を加える。その際に統計的な分析方法が用いられるが、加えて卒園者の中で面接調査が可能だったものの位置づけをする。

第2章では卒園者の労働生活の変遷と具体的な労働の内容、その不安定性を明らかにすることが課題である。第3章では卒園者の「社会的ネットワーク」の構造が明らかにされる。この第2、3章において卒園者の「生活構造」を明らかにするわけであるが、その際、「労働」と「社会的ネットワーク」の相互規定性の如何に注目したい。また、ここではインテンシヴな事例分析が行われるが、可能な限り語られた彼ら自身の言葉で詳細に「生活」を記述することに努める。彼らの「生活」をなるべく客観的かつ生き生きと再構成するためであると同時に、筆者が「生活」の中の「主体的なもの」を検出したいという意図を持つからである。(「むすび」で述べる様に、このことはむしろ小論以後の課題に属する。) また彼らの生活歴を分析する際、生活上の何らかの「事故」があった時点に着目する。自己の生活を防衛しようとする対応が、その時点に最も顕著に表われると考えられるからである。

2) 施設卒園者を対象とする先行研究の分析方法

ところで、小論で分析の対象としている養護施設の卒園者は、小論で明らかにするように「貧困」に陥り、停滞する危険は非常に大きいものであるが、「社会福祉」現場におけるいわゆる「アフターケア」の組織的な対応は、全国的にみても数少ない先駆的な例を見るのみであり²⁰⁾、卒園者の実態の把握や研究の実績も進んでいるとは言い難い。特に東京・大阪以外の実態把握や、貧困研究に積極的に位置づけた研究は皆無に等しい。このような研究の現状の中で、近年なされている数少ない研究報告について、その分析方法をここで整理しておくことは、今後それらの「社会福祉」研究と本研究の接点を求めて行く上で意味があると思われる。

まず養護施設退所児童に対する「アフターケア」の実践について先駆的な施設である青少年福祉センターでは、その研究室の大嶋恭二らを中心に一連の養護施設退所児童を対象とした調査研究を発表しているが²¹⁾、その際児童の生活を把握する基礎的な概念を「適応」に求めている。大嶋らは「人間が生活環境の条件に適合するように環境に対して受動的、追従的、自己変革的な適応」²²⁾である順応と区別した後で、適応を「環境からの要請、条件に適合しながら、更にそれらの環境へ自ら主体的に取り組み、自己充実、自己実現の為に積極的に働きかけていくこと」²³⁾と規定し、その上で「在園時に施設職員との関係が良いもの」「退所後の彼等を取りまく環境が本人にとって支持的なもの」等、いくつかの適応しやすい条件をその調査にもとづいてあげている²⁴⁾。

この場合問題は、具体的にどういう状態を「適応」ととらえるかということである。大嶋らは退所者の生活を職業、余暇、学校、友人等、家族、結婚の場面に分類し、各場面毎にいくつかの設問をもうけ、各設問に5段階による選択枝をつけて点数化し、総合的に高い得点を得たものほど「適応」が高いとしている。しかし、これらの設問のもうけ方や選択枝の作り方に明確な基準が示されているわけではない。また何より個々それぞれに異なった生活上の問題を抱えていると思われる対象者に対し、一律の「理想的な適応」の状態を先験的に設定してしまっているという批判をまぬがれないであろう。こうした視角からは、大嶋らが自らいう所の「環境」へ自ら積極的に取り組む「適応」の姿は明確にし得ない。何故ならば、働きかけるべき「環境」はそれぞれに異なっているからである。事実、大嶋らの選択枝の設定の仕方を詳細に検討すると、そこで高得点を得るものは大嶋らが自ら区別した「順応」にあてはまるものと考えざるを得ない。

古川孝順らは、例えば転職を「積極的な試みとして、もっと肯定的に捉えることは出来ないのか。」と大嶋らの適応概念を批判する中で「一定の時間的履歴性、空間的な広がり、そして統合性をもったひとつの固有なまとまり」としての生活を評価するために「生活史」の分析の必要性を主張している。²⁵⁾しかしその分析視角が「人生の初期のある時期を養護施設という相対的に、特殊な生活環境で過した退園者達の自己形成」のプロセスの中で「自己の施設体験とどのように対峙していったか」ということに限定されているため、古川の「養護問題を成立させる基盤は現代資本主義社会の家族に一般的に存在する」²⁶⁾という基本的認識の正しさにかかわらず施設児童の問題を特殊なものとしてのみ理解することに終る危険をはらんでいる。

また根本博司らは、「施設生活のどのような要因が、どのような影響を出身者に残しているのか」を明らかにすることによって「施設養護の意味を問いなおすこと」を目的として卒園後約20年におよぶ生活歴のききとりを試みている。²⁷⁾その生活歴を評価する際の基本的な視角は「生活の安定度」であり、それを健康、職業、経済、住宅、家族の5領域における基本的ニーズの充足度で測定している。しかしこの5領域をとり上げる理由は、岡村重夫の「7つの基本的要求」のうち

5つをとり上げたと述べる以上には明確にされず、その「充足度」の内容もきわめてあいまいかつ恣意的である²⁸⁾。

以上、養護施設卒園者の生活を対象とした主な先行研究において、その分析方法について検討したが、個々の研究の課題に即してみてもその「生活」把握の方法にそれぞれ問題点を抱えているといえる。

注

- 1) 今日における「貧困」の大量存在については、例えば以下の調査研究を参照のこと。高山武志「大都市における低所得層の調査」1976年、北海道社会福祉協議会、江口英一「都民の社会階層構造とその変動」1973年、東京都企画調整局、(同著「現代の低所得層」上巻1979年、未来社)これらの調査報告書は前者は札幌市、後者は東京都中野区において、いずれも生活保護基準及びその1.4倍を「低所得層」測定尺度として用いて行われている。その結果は、いずれも大都市住民の約3割は「低所得層」に属するというを示している。
- 2) 1960年代の英米における「貧困の再発見」や注1)の調査研究で「再発見」されたのは、子供を養育するところの‘working poor’であった。これらは今世紀初頭に B.S.Rowntree が示した労働者の生活周期が今日なお基本的に貫徹していることを示すと同時に、「貧困」な状態におかれている子供の多さを示している。特に英国ではこの点に注目して「貧困の世代的循環論」— cycle of deprivation —の研究や「貧困児童」を対象とした積極的優先政策が教育・社会政策の中に位置づけられている。(これらの諸研究、諸政策の評価については、さしあたり高山武志の諸論考、「アメリカの貧困児教育」北大教育学部紀要38号1981年所収、「教育と貧困」1981年、江口英一編著『社会福祉と貧困』法律文化社所収、「英国の貧困概念— deprivation について—」1981年、北大教育学部産業教育計画研究施設報告書20号所収などを参照)

しかし日本では小川利夫が指摘するように(『教育福祉』問題の回顧と反省—高度成長期における)吉田久一編『戦後社会福祉の展開』1976年、ドメス出版所収)これまで「貧困研究」の主流をなして来た社会政策論的アプローチではこの問題は見すごされて来た。そこでは「世帯主」の職業が主な関心の対象だったのである。

この中で麓山京が昭和30年代に報告した一連の調査研究の中で示したことは、貧困層の子供は学業成績の面で相対的に不利を負っており、しかも一般層の子供との格差は学校に長くいる程拡大される傾向があるということであった。(例えば著作集第6巻『貧困児童の教育』ドメス出版、に収められた諸論考を参照)この事実は C. Jencks がコールマン調査の再分析を通じて投げた問題と一致する(C. Jencks ‘Inequality’ 1972, 橋爪, 高木訳「不平等」黎明書房, 1978年)。またこの事実は「学校という Black Box の中で何がおこっているのか」という「新しい教育社会学」の議論を必然化させる。「新しい教育社会学」の流れについては J. Karabel, A. H. Halsey 「教育社会学のパラダイム展開」同編『教育と社会変動』1977, 潮木他訳1980年, 東京大学出版会所収を参照)これらの指摘は教育機会の拡大と共に階層間の流動性が高まるという安易な「教育投資論」に対する反論として重要な意味を持つ。また高山武志は今日なお大きく存在する「貧困の世代的循環」の傾向と、それを促進しているかに見える「教育」の役割を指摘している。(高山「教育と貧困」前掲)

この様に貧困の世代的再生産を考察する場合「教育」について分析を深めることは重要な意味を持つ。しかし、その前提として「生活」把握の方法が問われなければならないだろう。「貧困」とは様々な不利を負い、無権利状態におかれた「生活」であると筆者は考える。これまで「貧困研究」で主に問題にされて来たのは、ある個人の、または妻や子供を含めた「世帯」の貧困であり、小論において

も「個人」に生活把握の範囲を限定している。

しかし世代的に再生産される過程を含めて「貧困」を把握しようとするならば、「生活」を世代間にまたがる広い概念として捉えなおす必要があると思われる。つまり世代的に再生産されている「貧困層の生活」を把握することである。その際、文化人類学から「貧困の文化」を提示する O. Lewis の議論や、『貧困の文化』1959、高山智博訳1970年、新潮社、「ラ・ビーダ」1965、行方、上島訳1970年、みすず書房、などを参照) 労働者階級文化論を基礎にして下層労働者階級の世代的再生産を論じる P. Willes の議論（『Learning to Labour』1977、熊沢、山田訳『ハマータウンの野郎ども』1985年、筑摩書房）は大きな示唆を与えると考えられる。

- 3) 例えば、氏原正治郎・江口英一「都市における貧困の分布と形成に関する一資料(-)」1956年、社会科学研究所第8巻第1号所収、東京大学社会科学研究所調査報告第1集「都市における被保護層の研究」1966年、などを参照のこと。
- 4) 同時に貧困概念を貧困線からみた上下でのみ理解する方法から解放する意味を持つが、小論ではそこには直接ふれない。
- 5) 前掲「都市における被保護層の研究」
- 6) 江口英一「現代の『低所得層』」上巻、1979年、未来社
- 7) 江口は「低所得層」第4章において「固定化」の論理を、1)相対的過剰人口を背景とする労働市場における労働需要のあり方、2)世代再生産の過程での家族の分解、解体、3)低位な社会保障給付の3点に整理している。この2)、3)が江口の生活構造概念にどう位置するのかは明示的ではない。
- 8) 今日、青井和夫、松原治郎、副田義也等を始めとして、社会学の領域で「生活構造論」が取り上げられている。(例えば青井、松原、副田編著『生活構造の理論』1971年、有斐閣等を参照)しかし機能的要素と構造的要素のマトリックスの中に「生活体系」を整理する青井、松原等にせよ、労働力の「循環式」を取り上げる副田にせよその対象は「生活一般」であり、その個人がおかれている社会階層的位置は捨象されている。これに対し小論で対象としているのは貧困者・貧困層の生活構造であり、「生活構造」概念も社会階層論的把握を前提としている。従ってまた、小論で行なわれている分析は、社会階層概念を単なる分析概念ではなく、生活構造を通して実体として把握する作業として位置づく。
- 9) 永野順三「国民生活の分析」1939年、時潮社
- 10) 同上 p. 276～p. 277
- 11) この点について中鉢正美は「労働者とその家族が日常生活の知恵を働かせて日々の暮らしを賄っていく姿を、典型的かつ具体的に描きだそうという試み」の「記念すべき業績」と永野を評している。
(中鉢正美『現代日本の生活体系』1975年、ミネルヴァ書房、p. 30) また、布施鉄治等は「矛盾に満ちた社会生活の中での生活防衛の実相」と述べており(布施鉄治・岩城宏之・小林甫『社会学方法論』1983年、御茶の水書房 p. 96)、宇野正道は「庶民の〈生活の叡智〉に基づく」『消極的な抵抗』ととらえている。(宇野正道「庶民生活の全体像を求めて」・生活研究同人会編『近代日本の生活研究』1980年、光生館、所収)
- 12) 筈山京「国民生活の構造」1943年、復刻著作集第5巻、1984年、ドメス出版
- 13) 関谷耕一「戦時における国民生活研究」『社会政策学の基本問題』大河内一男先生還暦記念論文集第1集1966年、有斐閣、p. 295。なお布施等は前掲書において、永野からの「狭小的展開」と評している
- 14) 筈山京著作集第2巻『最低生活費研究』に収められた諸論考を参照のこと。なお、こうした「エンゲル線の変曲」「履歴効果」については、森田優三、中鉢正美なども同様の指摘を行なっているが、

中鉢はその後『生活構造論』1956年、好学社、『現代日本の生活体系』1975年、ミネルヴァ書房、等で独自の「生活構造論」を展開している。特に後者は「産業構造、社会構造の急激な変動」に「各個人がいかにしてこれに主体的に対応するかという切実な問題意識（同書はしがき）」から、生活構造の変動と「再構成」の理論を「ゲシュタルト心理学的方法」で明らかにするというものである。

- 15) 江口英一「貧困層と生活構造」 笹山京教授還暦記念『社会福祉と生活構造』1972年、光生館所収 p. 160
- 16) 江口英一「現代の低所得層」 中巻 p. 270,
- 17) 江口は近年、家計における「社会的固定費」の増大による家計の硬直化、自律性の欠如に今日の貧困の姿を検出する。(例えば江口他「消費生活の展開とその現時点」 講座今日の日本資本主義第9巻 1982年、大月書店所収などを参照) また江口、笹山の生活構造、社会階層概念にはそもそもの着想の相違が見られるが、小論では同一性に注目している。相違性については、例えば鎌田とし子「貧困研究における社会階層の概念」 1970年、日本社会学会、『社会学評論』20巻3号所収を参照のこと
- 18) また、労働生活を検討することは、前述の江口等の「社会階層論」の中に小論を位置づける作業でもある。
- 19) 園田恭一は「都市社会学者の生活構造の規定の仕方は個人（集団）を中心とした生活諸関係のネットワークとして把握しようとしたものが多いといえよう」としているが、(「生活の構造」 同編『生活原論』1971年、ドメス出版所収) こうした社会学的アプローチの生活構造概念と小論でのそれが異なるものであることはいうまでもない。前者は「生活諸関係」の構造として生活を把握しようとしているのに対して、小論では「生活諸関係」が生活を営んで行く上に持つ意味を問題にしているのである。
- 20) 「アフターケア」専門機関としては、東京の「青少年福祉センター」と「青少年とともに歩む会」、大阪の「大阪児童福祉事業協会アフターケア事業部（働く青少年励ましの会）」が知られている。
「青少年福祉センター」は高等職業訓練校をあわせ持つ収容・宿泊施設で1958年の創立以来30年に近い歴史を持っている。またその研究室の紀要である「アフターケア研究」が順次刊行されており、実践・研究共に先駆的な存在である。
「青少年とともに歩む会」は、3軒の地域の中に分散した「家」で行なわれる養護形態グループホームをとる収容・宿泊施設であり、1967年の開設である。
これらの2ヶ所が共に収容・宿泊施設であるのに対し、大阪の「励ましの会」は、大阪府下の全ての養護施設卒園者の就職先を組織し、それを通して「アフターケア」の充実を計る民間機関である。
これらの3者はそれぞれに特徴を有しており、「アフターケア」の形態の先駆例として今後さらに検討されるべきであろう。なお、それぞれの概略については、「青少年福祉センター通信特集号、20年の歩み1978」、「青少年とともに歩む会事業報告「ともしび」」各号、及び北原かずえ「児童収容（主として養護）施設退所児童の後指導（アフターケア）と大阪の歩み」『大阪市社会福祉研究』第6号 1983年所収、山縣文治「中学で養護施設を出て働く児童の生活とアフターケア」1986年日本社会福祉学会『社会福祉学』第27-2号、などを参照のこと。
- 21) 例えば、青少年福祉センター「アフターケア研究」79-I, 79-II, 80-I, 81-I, 82-I, 82-IIなどを参照。
- 22) 「アフターケア研究」80-I 大嶋恭二, 和田ミトリ, 山下道子「養護施設児童の社会適応に関する調査」1980年
- 23) 同上 p. 12

- 24) 同上
- 25) 古川孝順, 庄司洋子, 大橋謙策, 村井美紀「養護施設退園者の生活史分析」1983年 日本社会事業大学紀要『社会事業の諸問題』29号所収 p. 162- p. 163
- 26) 古川孝順「児童問題の構造」1972年, p. 260, 社会学セミナー第3巻『家族, 教育, 福祉』有斐閣, 所収
- 27) 根本博司他10名「児童施設出身者の社会生活の特質に関する研究」1985年, 安田生命社会事業団研究助成論文集第20号所収。
- 28) 例えば「比較的恵まれた社会生活」を送っているグループへの分類に際し, 職業は「能力相応, それ以上の地位にいてその仕事に満足している」ということが, 家族については「自分で納得した結婚をし, 子どももあり, 夫婦関係にも問題はない」といったことが指標とされる。また, 研究の目的として, 「施設養護の意義を問う」としているが, 対象者が卒園したのは約20年前であり, 現在の卒園者のかかえている諸問題とどう接点を持つのか明示的ではない。

2 調査実施の概要

調査は札幌市内及びその近郊の9つの養護施設の卒園者に関し各施設の職員が記入する第1次調査と卒園者に対する面接調査である第2次調査の二段階に分けて, 札幌市内及びその近郊の養護施設の連合体である「札幌養護施設研究会(以下「札養研」)」と北海道大学教育学部教育計画研究グループとの共同で行われた。それぞれの調査の概要は以下の通りである。なお, 調査の対象は共に昭和50年度から60年度の卒園者(中学卒業以上の修学段階で施設を退園したもの)である。過去の10年間に時期を限定したのは, 高度成長期以降という时期的な等質性を得ること, 及びそれ以前になると実際上面接調査を行うことがかなり困難になることによる。

第1次調査

<目的>

養護施設入所児童の入所の背景と卒園後の進路の動向を統計的に把握すること。

<調査対象>

札養研の9つの養護施設を昭和50年度から60年度までに卒園した427名全てを対象とした。

<調査方法>

個々のケースについて施設に保管されてある児童カルテや育成記録を参考にして, 各施設の職員が調査票に記入した。調査票の配布, 回収は郵送にて行った。調査票の内容検討, 記入方法の確認については数回に渡って各施設の職員と会合を持った。

<実施時期>

昭和60年6月末日調査票配布。同8月末日調査票回収。

第2次調査

<目的>

養護施設卒園者の生活や意識をインテンシヴに観察すること。

<調査対象>

第1次調査の対象者の中から, 札幌近郊のF園の卒園者52名, 過疎地にあるG学院の卒園者38名を対象にした。この2つの施設を対象としたのは, 後述する様に施設のある地域により一般の高校進学率や就労の動向が異なった傾向を持つことから, 養護施設の卒園者の生活が出身施設により異なる点を持つのではないかと考えたからである。実際に面接が終了したもの23名の内分

けにはF園の卒園者20名，G学院の卒園者3名であり，地域差の分析は直接には行なえなかった。

＜調査方法＞

出身施設から卒園者に連絡を取り，面接調査に同意が得られたものについて個別面接調査を行った。後述する様に，連絡の取れたもので面接を拒否されたものは皆無に近いが，反面施設から連絡を取り得るものに面接対象が限定されてしまった。しかし，現状では他に卒園者の居所を知る方法はなく，このことはやむをえない。

面接では原則として一対一としたが，卒園者の希望で複数の卒園者と同時に面接を行ったり，また施設職員の同席で面接を行った例もある。面接内容は了解を得てテープレコーダーに記録したが，テープレコーダーへの記録を拒否されたり，その使用を控えた方が信頼関係を得やすいと判断した場合は，調査票への記入のみにとどめた。

面接地は札幌及びその近郊を始め，東京，横浜，岐阜，旭川に及び，面接場所も出身施設の一室，卒園者の自室，職場，寮の一室，飲食店等被面接者の指定する多様な場所に及んだ。面接は松本を含む2名で行った1例を除き，全て松本が行った。面接時間は大部分1時間から2時間であり，2時間を超えたものも数例見られた。

＜実施時期＞

昭和60年9月下旬～11月中旬

第1章 養護問題と卒園者の進路

1. 養護問題の社会的性格

養護施設とは，「乳児を除いて，保護者の無い児童，虐待されている児童，その他環境上養護を要する児童を入所させてこれを養護することを目的とする施設」と児童福祉法に定められる施設である。本節の課題は子弟を養護施設に入所させざるを得なかった養護問題を担う世帯の社会的性格の分析を通して，養護問題と「貧困」とのかかわりを明らかにすることである。主な分析の柱は世帯主の職業，世帯類型，社会サービスとの関係である。

表1-1は調査対象者の出身地域を見たものである。札幌市と，札幌圏で合わせて半数を超え，産炭地域が約17%，その他の道内各地が $\frac{1}{4}$ 強となっている。札幌市及びその近郊の施設が大半を占めることから，札幌市，札幌圏が多数を占めるのは当然であるが，むしろ，出身地が札幌近郊

表1-1 入所直前の居住地

地域	人数	人 数	%
札 幌 市		115	36.7
札 幌 圏		44	14.1
産 炭 地		52	16.5
その他道内		90	28.7
道 外		1	0.3
不 明		12	3.8
計		314	100

表1-2 入所時の世帯主の続柄

実 父	188
実 母	71
継 父	22
継 母	5
兄 姉	1
弟 妹	—
お じ，お ば	6
祖 父 母	18
そ の 他	3
計	314

表1-3 入所年度別世帯主の職業

入所年度 職業	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計	%	～47	48～
自 営				1	2	3	1		1						1	3		1		13	5.3	7(5.5)	6(5.2)
専門的労働者						1					1				1	1				4	1.6	1(0.8)	3(2.6)
事務員・公務員						1		1		1										3	1.2	2(1.6)	1(0.9)
工 員		1		2		3	1	3	3	2		2		1	1	1				20	8.2	10(7.8)	10(8.6)
抗 内 夫		1			1	4	3	3			1						1			14	5.7	12(9.4)	2(1.7)
運 転 手			2		1	3		2	3	3			1			2	1			18	7.4	8(6.3)	10(8.6)
職 人			3	1	1			2	3	1		2	1			1		1	1	17	7.0	7(5.5)	10(8.6)
販売サービス					1		1		3				1			1		1		8	3.2	2(1.6)	6(5.2)
サ ー ビ ス	1	1		1			1			2		1	2	2				1	2	14	5.7	4(3.1)	10(8.6)
単純屋外労働	3	4	2	2	5	9	8	6	2	5	2		3	2	2	3	1			59	24.2	39(30.5)	20(17.2)
公安サービス								2												2	0.8	2(1.6)	0(0.0)
そ の 他				1						1										2	0.8	1(0.8)	1(0.9)
無 職	4	1	1	7	4	4	9	3	4	2	6	5	9	2	1	4	3	1		70	28.7	33(25.6)	37(31.9)
小 計	8	8	8	15	15	28	24	22	20	16	10	10	17	7	6	16	6	5	3	244	100.0	128 (100.0)	116(77.3) 100.0
不 明	4	2	2	5	4	12	5	2	4	5	6	4	2	1	2	4	2	3	1	70		36	34
合 計	12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4	314		164	150

(割合は不明を除いて除してある)

表1-4 入所年度別世帯主の学歴

学歴	入所年度	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計
小 卒 以 下		1	2	1	2	1	1	2	1	3		2	1	1	2	1	3	1			25(11.5)
中学中退(高・小中退)		1	2	1	1	2	8	2		4	3	2	1	2	2						31(14.2)
中 卒		3	4	2	6	5	15	10	13	10	10	4	4	10	3	2	11	5	4	2	123(56.4)
高 校 中 退		1					1	1			1	3	1				1	1		1	11(5.0)
高 校 卒					1	1	1	2	3	1	3		1	2	1	2	2	1	1	1	23(10.6)
専 門 学 校 卒																	1				1(0.5)
大 学 ・ 短 大 中 退								1					1								2(0.9)
大 学 ・ 短 大 卒							1	1													2(0.9)
不 明		6	2	6	10	10	13	10	7	6	4	5	5	4		3	2		3		96
計		12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4	314

(割合は不明を除いて除してある)

以外の地理的に遠方にあるものが $\frac{1}{4}$ を占める点が注意を引く。また、産炭地出身の者が約2割を占めることは札幌市近郊における養護問題の背景に地域的な貧困問題があることを示している。

入所時の世帯主の続柄は表1-2の通りである。(入所時の家族構成を見て、その世帯の主たる生計維持者を世帯主とした。なお同一世帯から何人かの兄弟が入所している世帯は一つの世帯として数えた。その為、世帯数と子供の数は異なる。)その世帯主の職業を入所年次別に見たのが表1-3である。不明、無職を除くと、単純屋外労働に就いていた者が多くを占める。専門的

表1-5 入所年度別世帯主の年齢

年齢 \ 入所年度	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計
6 ～ 11			1																	1(0.4)
12 ～ 15										1										1(0.4)
20 ～ 29	4	2	3	4	2	4		4	1	1	1	1	3							30(10.2)
30 ～ 39	5	6	5	10	9	19	14	14	7	10	5	4	5	3	2	8	3	4	2	135(45.8)
40 ～ 49	1	1		2	4	11	10	3	11	8	4	8	3	3	4	9	3	4	2	91(30.9)
50 ～ 59	1	1		3		2	1	1	1		3	1	2		2	1				19(6.5)
60 ～					4	2	2	2	3	1	1		3							18(6.2)
N. A.	1		1	1		2	2		1		2		3	2		2	2			19(6.5)
計	12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4	314(100.0)

表1-6 入所時の世帯類型

父+母+子	5	40	父+子	35	124	その他(夫婦)+子+祖父母	1	6
子× 2	14		子× 2	40		その他(夫婦)+子× 3+祖父母	2	
子× 3	7		子× 3	35		子× 4～+祖父母	1	
子× 4～	14		子× 4～	14		その他(単)+子+祖父母	1	
継父+母+子	4	40	母+子	23	70	子× 2+祖父母	1	14
子× 2	9		子× 2	19		祖父母+子	2	
子× 3	4		子× 3	12		子× 2	3	
子× 4～	3		子× 4～	16		祖父母(単)+子	3	
父+継母+子	4		その他(夫婦)+子	1	3	子× 2	3	6
子× 2	5		その他(単)+子× 2	1		子× 3	1	
子× 3	4		子× 3	1		子× 4～	2	
子× 4～	4		父+母+子+祖父母	1	11	その他の類型	6	314
継父+継母+子	1		父+子+祖父母	4		計		
子× 2	1		父+子× 2+祖父母	2				
子× 4～	1		父+子× 4～+祖父母	1				
			母+子+祖父母	3				

労働者や、事務員、公務員など相対的に安定的な職業に就いていた者は少なく、現業労働者の下層に位置する者が多い。また、いわゆる「高度成長」の終焉を告げるとされる48年のオイルショックを境に坑内夫、単純屋外労働に就いていた者が減少し、かわってサービス業、無職層が増加しており、道内の鉱業、建設業の構造的な不況を反映している。

また、現在の職業的位置をある程度規定する学歴を表1-4を見ると、入所年次が近づくにつれて高学歴になる傾向を示しているものの、高校卒以上の者は不明を除くと全体の1割強にすぎず、逆に中卒未満の者が半を占めている。中卒、高校中退で全体の6割となっており、表1-5にみる様に、学歴が相対的に近いと思われる高齢者の多いことを考慮しても、なお全体的にかなり低い学歴水準にある¹⁾。

表1-7 世帯類型の推移

世帯類型	入所年度	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計(%)
父 + 母			3	3	3	5	6	3	3	2	3	2				4	1	1	1		40(12.7)
再 形 成		1	1	3	1	1	5	1	1	3	5		1	3	1		7	1	4	1	40(12.7)
父 子		4	3	2	8	8	19	17	13	10	6	9	7	5	2	1	6	2		2	124(39.5)
母 子		7	2	2	6	1	6	5	2	5	6	1	5	5	4	2	4	3	3	1	70(22.3)
その他+子						1			1			1									3(1.0)
三 世 代					1	1	1			1			1	3	1	1	1				11(3.5)
その他+子+祖父母						2	2	1				1									6(1.9)
祖 父 母			1		1	2		1		3	1	2		2			1				14(4.5)
その他の類型						1		3						1				1			6(1.9)
計		12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4	314(100.0)

(再形成世帯とは継父母を含む世帯を意味する)

表1-8 住居の形態

住 居 の 種 類	件 数(%)
持 家	53(16.9)
借 家	86(27.4)
公 営 住 宅	39(12.5)
民 間 ア パ ー ト	30(9.6)
借 間	65(20.7)
そ の 他	20(6.3)
不 明	21(6.6)
計	314(100)

表1-9 社会保険の加入状況

健 保	28(14.9)
国 保	41(21.9)
そ の 他	4(2.2)
未 加 入	114(61.0)
不 明	127
計	314

(割合は不明を除いて除してある)

次に職業と共に、その世帯の生活の状態を表す指標として世帯類型を検討する。表1-6は入所時の世帯類型を養育者と子供の数の組み合わせ別にまとめたものである。また表1-7は世帯類型の推移を入所年次別に見たものである。まず子供の数が3人、4人以上といった多子世帯が相対的に多く、不安定な就労のもとでの「多子」が、子弟の養育条件を厳しいものになっているといえる。

単親世帯が全体の6割を占めるが、特に父子世帯に集中しているのが一貫した特徴である。一般に母子世帯の経済的貧困が指摘される中で、母子世帯には不十分なながらも「母子福祉法」に基づく社会サービスが存在するが、父子世帯を対象とする社会サービスは皆無に等しいのが現状である。こうした社会サービスの欠如が、生活基盤の脆い父子世帯の子弟の養育を困難なものにし、養護問題として現象すると考えられる。

生活を営む場である住居を表1-8に見てみると、借間、民間アパートに居住していた者が全体の3割を占め、相対的に劣悪な住環境であったことが予想される。公営住宅に入居し住宅面での公的サービスを受けていた者は一割強にすぎない。

次に生活を行っていく上で最も基本的な社会サービスの一つである社会保険の加入状況を見た

表1-10 生活保護受給の有無

	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計
受給していた	3	4	1	8	5	10	8	6	8	8	6	6	8	3	4	8	5	3	1	105(42.7)
受給歴あり (結婚前)			1						1			1								3(1.2)
受給歴あり (結婚後)	1	1	1		2		1	2	2	1	1	1	2		1					16(6.5)
受給歴なし	2	2	5	8	10	17	8	10	12	8	6	3	8	2	4	10	2	3	2	122(49.6)
小計	6	7	8	16	15	29	16	17	23	18	14	10	17	7	8	19	7	6	3	246(100.0)
無回答																				
受給歴不明	6	3	2	4	4	11	13	7	1	3	2	4	2	1		1	1	2	1	68
合計	12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4	314

(割合は不明を除いて除してある)

表1-11 入所年度別世帯主の健康状態

健康 \ 入所年度	～40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
良	7	5	7	7	8	23	11	14	12	7	6	5	9	5	5	12	2	4	2		151(60.9)
不良	2			5	5	3	6	2	4	2	4	2	3			2	3	2			45(18.1)
入院	1	2	1	5	3	8	6	3	1	3	3	3	3	3	2	3	1	1			52(21.0)
不明	2	3	2	3	3	6	6	5	7	9	3	4	4		1	3	2	1	2		66
計	12	10	10	20	19	40	29	24	24	21	16	14	19	8	8	20	8	8	4		314

(割合は不明を除いて除してある)

のが表1-9である。今日の国民皆保険体制の中で、不明を除くと全体の6割強が未加入であるということは、先程の父子世帯の比率の高さと共に、これらの世帯が公的社会サービスから遠ざけられ、その網の目から漏れている層であることを示している。

表1-12 入所時の親族数

親族数	人数	%
なし	138	44.0
1	52	16.6
2	52	16.6
3	30	9.5
4	16	5
5	16	5
6	9	2.8
9	1	0.3
計	314	100

これまで述べて来た生活条件の低位性は、必然的に生活保護制度との交流を招く。表1-10は生活保護受給歴の有無を年次別にまとめたものである。不明のものを除くと生活保護受給歴のあるものは一貫して約半数にのぼる。このように養護問題を担う世帯の約半数は「公認の貧困層」であるが、生活保護制度以外に「低所得対策」が少ない現状の中で、なお生活保護の「補捉率」の低さが指摘されていることを考え合わせれば²⁾、受給歴のない世帯も低位な消費水準にあることが予想される³⁾。

表1-11は入所時の世帯主の健康状態をみたものであるが、不明を除くと全体の約4割が不良ないし入院の状態にあったことがわかる。前述の様に、社会保険に未加入のものが多くことを考え合わせれば、疾病はこれらの世帯の生活を「崩壊」に導く大きな要因なのである。

こうした極めて不安定な労働、生活状態にある世帯に何らかの「生活上の事故」が生じ子弟の養育が困難になった場合、それらは普通家族間や近隣等の社会的な「ネットワーク」の中で対処されていくと考えられる。そこで入所時の家族以外の親族数を示したのが表1-12である。ここで注意をせねばならないのは、ここに示された親族数は児童相談所の相談員が把握し得た親族数だということである。児童相談所の相談員は、養護相談を担当した場合、まず何とか親族内で処理させようと親族関係を把握して連絡を取る努力をすることを考えれば、半数近くが親族関係が把握され得ず、2人以下を合計すると8割近くになるということは、親族の「ネットワーク」が薄い世帯が多いことを示している。

これまで述べて来たように、養護問題を担う世帯は、生活基盤が脆く、社会サービスからも遠ざけられた今日の「貧困層」に位置する。養護問題は「貧困層」の子弟の養育上の諸困難を集中的に担っている問題なのである。

注

- 1) 20歳代の世帯主が、特に最近少ないのは、入所した子供がまだ在園している者が多く、調査の対象にならなかったからである。一般には、乳幼児の増加と父母の若年化が指摘されている。(例えば増原良二「養護施設戦後30年の歩み」全国養護施設協議会編『養護施設30年』1976年所収、などを参照)
- 2) 例えば、杉村宏「今日の生活保護問題」賃金と社会保障901、1984年11月上旬号、同「生活保護受給世帯の実態」、江口英一編『社会福祉と貧困』1981年法律文化社、所収、など参照
- 3) 生活保護問題と養護問題は、共に現代の貧困の表象として把握される。しかし、子持ちの生保世帯は一般に生保を受給しながら子供を養育していく中で「家族」として最後の一线を守っているように思われる。しかし、生保を受給しながらなお子供を養護施設に入所させざるを得ない世帯は、生保受給によっても「家族」としてのまとまりを維持し得なかったのであり、いわば「生活保護層」からも「脱落」した世帯と言えるかも知れない。また、養護施設の措置基準は生活保護基準に基づいて算定されているが、高校進学率が生保世帯の方が高い他は、子弟の養育条件が具体的に比較、検討された例を見ない。

2. 養護施設卒園者の進路

本節の課題は養護施設児童の卒園後の進路の全体的な状況を把握することである。主要な論点は高校進学と卒園後の初職である。加えて、面接調査を行なうことが出来たグループが全体の中でどのような位置にあるのかを明らかにしたい。

1) 高校進学をめぐる問題点

今日養護施設の関係者の間では、卒園者の「アフターケア」の問題は、施設児童の高校進学問

表1-13 中卒養護施設児童の進路

	養護施設 中卒児童 総数	高 校 進 学			就 職	職 業 訓 練 校	各種学校 そ の 他
		全 日 制	定 時 制	計			
1950	278(100)	38(13.7)	23(8.3)	61(21.9)	—	—	—
1951	368(100)	54(14.7)	23(6.3)	77(20.9)	—	—	—
1952	498(100)	77(15.5)	23(4.6)	100(20.1)	—	—	—
1953	531(100)	57(10.7)	34(6.4)	91(17.1)	—	—	—
1954	614(100)	49(8.0)	29(4.7)	78(12.7)	—	—	—
1955	1,069(100)	93(8.7)	27(2.5)	120(11.2)	—	—	—
1956	1,164(100)	110(9.5)	37(3.2)	147(12.6)	—	—	—
1957	1,324(100)	100(7.6)	37(2.8)	137(10.3)	—	—	—
1958	1,332(100)	26(9.5)	53(4.0)	179(13.4)	—	—	—
1959	1,499(100)	108(7.2)	56(3.7)	164(10.9)	—	—	—
1960	1,322(100)	127(9.6)	58(4.4)	185(14.0)	—	—	—
1968	3,088(100)	290(9.4)	430(13.9)	720(23.3)	2,099(68.0)	175(5.7)	94(3.0)
1969	—	(9.4)	(13.9)	(23.3)	—	—	—
1970	2,687(100)	253(9.4)	305(11.4)	558(20.8)	1,660(61.8)	137(5.7)	34(1.3)
1971	—	(10.6)	(12.8)	(23.4)	—	—	—
1973	1,943(100)	379(19.5)	423(21.8)	802(41.3)	887(45.7)	109(5.6)	140(7.2)
1974	1,053(100)	206(19.6)	144(13.7)	350(33.2)	614(58.3)	49(4.7)	40(3.8)
1975	1,000(100)	250(25.0)	146(14.6)	396(39.6)	511(51.1)	63(6.3)	30(3.0)
1976	952(100)	248(26.1)	134(14.1)	383(40.1)	447(47.0)	80(8.4)	43(4.5)
1977	2,626(100)	—	—	1,407(53.6)	—	—	—
1980	2,433(100)	765(31.4)	405(16.6)	1,170(48.1)	924(38.0)	192(7.9)	147(6.0)
1982	2,337(100)	823(35.2)	373(16.0)	1,196(51.2)	874(37.4)	138(5.9)	129(5.5)
1984	2,443(100)	864(35.4)	406(16.6)	1,270(52.0)	877(35.9)	152(6.2)	144(5.9)

資料 1982年までは小川利夫他編著『ぼくたちの15歳』の付属資料より転載。

1984年は、『第39回全国養護施設長研究協議会協賛資料』より転載。

1960年以前は小川利夫調査。1968年以降は全養協査。1977年は行管庁調査による。

1960年以前は就職・職業訓練校・各種学校その他の人数は調査されていない。

題との関わりで議論されている。この背景には、全国的な高校進学率の上昇にもかかわらず養護施設児童の多くが中卒で「自立」を余儀なくされていく中で「中卒で就職していった子供の多くが社会生活に適応できず失敗を繰り返しながら、いわゆる“社会の落ちこぼれ状態”になっていくのを見ていた¹⁾」養護施設現場の職員達の危機感が大きく存在している。今日、高校進学率の上昇に伴い中卒非進学者をめぐる状態が相対的に悪化していく中で、この危機感是的を得たものと言わねばならない。

表1-13は、全国的な養護施設児童の高校進学率の推移をみたものである。全日制高校への進学率は、今日でもなお35%程度にとどまっている。また、図1-1は本調査対象児の進学率の推移である。10年間を通して、4割を前後しており多くの児童は中卒でいわば強制的に「自立」さ

図1-1 中学卒業時の進学率

(道内・全国は、学校基本調査より作成)

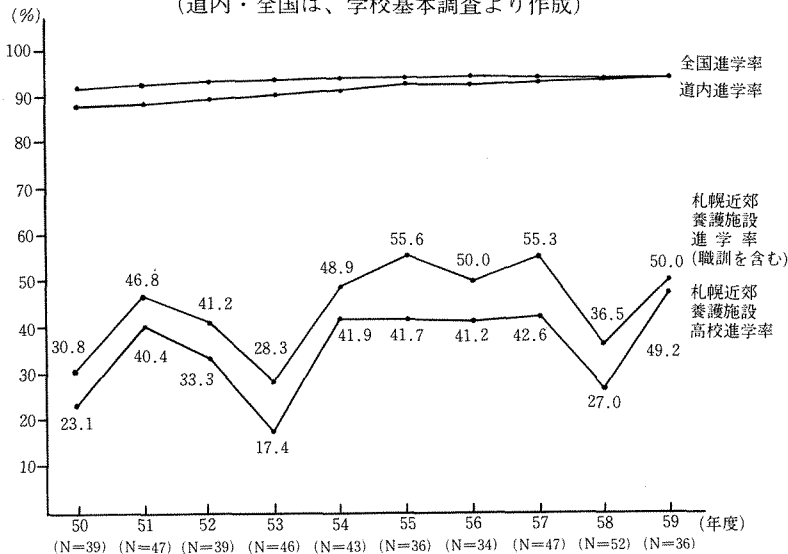


表1-14 中三時の成績

成績	件数	%
無回答	9	2.1
上	11	2.6
中	115	26.9
下	292	68.4
計	427	100.0

せられていることがわかる。多くの施設出身児童は、中卒であることと施設出身であるといういわば二重のハンディを負っている訳である。

こうした低い進学率の理由を、小川利夫は 1) 低学力、低学習意欲 2) 施設児童には高校進学に必要な資金が無いこと 3) 高校進学に伴う施設の受け入れ体制の問題を挙げている²⁾。また、古川孝順らは養護施設への全国的なアンケート調査から、高校進学率の高い施設と低い施設の比較検討を通して「施設内部における具体的な進路指導のあり方」をつけ加えている³⁾。

筆者も高校進学率の低い理由として上記4点が重要であると考え。その際、下記の点に留意する必要がある。まず「低学力」の問題についてである。表1-14は第一次調査の対象者の中3時の学校成績を施設職員がだまかに判定したものである。「下」のものが7割近くを占め、全体的に「学力」は低い。しかし、今日高校進学率が95%に近く「低学力」のみでは高校進学を阻害する要因とはなり得ない⁴⁾。従ってこの問題はむしろ高校進学後の指導も含めた「低学習意欲」の問題として把握されるべきである。

次に修学の為の費用は、現在全国レベルでは1973年、5月の厚生省通達による「特別育成費」⁵⁾のみである。表1-13で73年から74年にかけて高校進学率が大きく増加しているのは、この特別育成費によるところが大きいと考えられ、積極的な意味を持つ。しかしこの費用では公立高校で

の修学費用しか認めず、独自の措置を取っている東京都など一部の自治体を除いては、私立高校への進学は実質的に不可能である⁶⁾。私立高校を含めてほぼ実費支給に近い東京都では全日制高校進学率は5割に近く⁷⁾、高校進学に際して費用の問題が大きいことを示している。

受け入れ体制の不備については、養護施設は本来高校生がいることを前提には建てられておらず、施設設備の面で非常に高校生が生活しにくい状態にある。これは、福祉施設の最近措置基準の大幅な見直しが必要であることを示している。また、高齢児は新任の保母とはあまり年齢差が無く、指導が難しいという処遇上の困難も大きい。

進路指導は、上記の諸条件が具体化される過程として、古川らの言う通り重要な点である。しかし、その現れ方は各施設のおかれている地域の進学の動向や学卒者の就労構造により異ると考えられる。いずれにせよ高校進学率の低迷をめぐる問題は、進路指導を含む施設の処遇過程の実証的な分析に基づいて議論されるべきである。⁸⁾本項では施設児の高校進学率が低く、多くの施設児童が中卒でいわば「強制的」に「自立」させられていることを確認しておきたい。

2) 卒園後の進路と初職

表1-15は卒園後の進路を卒園時の修学段階別にみたものである。「その他」には、進学も就

表1-15 卒園時修学的階別にみた進路(()内女子内数)

修学 進路	中 卒	高卒(公)	高卒(私)	高校中退	職 訓 卒	職訓中退	そ の 他	不 明	計
進 学	52(14)	6(4)			2(0)		2(1)		62(19)
就 職	233(102)	37(21)	26(11)	6(5)	38(0)		4(2)	2(1)	346(142)
その他	7(3)	2(1)	1(0)	2(1)		1(0)	3(2)		16(7)
不 明	2(1)	1(1)							3(2)
計	294(120)	46(27)	27(11)	8(6)	40(0)	1(0)	9(5)	2(1)	427(170)

職もしなかった者や、他の施設へ措置変更になった者などが含まれる。

まず、前項で考察した様に、多くの児童が中卒で卒園する。また施設外から高校に進学する者は2割に満たない。特に女子は施設から高校進学する者の比率が高い。また、高校を卒業して上級校に進学した者は427名中6名と非常に少ない。施設児童の場合、高卒後の進学については全く考慮の外にあるといえる⁹⁾。

こうした進路は、各地域毎に異った様相を示している。表1-16は高校進学率の推移と施設児童進学率の試算を、表1-17は中卒就職者数と道外への転出率をそれぞれ調査対象になった施設のある地域別に見たものである

札幌市や石狩管内一般の高校進学率が高い地域では施設児童の進学率も高く、一般の進学率が相対的に低い日高管内では施設児童の進学率も低い。しかし岩見沢市の様に一般の進学率が高いにもかかわらず施設児の進学率が低い地域もある。この岩見沢市では、この地域の過去10年間の中卒就職者総数139名のうち、2割近い24名が施設児童で占められ、この地域の中の中卒就職者問題を施設児童が代表していると言える。しかし日高の様に、高校進学率が低い地域では、中卒就職者の中に施設児童の占める割合は非常に低く、施設児童の問題はむしろ一般の中卒就職者問題の中に埋没している。

また、卒園後の転出先は1-18の通りであり、札幌市、札幌圏で6割以上を占めるが、道外に

表1-16 地域的にみた高校進学率の推移

地域	年度	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	養護施設児高校進学率試算 (S50～56)
札幌市			95.3	95.2	95.1	95.1	94.8	94.7	94.6	94.1	94.7	30.0
岩見沢市			94.5	95.7	93.3	93.8	96.7	96.4	96.4	94.3	96.2	20.5
石狩			89.2	92.0	91.0	93.9	94.8	94.6	94.6	95.2	96.0	55.1
日高			78.5	84.4	85.5	86.6	87.5	88.9	90.1	89.0	90.9	25.1
全道		87.8	88.4	89.3	90.2	91.1	92.8	92.9	93.1	93.1	93.5	
支庁			84.8	86.4	84.7	89.5	91.8	91.9	92.0	92.2	92.9	
市部			90.4	90.9	91.2	91.9	93.6	93.3	93.5	93.4	93.8	

(学校基本調査による)

表1-17 中卒就職者数と道外への転出率

	中卒就職者数	道外就職者数	道外転出率
札幌市 総数	4,314	263	5.4
うち養護施設卒園者数	129(2.9)	28(10.6)	22.6
岩見沢市	139	22	15.8
	24(17.3)	4(18.9)	16.7
石狩管内	339	30	8.8
	32(9.4)	9(27.3)	28.1
日高管内	1,481	472	32.0
	23(1.6)	5(1.1)	21.7
全体	6,273	787	12.5
	208(3.3)	46(5.8)	22.1

(総数は学校基本調査による)

就労する者も2割程度いる。表1-17に戻って中卒就職者の道外転出率を各地域別に見ると、岩見沢市や日高など、その地域に就業先が少ない地域では、道外へ就職する割合は一般・施設児とも相対的に高く、差はあまり見られない。しかし札幌市やその近郊の石狩では、一般児童に比べ施設児童は道外へ転出する比率が高く、施設児童の地元での就労の困難さを示している。

いずれにせよ、卒園者の進路の決定にとって、その地域の中卒児の進路の状況や、地域の産業の構造などは大きな意味を持つと言える。

また、表1-19は中卒卒園者の進路と、入園時の家族以外の親族の数との関係をみたものである。中卒で卒園する児童にとっては、親族が多い程、進学するのに有利な条件となっている。これは卒園して進学する場合、実父母宅からではなく、その他の親族の家から進学するケースがあるからである。施設児の進学にとって、出身家庭を取り巻く状態が持つ意味は大きい。

前項では高校進学率の低迷の理由として、1)低学力、低学習意欲 2)費用 3)施設の受け入れ体制の不備 4)施設の進路指導方針の諸点がこれまでの論者により提示されているとしたが、地域性と出身家庭の状態をあわせて考察する必要がある。

次に卒園後の初職について検討を加える。表1-20は、中卒・高卒・職訓卒業者の産業別就職

表1-18 転出地

地域	人数	(%)
札幌市	222	(58.2)
札幌圏	45	(11.8)
産炭地	12	(3.1)
その他道内	38	(9.9)
道外	65	(17.0)
不明	45	
計	427	

(割合は不明を除いて除してある)

表1-19 入所時の親族数と卒園時の進路(中卒)

進路 \ 親族数	0	1	2	3	4	5	6	9	計
進 学	18 (14.4)	12 (21.4)	8 (16.3)	5 (17.2)	4 (30.8)	4 (36.4)	1 (10.0)		52 (17.7)
就 職	104 (83.2)	42 (75.0)	39 (79.6)	22 (75.9)	9 (69.2)	7 (63.6)	9 (90.0)	1 (100)	233 (79.2)
そ の 他	2 (1.6)	1 (1.8)	2 (4.1)	2 (6.7)					7 (2.4)
不 明	1 (0.8)	1 (1.8)							2 (0.7)
計 (%)	125 (100)	56 (100)	49 (100)	29 (100)	13 (100)	11 (100)	10 (100)	1 (100)	294 (100)

表1-20 産業別就職者数

学歴 \ 業種	農 水	林 産	鉱 業	建 設	製 造	卸小売	金 融 不動産	運 輸 通信	電 気 ガス	サ ビ ー ス	公 務	不 明 その他	計
中 卒 男子 (学校基本調査)	3 (2.3) (4.4)			54 (41.2) (22.0)	26 (19.8) (28.7)	6 (4.6) (12.7)		2 (1.5) (3.3)	1 (0.8) (2.4)	35 (26.7) (34.4)		4 (2.1) (10.0)	131 (100)
中 卒 女子 (学校基本調査)					47 (46.1) (44.7)	3 (2.9) (14.4)				44 (43.1) (31.5)		8 (7.9) (5.5)	102 (100)
高 卒 男子 (学校基本調査)			1 (3.2) (8.6)	1 (3.2) (7.0)	7 (22.6) (15.1)	8 (25.8) (34.6)		1 (3.2) (2.8)	1 (3.2) (3.0)	6 (19.4) (10.7)	1 (3.2) (9.4)	5 (16.1) (5.7)	31 (100)
高 卒 女子 (学校基本調査)				1 (3.1) (3.8)	5 (15.6) (9.1)	6 (18.8) (20.8)			1 (3.1) (2.1)	18 (56.3) (18.2)	1 (3.1) (3.4)		32 (100)
訓 練 校 男子				25 (65.8)	12 (31.6)					1 (2.6)			38 (100)
計	3 (0.9)		1 (0.3)	81 (24.3)	97 (29.0)	23 (68.9)		3 (0.9)	3 (0.9)	104 (31.1)	2 (0.6)	17 (5.1)	334 (100)

表1-21 初職の業種別就職地

	農 業	水 産	鉱 業	建設業	製造業	卸・小売	運 輸 通信	電 気 ガス	サ ビ ー ス	公 務	不 明 その他	計
札 幌 市			1 (100)	57 (67.8)	35 (34.7)	16 (69.6)	1 (33.3)	1 (33.3)	76 (69.1)		5 (31.2)	192 (55.5)
札 幌 圏 (50)	1 (50)			15 (17.9)	2 (2.0)			2 (66.7)	4 (3.6)	1 (50.0)	3 (18.7)	28 (8.1)
産 炭 地				1 (1.2)	8 (7.9)				2 (1.8)			11 (3.2)
その他道内 (50)	1 (50)	1 (100)		6 (7.1)	4 (4.0)	3 (13)	1 (33.3)		15 (13.6)		1 (6.4)	32 (9.2)
道 外				2 (2.4)	47 (46.4)	4 (17.4)			7 (6.4)		2 (12.5)	62 (17.9)
不 明				3 (3.6)	5 (5.0)		1 (33.4)		6 (5.5)	1 (50)	5 (31.2)	21 (6.1)
計 (%)	2 (100)	1 (100)	1 (100)	84 (100)	101 (100)	23 (100)	3 (100)	3 (100)	110 (100)	2 (100)	16 (100)	346 (100)

者数をみたものである。中卒の場合、男子は建設、製造、サービス業、女子は製造、サービス業に集中しており、男子は建設業、女子がサービス業にやや多く傾いている他は一般の中卒者とそう大きな違いはみられない。しかし高卒者の場合、男子は製造、サービスに若干かたよりがみられる他は概ね一般の高卒者と同じ分布を示しているが、女子はサービス業への集中が著しく、一般の高卒者が最も多く入職する金融、不動産業には一人も入職していない。このことは中卒就職者自体が社会的にマイノリティ化しており施設児童と同様の問題を抱えているものが多く、一般層との「格差」は高卒児の方が相対的に大きいことを示唆している。

表1-21は業種の構成を就職地域別にみたものであるが、北海道の産業構造を反映して製造業は道外に就職する者が多くなっている。

具体的に入職する職種を学歴別にみたものが表1-22である。まず中卒男子を見ると、大工、

表1-22 学歴別初職の職種

職種	学歴	中卒(男)	中卒(女)	高卒(男)	高卒(女)	高校中退(男)	高校中退(女)	職訓卒(男)	その他男(学歴不明)	その他女(学歴不明)	計
公務員				1	1						2
事務員			1	2	4						7
看護婦			5		2						7
その他専門的労働者					1						1
大工・左官		22			1			6			29
調理師		18				1		1	2		22
美容師		2	22		3		2				29
その他職人		2						1			3
技能工		2	1	4	1						8
紡績工		2	34				1			1	38
その他工員		14	13	5			1	9			42
運転助手				1							1
運転内夫		3									3
抵抗				1							1
その他生産労働者		14	4	1	1			2		1	23
サービス		3	12	2	6		1				24
販売サービス		8	7	10	9						34
屋外単労働者		37		2				19	1	1	60
自衛隊				1							1
不明		4	3	1	3						11
計		131	102	31	32	1	5	38	3	3	346

左官の見習い、単純屋外労働でその6割を占める。中卒女子は理美容師の見習いと紡績工で全体の半数を占める。特に、紡績工が際立って多い。その就労先の多くは中京工業地帯の紡績工場である。あとはその他の工員とサービス業で占められ、看護婦など専門的な職業につく者は極めて少ない。高卒になると男女とも職種の幅が広がり事務員や技能工なども出てくるものの、多くはサービス、販売サービスに従事している。職業訓練校を卒業した者は、工員か大工、左官、単純屋外労働でほとんどを占める。また、高校中退者は総数が少ないが、むしろ中卒の者の職種と同様の傾向を示している。

入職の経路を学歴別にみたのが表1-23である。中卒、高卒とも個人の紹介、特に園の職員のツテで入職する例が多くを占める。特に中卒者の場合、職業安定所を介して入職する者は5割に満たない。北海道の新卒者の有効求人倍率はこの10年間で、表1-24にみる様に大きく落ち込んでいるが、こうした厳しい就職事情のもとで、学校に来た求職票では就職が決まらず最終的に園の職員のツテでどこかに押し込む、といった例が多いのである。

入職した事業所の規模は表1-25の通りである。中卒の場合、大工、調理師、美容師見習いとして住み込みで働くことが多いため、小規模な事業所に集中している。女子では500人未満の事

表1-23 学歴別入職経路

学歴	入職経路 職 安	その他 関 係 機 関	個 人 の 紹 介					情報誌	その他	不 明	計(%)
			親	親 戚	園 職 の 員	先 生	その他				
中 卒 男	59 (45.0)	1 (0.8)	15 (11.5)	8 (6.1)	32 (24.4)	2 (1.5)	5 (3.8)		8 (6.1)	1 (0.8)	131 (100)
中 卒 女	48 (47.1)	3 (2.9)	8 (7.8)	2 (2.0)	27 (26.5)	1 (1.0)	3 (2.9)	1 (1.0)	2 (2.0)	7 (6.9)	102 (100)
高 卒 男	19 (61.3)	1 (3.2)	2 (6.5)		3 (9.7)	2 (6.5)	2 (6.5)		2 (6.5)		31 (100)
高 卒 女	19 (59.4)	2 (6.3)	1 (3.1)		6 (18.8)	1 (3.1)	2 (6.3)			1 (3.1)	32 (100)
高 校 中 退 男					1 (100)						1 (100)
高 校 中 退 女	2 (40.0)				1 (20.0)		1 (20.0)	1 (20.0)			5 (100)
職 訓 卒 男	31 (81.6)	2 (5.3)			2 (5.3)	2 (5.3)			1 (2.6)		38 (100)
その他学歴不明男	2 (66.0)				1 (33.3)						3 (100)
その他学歴不明女	1 (33.3)				1 (33.3)					1 (33.3)	3 (100)
計	181 (52.4)	9 (2.6)	26 (7.5)	10 (2.9)	74 (21.2)	8 (2.3)	13 (3.8)	2 (0.6)	13 (3.8)	10 (2.9)	346 (100)

表1-24 道内新規学卒者求人倍率の推移

年度 求人倍率	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
中 卒 (うち女子)	5.40 5.27	5.05 5.28	4.46 4.73	3.73 3.74	4.04 4.14	3.99 4.23	3.29 3.69	2.75 3.22	2.09 2.26	2.18 2.49
高 卒 (うち女子)	4.10 3.14	3.23 2.74	2.57 2.11	2.23 1.84	2.38 1.84	2.44 1.81	2.32 1.74	1.91 1.52	1.62 1.30	1.61 1.28

資料出所 『北海道の労働経済』昭和60年版 北海道労働部

表1-25 学歴別事業所規模

学歴	規模(人)	～ 4	～ 9	～49	～99	～ 499	500 ～	不 明	計
中 卒 男		22	35	31	5	6	1	31	131
女		14	17	21	1	25	6	18	102
高 卒 男		4	2	5	1	10	4	5	31
女		2	2	6	4	13	5		32
高 校 中 退 男								1	1
女			3				1	1	5
職 訓 卒 男		2	14	12	6	1		3	38
学歴不明・その他男			1	1	1				3
女		1	1		1				3
計		45	75	76	19	55	17	59	346

表1-26 学歴別雇用形態

学歴	雇用形態	正 規	見 習 い	アルバイト	そ の 他	小 計	不 明	計
中 卒 男		63(48.1)	55(42.0)		2(1.5)	120(91.6)	11(8.4)	131(100)
中 卒 女		56(54.9)	37(36.3)	2(2.0)		95(93.2)	7(6.8)	102(100)
高 卒 男		23(74.2)	2(6.5)	1(3.2)	3(9.6)	29(93.5)	2(6.5)	31(100)
高 卒 女		26(81.3)	5(1.6)		1(3.1)	32(100)		32(100)
高校中退 男			1(100)			1(100)		1(100)
高校中退 女		1(20.0)	3(60.0)	1(20.0)		5(100)		5(100)
職 訓 卒 男		33(86.9)	4(10.5)			37(97.4)	1(2.6)	38(100)
学歴不明 その 他 男		2(66.7)			1(33.3)	3(100)		3(100)
学歴不明 その 他 女		1(33.3)	1(33.3)			2(66.6)	1(33.4)	3(100)
計		205(59.3)	108(31.2)	4(1.1)	7(2.0)	324(93.6)	22(6.4)	346

表1-27 学歴別初任給

学歴	初任給(万)	～ 5	～ 6	～ 7	～ 8	～ 9	～10	10～	不定	小計	不明	計
中 卒 男		11 (11.1)	19 (19.2)	16 (16.2)	32 (32.4)	10 (10.1)	3 (0.3)	3 (0.3)	5 (5.1)	99 (100)	32	131
中 卒 女		15 (20.3)	15 (20.3)	23 (31.2)	16 (21.6)	4 (5.4)			1 (1.4)	74 (100)	28	102
高 卒 男		2 (8.0)		4 (16.0)	2 (8.0)	10 (40.0)	6 (24.0)	1 (4.0)		25 (100)	6	31
高 卒 女		1 (3.2)	1 (3.2)	6 (19.4)	11 (35.5)	11 (35.5)	1 (3.2)			31 (100)	1	32
高 校 中 退 男											1	1
高 校 中 退 女			3 (75.0)					1 (25.1)		4 (100)	1	5
職 訓 卒 男		2 (5.6)	14 (38.9)	12 (33.3)	6 (16.7)	1 (2.8)		1 (2.8)		36 (100)	2	38
学歴不明・その他男				1 (50.0)	1 (50.0)					2 (100)	1	3
学歴不明・その他女				1 (50.0)	1 (50.0)					2 (100)	1	3
計		31 (11.6)	52 (19.0)	63 (23.1)	69 (25.3)	36 (13.2)	10 (3.7)	6 (2.2)	6 (2.2)	273 (100)	73	346

(割合は不明を除いて除してある)

業所にも集中しているのは、紡績工が多いためである。職訓卒は中卒男子と同様である。高卒の場合、相対的に大きな規模の事業所に入職している。

雇用形態を示したのが表1-26である。高卒、職訓卒の場合、多くは正規の職員として採用されているが、中卒では「見習い」の者が4割程度を占める。

初任給は、表1-27に示す通りである。中卒、職訓卒では、5万～8万円に多くが集中しているが、中卒の場合は、5万円以下の極度に低いものが一割程度存在しており、また「賃金は決まっていない」者も存在している。雇用形態の不安定さと重ね合わせると、かなり劣悪な労働条件と言わざるを得ない。高卒者は、6万～10万円におよそ収まるが、5万以下の者も存在している。

これまで、卒園後の初職について概括的に検討して来た。中卒者の場合、極めて限られた職種であり、個人的な「ツテ」に頼って入職する者も多く、零細な事業所で労働条件も極めて厳しいものが多い事が解る。高卒者の場合、職種の選択の幅は広くなり中卒者に比べて労働条件も良い

表1-28 就職後の教育訓練

雇用形態 学歴	定時制 (公)	定時制 (私)	通信制 高 校	職 訓	企業内 高 校	大学二部 (私)	短大二部 (私)	専 門 学 校	その他	受けて いない	小 計	不 明	計
中 卒 男	11			2	2				4	87	106	25	131
中 卒 女	13	1	1		9			4	6	48	82	20	102
高 卒 男						1	1	2		24	28	3	31
高 卒 女							4	1	4	9	18	14	32
高校中退男										1	1		1
高校中退女	1									3	4	1	5
職 訓 卒 男		1		2						33	36	2	38
学 歴 不 明 そ の 他 男										1	1	2	3
学 歴 不 明 そ の 他 女									1	1	2	1	3
計	25 (1.3)	2 (0.5)	1 (0.3)	4 (1.1)	11 (3.1)	1 (0.3)	5 (1.4)	7 (2.1)	15 (4.3)	207 (59.9)	278	68 (17.7)	346 (100.0)

様に思えるが、その差は相対的なものであり「一般」児童と比べると、格差は大きいことが示唆された。

こうした職業についたあとの教育訓練の状態を示したのが表1-28である。中卒者で定時制高校に進学しているのは1割程度であり、企業内高校は、そのほとんどが紡績工場のものである。また、高卒者の二部の大学等への進学をみても、9名と非常に少数であり、高校卒で進学した前出の6名を合わせても、427名中15名と、高卒後の教育機会は非常に限られたものである。就労しながら受ける「教育」を次の就労へのステップとするといったあり方は、ほとんどとられていないのである。

注

- 1) 神田ふみよ「この子こそ18歳までみていきたい」小川利夫他編『ぼくたちの15歳』1983年、ミネルヴァ書房、所収。「養護施設児童の高校進学問題」と副題が付された本書は、10名近い研究者、中学教師、施設職員の手になっており、施設児童の高校進学をめぐる今日の状況と現場の実践例をとりまとめた貴重な文献である。なお、神田論文の「高校へ行けない子供ほど（行ける能力の無い子ほど）18歳まで面倒をみてあげたい」という指摘は、施設現場からの声として非常に示唆的である。
- 2) 小川利夫「教育福祉の基本問題」1985年、勁草書房 p. 99～100。なお、同書で「養護施設児童の進路指導問題」を「高校全入運動の立場からはもとより、より広く子ども、青年の学習権保障の見地からも無視出来ない」（同書 p. 97）とする小川は「教育福祉の基本問題」を「社会福祉対象者の学習権問題」とする一番ヶ瀬康子や「社会福祉対象者の教育権保障、とりわけ発達保障」とする高倉翔氏と同様の見地に立つとして「社会福祉とりわけ児童福祉サービスそのものの性格と機能の中に、いわば未分化のままに包摂され埋没されている教育的機能ならびに教育的条件整備の諸問題」と規定している。（同書 p. 151）

しかし、小川が「社会事業、あるいは社会福祉の基本問題は、今日なお貧困の問題にある」（同書 p. 6）と社会福祉の対象者を貧困者と把握するのであれば、「教育権」を保障することは貧困者の苦しい生活にとって如何なることかという議論が氏の立論の基礎におかれる必要があると考える。貧困ゆえに「教育権」が剝奪されているという「問題」のみならず、今日、貧困の解決ないしは緩和にとつ

て、「教育」が如何なる意味を持つのかが明確にされなければ「教育権保障」を議論する意味がないだろう。この点を欠いた「教育福祉論」では、例えば本論文で後述する様な、高校教育を「保障」されてもなお不安定な生活を強いられている卒園者の生活一貧困を説明出来ない。

- 3) 古川孝順, 庄子洋子, 村井美紀「養護施設における進路指導の実態」第39回全国養護施設長研究協議会協議資料, 1985年, 所収

古川らは、前掲の「生活史分析」からの知見の一つとして「養護施設退園者の予後は退園者の問題であるとともに、在園時の生活経験や職員による指導の所産であった」として、施設における進路指導のあり方を重視している。この調査は全国の養護施設の悉皆調査であり、85%が回答を寄せていることから信頼度は高いと言えよう。しかし惜しむらくは各施設に対する意見調査が主な立論の根拠になっており、具体的な進路指導のプロセスの分析を欠いている。

また、古川らは同論文で「養護施設における進路指導やアフターケアのあり方が問題となり始めたのは60年代の後半からであった」として、一般の高校進学率の上昇に伴う「アフターケア問題」の出現を指摘している。しかし、『全養協20年の歩み』全社協養護施設協議会1966年, によると、全国養護施設長研究協議会では、1957年の第11回大会ですでにアフターケアの問題が議題として大きく取り上げられている。従って現場レベルでは1957年以前にすでに「問題」化していたと考えられる。また、「養護施設30年」(前出)の付属資料の同大会研究テーマ一覧によると、「アフターケア」の問題はその後2～3年おきに継続的議題として取り上げられている。

もっとも、中卒労働者がいわゆる「金の卵」であった時代に論じられて来た「アフターケア問題」と今日のそれはおそらく性格の異なるものであろう。本論では、この点に深く立ち入ることは出来ないが、「アフターケア問題」の性格の変遷を詳細に検討することは、例えば「児童福祉」の分野に於いて児童の「自立」という概念が如何に把握されて来たかという点を明らかにする一つの材料を提出するものと考えられる。施設現場からみて「自立」していないものが「アフターケア」の対象と考えられるからである。

- 4) 中学教員である北決文武は「この現実を直視する」『ぼくたちの15歳』所収, で「学力不足論」を自らの実践例を通して鋭く批判している。
- 5) 特別育成費制定の経過や自治体ごとの修学援助制度については高橋正教「養護施設児童の進路保障」『ぼくたちの15歳』所収が詳しい。
- 6) 高橋前掲
- 7) 高橋前掲
- 8) 例えば片山百合子は、中学校におけるクラブ活動が、進学への大きな動機となることを、施設児童の育成記録の分析を通して仮説的に提示している。片山百合子「養護施設児童の生活指導に関する基礎研究」昭和58年度北海道大学教育学部卒業論文
- 9) 施設児童の高校進学の大きなよりどころとなっている「特別育成費」は、その実施要領に「4・実施上の留意点」として「卒業後の職業生活に直接役立つことが出来るよう」実業高校に「できるだけ進学させるよう配慮するものとする」とされており、高卒後の上級校への進学を視野に入れたものではない。

3. 施設での把握の状態と、面接終了者の性格

本節では次章以下で実際に面接調査を行なうことが出来た卒園者の事例の分析を行なうのに先

立ち、卒園者全体の中での面接調査終了者の位置を確認する。青少年福祉センター¹⁾や古川²⁾らもふれている通り、養護施設卒園者に面接調査を実施する事はかなりの困難を伴い、調査者が卒園者の居所を捕捉することや、実際に面接を行なえる可能性はかなり低い。従って面接が出来なかった者の方が、相対的により多く「問題」を抱えている可能性を常に残している。従って、事例の分析を始める前に、その卒園者全体の中での位置を知る必要がある。

本調査では、第二次面接調査にあたって、出身施設の指導員から卒園者に連絡を取った。従って、面接調査が出来た者は自ずと出身施設がその居所を把握していた者に限られる。そこで本節では、まず出身施設で卒園後現状を把握している者の性格を第一次調査の結果を使用して検討する。次に、実際に二次面接調査の主要な対象になったF園の卒園者の中で、面接調査終了者の位置と性格を検討する。その際使用する資料は、面接が終了している者についてはその面接調査の結果、面接出来なかった者についてはF園の指導員から聞き取った限りでの卒園後の生活歴である。

1)施設での把握

卒園後の年数別に施設での把握の状態をとりまとめたものが、表1-29である。全体の6割近

表1-29 施設での現状の把握

現状の把握 \ 卒園年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
現在も良くわかっている	3 (30.0)	9 (22.5)	19 (47.5)	19 (46.3)	25 (54.3)	29 (58.3)	19 (55.9)	21 (58.3)	32 (72.7)	45 (78.9)	27 (90.0)	248 (58.1)
卒園後しばらくはわかっていた	6 (60.0)	19 (47.5)	15 (37.5)	15 (36.6)	13 (28.3)	16 (33.3)	15 (44.1)	13 (36.1)	11 (25.0)	10 (17.5)		133 (31.1)
卒園後すぐにわからなくなった	1 (10.0)	7 (17.5)	5 (12.5)	3 (7.3)	5 (10.9)	3 (6.3)		2 (5.6)			2 (6.7)	28 (6.6)
不明		5 (12.5)	1 (2.5)	4 (9.8)	3 (6.5)	1 (2.1)			1 (2.3)	2 (3.5)	1 (3.3)	18 (4.2)
計	10 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)	41 (100.0)	46 (100.0)	49 (100.0)	34 (100.0)	36 (100.0)	44 (100.0)	57 (100.0)	30 (100.0)	427 (100.0)

くが卒園後施設側で現状が把握されているが、卒園後年数がたつにつれて、把握されている割合が減少していく。その際、卒園後3年以上経過した56年度を境にしてしばらくは減少の割合が鈍い。また、卒園後すぐに所在不明になった者は近年減少の傾向にあり、施設側の努力の現れと言えよう。「卒園後しばらくはわかっていた」者について、何年位までわかっていたかを卒園年次別に見たものが表1-30である。「しばらくわかっていた」者についても、長期間わかっていた者は順次減少するのは当然と言えるが、4年以上わかっていた者は1年～3年に比較して急激に減少する。勿論、最近卒園した者は、解っていた年数も短いのは当然である。そこで、52年以前卒園の者についてのみ見ても、やはり3年以下と4年以上では把握の状態が異なる。表1-29からの結果と合わせて考察すると、施設側での把握は、卒園後3年位が一つの転期と考える事が出来る。³⁾

次に、卒園後の転出地ごとに現状の把握の状況を見たのが表1-31である。地理的に遠方、特に道外に転出した者は、その後の状態の把握が難しいと考え得るが、表1-31を見る限りでは、転出地による差は見られない。地理的に遠い者にも現状を把握する努力がなされていると言えるが、むしろ近くに居ても把握されない者が多い点に注目すべきである。

次に一時帰省の有無別にまとめたものが表1-32である。一時帰省とは施設児童が在園中、主

表1-30 卒園後わかっていった年数

卒園年度 年数	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	計
卒園後1年位はわかっていった	1 (16.7)	4 (21.1)	7 (46.7)	2 (13.3)	5 (41.7)	3 (18.8)	7 (46.7)	4 (30.8)	4 (36.4)	8 (80.0)	45 (34.1)
卒園後2年位はわかっていった		4 (21.1)	4 (26.7)	3 (20.0)	1 (8.3)	7 (43.8)	4 (26.7)	5 (38.5)	6 (54.5)	2 (20.0)	36 (27.3)
卒園後3年位はわかっていった	1 (16.7)	4 (21.1)	2 (13.3)	6 (40.0)	2 (16.7)	5 (31.3)	4 (26.7)	3 (23.1)	1 (9.1)		28 (21.2)
卒園後4年位はわかっていった	1 (16.7)	1 (5.3)	1 (6.7)	2 (13.3)	1 (8.3)	1 (6.3)		1 (7.7)			8 (6.1)
卒園後5年位はわかっていった	3 (50.0)	2 (10.5)		2 (13.3)	3 (25.0)						10 (7.6)
卒園後6年位はわかっていった		2 (10.5)									2 (1.5)
卒園後7年位はわかっていった		2 (10.5)									2 (1.5)
卒園後8年位はわかっていった			1 (6.7)								1 (0.8)
計	6 (100.0)	19 (100.0)	15 (100.0)	15 (100.0)	12 (100.0)	16 (100.0)	15 (100.0)	13 (100.0)	11 (100.0)	10 (100.0)	132 (100.0)

表1-31 転出地別現状の把握

現状の把握 転出地	札幌市	札幌圏	産炭地	その他 道内	道外	不明	計
現在もよくわかっている	128 (57.7)	29 (64.5)	6 (50.0)	25 (65.8)	39 (60.0)	21 (46.7)	248 (58.1)
卒園後しばらくはわかっていた	76 (34.2)	14 (31.1)	1 (8.3)	7 (18.4)	20 (30.7)	15 (33.3)	133 (31.1)
卒園後すぐにわからなくなった	13 (5.9)	1 (2.2)	1 (8.3)	3 (7.9)	4 (6.2)	6 (13.3)	28 (6.8)
不明	5 (2.2)	1 (2.2)	4 (33.4)	3 (7.9)	2 (3.1)	3 (6.7)	18 (4.0)
計 (%)	222 (100)	45 (100)	12 (100)	38 (100)	65 (100)	45 (100)	427 (100)

表1-32 一時帰省の有無と現状の把握

現状の把握 帰省の有無	不明	ほぼ定 期	不定期	全 く な し	計
不明	1 (12.5)	5 (3.4)	8 (6.3)	4 (2.7)	18 (4.2)
現在も よくわかっている	5 (62.5)	85 (58.6)	72 (57.1)	86 (58.1)	248 (58.1)
卒園後 しばらくはわかっていた	2 (25.0)	50 (34.5)	39 (31.0)	42 (28.4)	133 (31.1)
卒園後 すぐにわからなくなった	—	5 (3.4)	7 (5.6)	16 (10.8)	28 (6.6)
計	8 (100.0)	145 (100.0)	126 (100.0)	148 (100.0)	427 (100.0)

に夏、冬休みに数日間、自分の出身家庭ないしは親戚の家に一時的に帰省する事であり、その有無や程度は、在園中の児童の家族関係の安定性を示す客観的な指標として把握され得る。表1-32を見ると、「現在もよくわかっている」者にはあまり差が見られないが、「卒園後すぐにわからなくなった」という、施設側が「アフターケア」を考える際最も障害になると考えられる者は、帰省が全くなかった者に多く見られる。すなわち、これらの卒園者は施設からも家庭からも孤立

しているのである。

これまで、卒園してから年数がたつにつれて施設では把握しにくくなっていくが、特に卒園後3年が一つの目安と考えられること、地域的な要因はあまり見られないが、家族との関係が不安定だった者程、卒園後すぐにわからなくなってしまう事等を明らかにしたが、卒園者自身の条件はどうであろうか。

まず、長期間在園した者の方が、施設との結びつきが強い可能性がある。そこで、入所年齢別に現状の把握の状態を見たものが表1-33である。高齢児になって入所した者程、現状が把握されていない。長期間入所していた者程、多くの施設職員とのつながりが出来るのかも知れない⁴⁾。

表1-34は卒園時の修学状況との関連を示す。学歴の高い者の方が施設側で把握されやすい事がわかる。つまり、卒園時に相対的に不利な条件で社会生活を開始する可能性が高い者程捉まえるにくい。そこで就職した者について初職の職種別にまとめたものが表1-35である。公務員、事務員や技能工等、相対的に高い階層の者程、現状を把握しやすく、大工、左官や工員、屋外単純労働者等は、相対的に捉まえるにくい。

次に現在の職業が把握されている者について、卒園年度別にその現職をまとめたものが表1-36である。まず、卒園後の初職で多かった大工、左官、調理師、理美容師、紡績工等の割合が減少し、変わって卒園時の初職では少なかった運転手や自衛隊員が増加している。これは、転職後の流入先を示している。また、無職の者が出て来ていることにも注意する必要がある。そこで、

表1-33 入所年齢別卒園後の把握

現状 \ 入所年齢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
現在もよくわかっている	2	12	19	13	22	24	16	14	17	24	15	28	19	19	4	248
	33(66.0)			59(67.0)			47(57.4)			67(57.3)			42(46.7)			(52.1)
卒園後しばらくはわかっていた	1	7	5	5	7	9	9	11	8	13	14	11	16	12	5	133
	13(26.0)			21(23.9)			28(34.1)			38(32.5)			33(36.7)			(31.1)
卒園後すぐにわからなくなった					2	1	4		1	4	3	4	3	4	2	28
				3(3.5)			5(6.1)			11(9.4)			9(10.0)			(6.6)
不 明	1	2	1		2	3	1	1		1			3	3		18
	4(8.0)			5(5.6)			2(2.4)			1(0.8)			6(6.6)			(4.2)
計(%)	4	21	25	18	33	37	30	26	26	42	32	43	41	38	11	427
	50(100)			88(100)			82(100)			117(100)			90(100)			(100)

表1-34 卒園時の修学段階と現状の把握

現状の把握 \ 修学段階	不 明	中 卒 (公)	高 卒 (公)	高 卒 (私)	高 中 校 退	職 訓 卒	職 訓 中 退	その他	
不 明		14 (4.8)			1 (12.5)	1 (2.4)		2 (28.6)	18 (4.2)
現在も良くわかっている	2 (66.7)	156 (53.1)	39 (84.8)	22 (81.5)	4 (50.0)	22 (53.7)	1 (100.00)	2 (28.6)	248 (58.1)
卒園後しばらくはわかっていた	1 (33.3)	103 (35.0)	5 (10.9)	4 (14.8)	3 (37.5)	14 (34.1)		3 (42.9)	133 (31.1)
卒園後すぐにわからなくなった		21 (7.1)	2 (4.3)	1 (3.7)		4 (9.8)			28 (6.6)
計	3 (100.0)	294 (100.0)	46 (100.0)	27 (100.0)	8 (100.0)	41 (100.0)	1 (100.0)	7 (100.0)	427 (100.0)

表1-35 初職別現状の把握

職 種 現状の把握	公務員	事務員	看護婦	その他専門的労働者	大工・左官	調理師	理美容師	その他職人	技能工	紡績工	その他工員	運転手	運転助手	抗内夫	その他生産労働者	サービス	貼売サービス	屋外単純労働者	自衛隊	不	計
現在も良くわかっている	2	7	4	1	14	13	16	2	6	22	22	1	1	1	17	17	24	34	1	2	207 (59.8)
卒園後しばらくはわかっていた			2		11	8	12	1	2	9	15		2		4	6	8	18		8	106 (30.6)
卒園後すぐにわからなくなつ			1		3	1	1			3	4				2		2	7		1	25 (7.2)
無 回 答					1					4	1					1		1			8 (2.4)
計	2	7	7	1	29	22	29	3	8	38	42	1	3	1	23	24	34	60	1	11	346 (100)

表1-36 卒園年度別現在の職種

卒園年度	現職	公務員	事務員	看護婦	その他専門的労働者	大工・左官	調理師	理・美容師	その他職人	技能工	紡績工	その他・工員	運転手	運転助手	抗内夫	その他生産労働者	サービス	販売サービス	屋外単純労働者	自衛隊	農林・水産自営	その他公安サービス	その他	職中	在学	主婦	技師	計
49							1											1		1								3
50										1							2	1						1		3		8
51				1				1	1								1	4	2		1			1		3		15
52			1	1							2		3	1		1	4	3	2	1								19
53			1	1		2	1		1	1		2	2				6	1	2	2				1		1		24
54			3			1				2		2	2			1	6	2	4	1			1	2				27
55				1			1			1		1	1		1	1	2	3	2				1	1		2		18
56		1				4	1		2		3	2					3	3	1						1		1	22
57				3		1	1	1				2	2				7	3	5					2	3	1		31
58					1	2	2	4			3	3		2	1	1	6	1	9	1			1	4	1			42
59			1	1		2		1		1	5	1				1		7	4									24
計		1	6	8	1	12	7	7	4	6	13	13	10	3	2	5	37	29	31	6	1		3	12	5	10	1	233
～55			5	4		3	3	1	2	5	2	5	8	1	1	3	21	15	12	5	1		2	6		9		114
56～		1	1	4	1	9	4	6	2	1	11	8	2	2	1	2	16	14	19	1			1	6	5	1	1	119

卒園後3年が施設での把握の一つの目安になるのではないかとこの前述の知見に基き調査時点からみて卒園後3年半未満の56年度卒園以後とそれ以前に分けて現職を集計したものが表1-36の下部である。

卒園者総数は56年を境に二分されているが、それ以前では、相対的に事務員や技能工、主婦、運転手、自衛隊等が多く、紡績工や大工、左官、理美容師の比率は少なくなっている。卒園後、

長い年月がたってもなお施設で補捉し得るのは、相対的に高い職業階層の者が多いのである。また、女子にとっては「結婚」は生活が安定する一つの道になっているのかも知れない。運転手、自衛隊員等が56年以前で多いのは、前述した様にこれらの職種が転職のちに就くという性格を持っているからであろう。

2) 面接終了者の性格

前項では、卒園者の年数が短い者、卒園時の修学段階が高く職種や家族背景等が相対的に安定している者が、比較的施設に把握されやすいことを明らかにした。本項では、それを踏まえて、実際に面接調査を行なえたものの性格を、F園の卒園者を対象に明らかにしたい。F園を対象とするのは、面接終了者23名のうち20名がF園の卒園者で占められているからである。

卒園者全体を、学歴、進路別に面接終了者、現職がわかる者、現行行方不明の者に分けて見たものが表1-37である。卒園者は52名であり全体の中では中規模の施設である。うち高校に進学

表1-37 F園の卒園者のうちわけ

		中卒(職訓卒) 就 職	中卒・高校進学	高卒就職	高卒進学	そ の 他	計	
面 接 で き た	男	10	4 (転出2)	2	6	4 1	20 (38.5)	12
	女	6	0	0	2	0	8	8
現 職 わ か る	男	10	7 (転出1)	1	4	3	18 (34.6)	11
	女	3	2	2	1	1	7	7
現在全くわからない	男	11	7 (中退3)	2			14 (26.9)	9
	女	4	1	1			5	5
計	男	31 (59.6)	18 (15.4)	5	10 (19.2)	7	52 (100)	32
	女	13	3	3	3	0	20	20
備 考		自宅卒業2 自宅をとり出 出して卒業3 中退3			専門学校1年 で中退	・精神病院に 入院 ・精薄施設に 措置変更		

した者は施設内外を合わせて20名で38.5%、現状が把握されている者は38名で73.1%となっており、それぞれ全体の平均の33.8%、58.1%と比較して多少高くなっているが、まず平均的な施設と言える。表1-37からわかる通り、高卒まで施設に居た者は全て施設で現状が把握されており、面接出来た割合も高い。しかし、中卒、職訓卒で卒園した者は就職、進学を問わずに強が現在全く施設では把握されておらず、面接が可能だった者もき弱となっている。また、中卒で自宅なり親戚宅から進学した者8名のうちそのまま卒業した者は2名のみである。3名は途中から新聞店に住み込み就労をしながら卒業、残りの3名は中退いずれも現行行方不明であり、高卒進学の1名も中退と施設外から進学することの難しさを表わしている。

表1-37を卒園年度別に分けて図示したものが図1-2である。先に見た様に高卒の者は全て現状がわかっており面接が可能であった者も12人中8人と多いが、高卒者自体が最近卒園した方に傾っている。それに対し中卒就職者は、年度ごとにはほぼコンスタントに分布している。また、58、59年度卒の者は5人中4人に面接が可能であったが、それ以前の卒園者になると面接の可能の程度・現状の把握の状態は年度ごとにはあまり見られない。これは高卒者はかなり把握されやすいのに比較し、中卒者は卒園後一定期間経過すると施設側で把握している者とそうでない者が、

図1-2 面接終了者の分布(F 園)

学歴・進路		年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
中学・訓練校卒 (就職)	男		●●●	●●	●	●	●		●●	●●	●●	●●●	○
	女		○	●●	●	●●●	●	○		●●	●	○	
中学・訓練校卒 (高校進学)	男		●					○	○	●●			
	女						●		●	●			
高 卒・就 職	男					●	●	○○		●●	○○	○	
	女								○		○		●

○面接出来たもの ●現状がわかっているが、面接出来なかったもの。またあえて連絡をとらなかったもの

●現職はわかっているが、こちらから連絡のとり様がないもの。

●現在行方不明で全く把握されていないもの

固定化する傾向があることを示している。

次に面接が出来た者については現職と転職歴を、面接出来なかった者のうち現職がわかっている者についてはそれに加え面接の出来なかった理由を、現在行方不明の者については不明になるまでの生活歴を中心に一覧表にしたものが、それぞれ表1-38、1-39、1-40である。現職が把握されている者で面接が出来た者とそうでない者を比較すると、(表1-38、1-39)面接出来た者は工場労働者と販売サービスに就いている者が、面接出来なかった者は自衛隊員と無職の者が多くなっている。しかし、両方のグループに、専門的な職業等相対的に安定している者や、ボーリングや水道配管工等低い職業階層にある者が混在しており、次章以下の分析は施設側で現状を把握している卒園者の生活をほぼ代表していると考えられる。

また面接が出来なかった者の転職歴や面接出来なかった理由について見てみると、まずNo. 21の様に、卒園後周囲に施設出身であることを隠しているのを、あえて連絡を取るを試みなかった例があることに注意する必要がある。この様な気持ちは、多少の差こそあれ卒園者の多くに共通のものであろう。また、No. 11、1、2、16の様に現状がわかっているが、施設からは連絡不能という者もいる。特にNo. 2の様に、兄弟でも居所がはっきりしないという者がいることは、卒園者を捕捉することの難しさを示している。No. 11は、施設では全く把握されておらず、卒園者との面接の段階で、No. 11と偶然街で会った者の話から判明した者である。

それでは現在施設側では捕捉出来ない者の生活歴はどうであろうか。表1-40を見ると、まず施設外から高校進学した者で高校中退した者3名全てが現在把握出来なくなっており、家庭引き取りで進学した者の生活の複雑さ、厳しさを示している。初職を見ると、学歴がほとんど中卒に集中している為、男子は調理師見習いか、建築関係の見習い、女子は美容師見習いと前節で分析した中卒就職者の代表的な職種に集中している。不明になるまでの生活歴を見ると、まずNo. 33、No. 10、No. 3の様に少年院や鑑別所に入所経験がある者が目につき、卒園後の環境が中卒や高校中退で社会に出た彼らにとって厳しいものであったことがわかる。また、同じNo. 33やNo. 6、No. 18の様に道外に転出したまま行方不明になった者も多い。特に卒園後すぐ行方不明になったNo. 46のケースには、卒園後の家族関係の不安定さが、中卒間もない彼の生活を「破壊」し、転々とせざるを得なくなっていく過程が読み取れよう。

No. 33やNo. 42、No. 20の様に面接ができたものの兄弟が行方不明というケースや、同じNo. 42やNo. 20の様に、施設や兄弟では現状を把握しているつもりでも実際に連絡を取ってみると行方がわからなくなっていたケースの存在からは、卒園後、施設からコンタクトをとり続けることの困難さを知ると同時に、卒園者の社会関係が兄弟といえども(後に分析する様に「兄弟」関係

表1-38 面接出来た者の職業・生活歴

コード	性別	年齢	卒園年月	学歴	居住地	現職	雇用形態	職業分類	転職歴・備考
F 園卒園者									
M 2	男	24	55.3	高卒	札幌	事務員	学雇	事務員 専門的	なし
M 4	男	21	55.3(中卒)	高卒	札幌	事務員	常雇	労働者	大工見習い→新聞店住み込み→現職→卒園後おじ宅から進学するが1年後に飛び出し新聞店に住み込み、卒業
M 6	男	22	57.3	高卒	広島町	公務員	常雇		なし
F 5	女	23	56.3	高卒	東京	電器部品検査工	準社員	工場労働者	検査工(常雇)→ウエートレス→東京で「水商売」→現職
M 7	男	21	58.3	高卒	札幌	製パン工	常雇		なし
M 9	男	20	59.3	高卒	札幌	製パン工	常雇		なし
F 6	女	19	57.3	中卒	岐阜	紡績工	常雇		なし
F 8	女	17	59.3	中卒	岐阜	紡績工	常雇		なし
M10	男	17	59.3	中卒	札幌	パンの発送、仕分け	パート		カタワク大工→現職
M 8	男	21	58.3	高専卒業 専門学校中退	札幌	水道配管工	パート	単純屋外労働	新聞店(東京)→ウエーター(帯広)→現職、卒園後新聞奨学生となるも半年で中退し、新聞専業になる。
M11	男	17	59.3	中卒	札幌	家の外壁はり	パート		新聞店→運送屋アルバイト→大工手伝い→現職
F 7	女	21	58.3	高卒	札幌	婦人服店店員	常雇	販売サービス	店員→現職
F 1	女	26	50.3	中卒	札幌	デパート店員	パート		製パン工→ウエートレス・水商売(名古屋)→ウエートレス→ウエートレス→現職
F 3	女	23	53.3	中卒	札幌	デパート店員	パート		美容師見習い→ウエートレス→ウエートレス→店員→店員→現職
M 1	男	25	51.7	中卒	札幌	新聞配達	パート		寿司店見習い→新聞店→そば屋店員→ウエーター→現職
M 5	男	21	55.3(中卒)	高卒	札幌	新聞配達	パート		事務員→新聞店→エアコン取り付けアルバイト→現職、卒園後おじ宅から進学するが卒業直前に飛び出し新聞店に住み込み卒業
F 4	女	21	55.3	中卒	札幌	スナックホステス	パート	サービス	洋裁縫い子→ウエートレス→ウエートレス→現職
F 2	女	25	51.3	中卒	旭川	保険外交員・主婦	パート	無職	美容師見習い→水商売→ウエートレス→現職
M 3	男	24	55.3	高卒	札幌	無職、生保受給			精神病院入院、60.5退院
M12	男	16	60.3	中卒	札幌	無職			カタワク工→パン工場アルバイト→無職
G 学園卒園者									
M13	男	22	57.3	高卒	横浜	クレーン保守整備工	常雇	工場労働者	なし
M14	男	19	57.3	中卒	札幌	調理師	常雇	サービス	なし
M15	男	17	59.3	中卒	札幌	自動車塗装工	常雇	工場労働者	なし

表1-39 現職が解っているが面接出来なかった者の職業・生活歴

コード	性別	年齢	卒園年月	学 歴	居住地	現 職	雇用形態	分 類	転 職 歴	その他・備 考
Na 37	男	19	57.3(中卒)	高 卒	山 梨	電気技師	常 雇	事務 専門的職業	なし	卒園後、おじ宅から進学するが、1年時に飛び出し新聞店に住み込み卒業。連絡はとれるが遠方なので面接出来ず
51	女	19	60.3	高 卒	札 幌	看護婦見習い	常 雇		なし	准看護婦養成校の入試準備の為調査者と毎週会っているが、信頼関係を崩す危険があるので面接調査しなかった
12	男	26	53.3	高 卒	札 幌	運転手	?	運転手	整備工→水道工事→現職	結婚して子供あり「会ってもよい」とのことである
31	男	22	57.3	高 卒	室 蘭	運転手	常 雇		なし	正月など園に来ており調査者とも面識あり。室蘭まで行けば会えるだろう
14	男	23	53.3	中 卒	札 幌	ボーリング	?	屋外単純 労働	自動車修理工→現職	園には来たことがあるが住所を教えない
35	男	19	57.3	中 卒	札 幌	大工見習い	?		なし	最近来園、就職先で頑張っているとのこと
38	女	19	57.3(中卒)	高 卒	札 幌	店 員	?	販売サービス	なし	園の近くの店に就職、職員ともたまに顔を合わす
41	男	18	58.3	中 卒	札 幌	クリーニング工	?	サービス	寿司屋→寿司屋→魚屋→新聞店→クリーニング工→クリーニング工	転職のために園に相談に来る。調査者とも面識がある。時間をかけて連絡を続ければ会えるだろう。
11	女	24	52.3	中 卒	札 幌	スナックスホステス	?		洋裁縫い子→現職	園では全く連絡がとれない。面接調査の途中卒園者からの話で判明。しかし住所は解らず連絡不能
1	男	27	50.3	職訓卒	不 明	自衛隊員	常 雇	公安サービ ス	印刷工→現職	3年位解っていた。全く連絡不能。
2	男	27	50.3	職訓卒	不 明	自衛隊員	常 雇		ブロック工→飲食店店員→現職	M1の兄であるが、M1も正確な連絡先解らず連絡不能
19	男	25	54.3	高 卒	札 幌	自衛隊員	常 雇		ペプシコーラ販売員→現職	真駒内にいる。連絡を続ければ会うかもしれない。
16	女	23	53.3	中 卒	東 京	主婦	—	主婦	紡績工(一の宮)→?→現職	園からは連絡不能。31の姉で31の話で判明。
21	女	22	54.3	中 卒	札 幌	主婦	—		定時制高進学→?	連絡先は解るが、周囲に施設出身であることを隠している為連絡せず。
28	男	21	56.3	職訓卒	赤 平	無職	—	無職	ブロック工→ウェイター→新聞店→少年院入所	少年院退所後、赤平の姉宅にて求職中とのことである。
30	男	20	56.3	中 卒	札 幌	無職	—		養鶏場卵取り	能力的に低く父親宅に居る。連絡は取れたが後でおり返し連絡すると言ったまま連絡なし
7	女	25	51.3	中 卒	札 幌	無職(生保受給)	—		製パン工→主婦→離婚、精神病院入院	M2の姉、現在も精神病院に入院中
36	女	19	57.3	中 卒	美 唄	無職	—			精薄施設に措置変更、現在入所中

表1-40 現職不明の者の職業・生活歴

コード	性別	年齢	卒園年月	学歴	解っていた年数	初職	不明になるまでの職業、生活歴
4	男	26	50.3(中卒)	高校中退	4		卒園後、自宅より高校進学、2日で登校拒否になり中退。その後不明
26	女	20	56.3(中卒)	高校中退	3		卒園後自宅より高校進学するが3年時に中退、家出。その後ウエートレス、同棲生活の後、不明になる。
33	男	19	57.3(中卒)	高校中退	3		F4の弟、卒園後F4宅より高校進学するが、中退、鑑別所に入所、退所後苫小牧の姉夫婦宅にて大工の手伝い、現在行方不明、F4によると内地で仕事をしているのではないだろうかとのことである。
3	男	26	50.3	中卒	3	寿司屋見習い	少年院入所、退所後行方不明
42	男	18	58.3	中卒	2	寿司屋見習い	ラーメン屋→行方不明、F6の弟でF6が60年夏にラーメン屋をたずねたところ、すでにやめておりその後不明。
15	女	23	53.3	中卒	1	美容師見習い	卒園後すぐ行方不明。水商売をしているのではないか
17	女	23	53.3	中卒	3	美容師見習い	美容師見習いをやめたあと不明、親の住み込んでいた新聞店に連絡したところ「とうの昔にやめた」とのこと。
40	女	18	58.3	中卒	2	美容師見習い	通信教育を受けていた。転職したいと園に相談があったが現在不明。
6	男	25	51.3	中卒	4	大工見習い	大阪に行ったのではないか。
10	男	24	52.3	中卒	?	塗装工	→廃品回収。廃品回収中、幼児にいたずら。少年院入所、退所後行方不明、19の兄
32	男	20	57.3	職訓卒	2	ブロック工	ブロック工をやめた後不明。札幌にいないのではないか。
46	男	17	59.3	中卒	1	カタワク大工見習い	初職を解雇され、園で次の職を紹介するがすぐ飛び出し2週間程園で引き取る。その間、3歳の時に別れた実母が仙台にいたことが判明し、実母と再婚相手の招きで仙台へ行くが、折り合いが悪く、1カ月で札幌に帰り、深川市の祖母宅に身を寄せる。しかしそこにも長くおれず、その後、千葉県に中学時代の友人を頼って行った様子である。
18	男	22	54.3	中卒	?	裁断工(岐阜)	現在、大阪か名古屋でハム工場で製造工をしているのではないか。詳細不明。
20	女	22	54.3	中卒	?	菓子店店員	菓子店をやめた後、病院に住み込み、準看の資格を取る。何回か病院は変わっている。F8の姉。面接の為病院に連絡したところすでにやめており現在不明。

は卒園者の社会関係の中でもむしろ頼りになるものの一つである) 非常に希薄なものであることを理解する必要がある。

以下、本節で展開したことを簡単にまとめる。施設で現状を把握し得ている者は、まず卒園後の年数が短いものが多いが、卒園後3年前後を目安にわかっている者とそうでない者が固定化していくと考えられる。特に中卒者の場合その傾向が顕著であり、高卒者についてはコンスタントに把握されやすい。

また、卒園後、職種や家族関係等で相対的に不利な状態のもとで社会生活を開始せざるを得ない者ほど、施設での補捉は困難になるが、そのことは現在所在のわからない者の生活歴を検討することによって確認することができる。

概して、施設が現状をつかむことができなくなった者の方が、相対的に困難な生活状態にあることと予想される。しかし、面接が出来た者といえども現職や転職歴を見ればわかる様に決して順調な生活を送っている者ばかりとは言えず、それらのケースを詳細に検討することによって、現在行方不明の者が抱えているであろう生活困難と共通するものは明らかになると考えることが出来る。

注

- 1) 前掲「養護施設退所児童の社会適応に関する調査」p. 31
- 2) 前掲「養護施設退園者の生活史分析」p. 167
- 3) 調査対象施設の保母からの聞き取りでは勤めて3年を目安に退職する保母が多いとのことである。卒園後の動向を把握する際、在園時に担当していた保母が中心であろうことを考えると、こうした職員の勤務状態と何らかの関係はあると考えられる。
- 4) 本表を一見して、学齢以下の年齢から学卒時まで非常に長期に渡って施設で養育される児童が多いことに驚きを禁じ得ないのであるが、入所期間と処遇の結果の関連は、施設現場の主要な関心の一つになっている。それは、施設に於いては、正常な家庭に比較して子供を養育する上で弊害が生じざるを得ないという、いわゆるホスピタリズム論の是非をめぐって、わが国の施設現場で1950年代から展開されてきた「ホスピタリズム論争」を背景にしている。こうした「施設必要悪論」に対する現場からの反論として、「施設養護は家庭に勝るとも劣らない」という積極的養護論が展開されているが、その内容も、なるべく家庭に近づけた形での家庭的処遇論と、集団のダイナミズムを生かした集団主義養護論に大別される。

いずれにせよ、幼年期から、相当長期に渡って施設で養育される児童が多いことは事実であり、処遇過程の詳細な検討を経て積極的な養護養育理論が展開される必要がある。その際重要なことは、「ホスピタリズム」を検討することではなくて、退所後の生活を「自立」した形でいかに営むことが出来るように「指導」出来るか、という事であろう。この点、古川が前出の様に「進路指導」に注目したことは評価されるべきであろうが、古川の分析は具体的な指導の過程まで降りていないのが惜しまれる。なお、ホスピタリズム論争の流れについては、浅井春夫「ホスピタリズム研究の歩みと方向」日本福祉大学学内学会『福祉研究』47号1982年所収、が詳しい。

第2章 養護施設卒園者の労働生活

1. 「袋小路職業」— blind — alley — job — について

本節では、「袋小路職業」という概念を検討する中で、養護施設卒園者の労働生活を検討する

視点を得たい。

一般的に若年労働者、特に新規学卒者を他の既経験労働者に比して「精神的にも肉体的にもこれから成熟する可能性」「ゆたかな可能性、はるかな将来性」¹⁾という点で特徴づけることができる。従って彼らにとって、その職業生活は将来の「自立」の基礎になるべきものであろう。特に養護施設卒園者の場合、その収入、卒園後新しく築かれる人間関係、さらには住居までが自己の職業、職場に全面的に負っている場合が多いと考えられ、職業が彼の「自立」にとって果たす役割はなおのこと大きいといわなければならない。

しかしながら、前章で示された様に、養護施設卒園者は社会的に不利な状態でその労働生活を開始せざるを得ないものが多く、従ってまたその職業も先の見通しの持ちにくい、いわゆる「袋小路職業—blind—alley—job—」に流入するものが多いと考えられる。

「袋小路的職業」とは、江口英一によれば「『若い時に入るものは、やがては解雇され離職すべき』職業であり、何等、永久的な仕事として存在しない」種類の職業であり『職業生活の発展の可能性』が短期間で終了する」²⁾性格を持つ職業である。もしこうした職業に流入するものが多く、かつ文字通りそこからは脱け出しにくいものであるとすれば、養護施設卒園者はその日々の労働生活の苦しさのみならず、その将来の「自立」の可能性もうばわれているといわなければならない。従って以下卒園者の労働生活を具体的に検討していく際に、その労働条件や転職の経路と共に、その職業自体に内在している「将来の見込み」をも視野に入れる必要がある。

次節においてこうした卒園者の労働生活を詳細にみていくのだが、その際現職の職業分類をたよりに分析を始めたい。あわせて初職からの職業歴を分析する過程で転職歴の特徴を明らかにすると同時に、転職歴を通してみた現職の性格をも把握したい。

注

- 1) 氏原正治郎「後篇、序章」p 81大河内一男、氏原正治郎編、『労働市場の研究』、1955年、東大出版会、所収
- 2) 江口英一「新規学卒者の労働市場における位置」p 20、大河内一男、氏原正治郎編『労働市場の研究』前篇第一章、江口は同章の「労働市場政策に関連して」という小節に於いて、「不完全就労の状態のもとに沈滞、停滞している」年少労働者の存在を指摘したのち、この層をイ) 前期的な労働関係による劣悪な労働条件の下に使用されている年少労働者、ロ) いわゆる「袋小路的職業」にその日その日を過している年少労働者、ハ) 自家営業の中に「手伝い」として若干の期間をすごす人によって構成されたとしている。本編のケースの「住み込み」にみる様に、今日イ)の問題が消えまったわけではないが、これらケース記録をみる限りではロ)の「袋小路的職業」の問題は相対的に比重を増している様に思える。また江口は同書に於いて「袋小路的職業」の概念をベバリッジから援用し、英国における「袋小路的職業」への流入の問題(misemployment)に対する「職業あっせん」と対応させながら日本における「職業指導」の展開過程を概括しているが、そこで「MisemploymentとUnemploymentの問題は長期的失業の支配下では同じことである。」と指摘している。このことは、本論における転職歴を理解する場合、重要な意味を持つと思われる。

2. 卒園者の労働生活

1) 「事務・公務労働」従業者

<M2>

24歳高卒男 経理事務員 札幌在住

55年3月H商卒業 建材リース卸し会社に入職、「他にも一、二件入社試験を受けたけど、電々公社とか全々手が届かない。ある程度ランクを落として、まあこの会社の給料面はあんまり良くなかったけど、この程度だろうと思って受けた。」

この会社は資本金2億5千万、従業員51名、旭川等道内各地に営業所がある。

「道内の建築業界はまだ厳しい。冬場に資金を借り入れて、夏場で返す。」

残業が多い。最近は何に140時間やった。オフコンを入れたのでデータ作りのため朝4時頃までやることもある。経理に在るということもあり、自分の残業手当は押さえて出す。まともに終るのはほとんど無い。

仕事は簿記を知っていたので初めから覚えることが出来た。

「経理って仕事はこんなもんだらうな、という気持ちはありましたね。」

しかし、1年位たつと全体が把握出来るようになり、ようやくおもしろいところが見えてきた。

休日は土曜半どん、日曜休み、今年は休日出勤多い。有休はほとんど取らない。長い休みは正月5日、盆4日。賃金は本給12万ちょっと。手取り10万位である。

<M4>

21歳高卒男 事務員（法人職員） 札幌在住

52年3月、中卒で卒園。おじの家から高校へ進学する予定だったが、全日制高校を受験し不合格。「定時で普通の勉強が出来ると思って」K商の定時制に入学しおじの家から通う。昼間は大工の手伝いをしていた。

「おじさんが大工やってたので、一応大工みたいな事をやって、建て前とか基礎とか何でもやったんだけど」「やっぱり全日制に行きたいと思ってたから。おじさんは全日行くとって言ったら怒って口も聞いてくなくて、で、どうやって行くのよって言うからバイトでも何でもして行くからって。」

56年4月、K商全日制に再入学、おじの家を出て、新聞店に住み込み通学。

「この頃が一番忙しかった。朝起きて、新聞配って学校行って、180部位配る。おやじはだめだけどお婆さんが良い人だった。夜、遊びに行っても帰って来るまで起きてるとか。最初は大学生と同じ条件だという話だったが、実際は月給が1万ちょっと違った。」

「1年の時、女友達も出来たから他にバイトもした。6条の焼肉屋で夜6時から10時。6ヵ月しか続かなかった。クラスで45人中44番になったからやめた。」

職を決める際は、「最初、民間の会社だったけど親がいないので、そういうので落ちたら悔しいからそれだけでは落ちない様な所を選んだ。」(社団法人)S基金を受験。

「半年で仕事を覚えたと思う。新人は班長の隣りに座って仕事を覚える。ソロパンが主流で、(自分は)2級を、高校の時に取った。高卒はソロパン(の級を)持っていないと入れない。」

賃金は本給から諸経費と積み立て金を差しひかれた分に残業手当を加えて、ちょうど10万円位。残業は月始めに決めるが、あまり多くない。土曜日は半どんで隔週休みになる。

<M6>

22歳高卒男 H町役場職員 H町在住

H町教育委員会社会体育課社会体育係、町内の体育施設の管理や事業の事務局をしている。公務員試験を受けるきっかけは、小学校の頃からやっていた卓球であった。

「中学の時から卓球でH町役場の人を知っていた。その人は役場の卓球部の人で、勉強して受けろと言ってくれた」「高校に進学してから教師になりたかったが回りの勧めで公務員(試験)を受けることになった。公務員の模試を受けていくと受かりそうなので先生も勧めた」「国家公務員も受験したが落ちた。」

受験成績は管内で2番だった。

役場に入って最初の2年は「広報」を発行するところにいた。ここは残業も多く、仕事が合わないのではないかと悩んだ。

「入ったばかりで広報やらされて、わからない訳ですよ。」

「親元にいたら職場をやめたかも知れないけど、一人（住い）なので耐えるしかない。」

現在は「社会体育係」に移っており、自分に合った仕事がやれると感じている。

労働条件は基本給11万3千円、それに調整手当と住宅手当を加えて13万円になる。土曜、日曜は仕事柄、かなりつぶれる。（ただし）休日手当をつけても、休みを振り替えても、どちらでも良いことになっている。（自分は）手当てをつける方が多い。

事務員層に属するのは以上の3名である。いずれも常雇であり、雇用形態は安定している。卒園者の中では安定した労働生活を送っているグループであると考えられる。

唯一人、民間企業に勤めている＜M2＞の事例を見ると、残業が多く労働時間の長さにかかわらず、勤続6年目で手取り10万円と、賃金の低さが目につく。それに比較して、準公務員の＜M4＞や、公務員である＜M6＞は、＜M6＞が残業が比較的多い点を除けば、労働条件は相対的に良い。

ここで注意すべきは、＜M4＞の卒園後の高卒までの経歴である。彼は中卒後おじの家から定時制高に通学するのであるが、それに飽き足らず新聞店に住み込み、一時はその他にもアルバイトをしながら全日制の高校を卒業し、安定的な職を得る。この事例は中卒後施設外で進学することの困難さを示唆すると共に、施設出身の人間が「人並み」の生活を得るには、「人並み」以上の努力と能力が要求されることを示している。また、＜M6＞のケースに於いて入職の際、それまでのクラブ活動を通して培って来た社会関係が入職の動機に作用していることに注意を留めておく必要がある。

2) 「工場労働者」

＜M13＞

22歳高卒男 横浜のS重機で造船のクレーン保守整備工

浦河のG学院を57年3月卒園。地元の高校の電気科を卒業。就職の際、とにかく本州に出ようと思っていた。

「園に居た時、地元の暴力団と関係していて、とにかく本州ならどこでも良かった。学校で求人広告を見て、この会社があった。卒業時、園長から同じ町内にある漁業の会社に勧められ、園長と一緒に行って就職する様な感じだった。しかし、地元に住たくないということで学校で相談してこっちを受けた。」

職場での仕事は、主にクレーン関係の部品の整備、保守、故障への対応である。

「これからの人間である以上、電気も機械もっていうのが上の考えらしいですよ。」

同期入社したのは88人、3ヵ月間、溶接等基本をやらされて7月1日に各技能に合わせて配属される。クレーンの運転をやりたいと、入職時に指導員に言っていた。

「全く同じ仕事って無いんですよ。点検は毎度同じだけれど、故障が起った時はちょっと違った所が故障するんです。頭使いますね。」

59年1月から60年3月にかけて、夜6時から11時まで喫茶店でアルバイトをしていた。友人の紹介で、時給500円だった。ローンを払っていたので「ちょっと生活が苦しくなって。」始めたのである。土、日は昼の12時から夜の11時まで就労した。4台目のバイクのローンを払った時にバイトをやめた。バイト先の

店長は店の金をごまかすようなやつだったので、やめて清々した。アルバイトをしていると、夏になると寝坊で、しんどくて、6月頃4、5日会社を休んだことがあった。班長や係長はバイトのことを知っていたが、黙認の形だった。現在の労働条件は本給は16万、手取り9万位。ボーナスは4年目の夏で21万円。

「毎月、給料の明細を見たらやめようかって考えますね。」

土、日が休みということになってる。しかし、修理が入ると土、日でも出勤になる。「班長から出てくれと（指示される）、でも出ても稼ぎにはならない」ひと月に3～4日休みがつぶれる。

<M7>

21歳高卒男 R パンの恵庭工場にて製パン工 千歳在住

58年3月F学園を卒園、入職の際に、小さい頃からやっていた「卓球」が影響することになる。

「卓球出来る所に行きたいなって。進路の先生がRパンの偉い人、知ってるからお前Rパンに行けって、それで決った。」「冗談で消防署とか言ってたけど、とうてい無理だからそういうのは考えなかった。」

仕事は、パンを焼く前に形を整えて重さを均一にする作業である。作業のやり方は先輩が教えてくれる。

「ちゃんとやってればすぐわかるんじゃないかな。」

最初は札幌市内の工場だったが、半年後に実家がある千歳のそばの恵庭工場に移った。労働時間は早番の場合は、午前4時から午後の1時までだが、金曜は午前3時からやる。遅番の時は午前8時から午後5時か6時までである。いずれも中1時間の休みがある。休日は週一日ある。前の週に次の週の休みの日がわかる。早番の時など遅番の人と一緒に飲みに行ったりすると、寝る時間が無い。卓球も仕事が終わってからの練習である。

「働くわりには給料が安く、休みが一定しない。」

長期の休みは無く、冬場に有休以外に一日休めるだけである。

「(有休は) あるけど、血縁の人が亡くなったとか、結婚式だとかしかくれません。」

賃金は、平均手取り10万円位。

「10歳～20歳上の人給料がとても安くて、36歳位で20万円ちょっとしかもらってない。」

暖房手当では、1万円ちょっと。ボーナスは今年の1月が19万円位だった。求人票では、1年間44万あるということだった。

<M9>

20歳高卒男 <M7>と同じRパンの札幌工場で製パン工に従事

入職の際、「卓球」が決め手になる。「Rパンならすぐ入って感じ、テストなんか0点でも、卓球やってたから、高校の先輩が卓球で入っていて『卓球を強くしようって、会社で。だからうまいのを持ってくる様になって』高3の始め頃から入社が決っていた。」

仕事は「焼成」部門で10m以上ある焼き上がったパンをコンベアーに流す。新入社員には1つ上の人間がチューターとしてついて教えるが、簡単に覚えられる仕事だ。自分に「合わない」と思い、去年位からやめようと考え始めた。今年に入って一度やめると上司に言ったことがあるが気を取り直して続けることにした。労働時間は早番が午前5時半から午後2時半までであるが、大体残業になる。始業時間が6時からの時もある。遅番は午前10時半からである。途中休憩は一回1時間で、早番の時は仕事場で交替して朝食を取る。残業は金・日・月曜日に多い。特売日が月曜日のためである。休日は週に一度で、土曜日は隔週休みとなるが、あとは不定期である。休日は月始めに決められる。特別休暇が年に12回位。有休は3日取ると1日欠勤ということになる。だから皆、有休を取らない。

「流れ作業だから、人が足りなかったらどうしようもない。」

賃金は手取り9万円。基本給13万円位で残業は月によって違う。ボーナスは半期で2ヵ月分位。長い休

みは正月位しかない。去年は実家に一泊して、後は正月から自分で進んで仕事に出た。

<F 5>

23歳高卒女 川崎にある電気部品の工場で検査工 東京在住 <F 4>の姉

56年3月、F園を卒園。千歳にあるM電気に入社。検査工となる。その前に、もう一つ会社を受けていたが落ちた。M電気の組合はよくボランティアで園に来ていた。

入社当時、仕事の内容が難しくて覚えられず一週間で5 kg減った。、上司に相談して同じ品質管理でも発送の方にまわしてもらった。

58年7月末から、男性関係の事等で無断欠勤が多くなり、知っている喫茶店でアルバイトしていた。58年11月に札幌を飛び出し、女性週刊誌の求人広告で見つけた「夜の仕事」を頼りに東京へ出た。指名制の店でけっこう客はつき、1ヵ月50万位になった。指名されると給料は上る。10日毎に支払うシステムだった。その仕事はあまり辞める気はなかった。

「だって本当、こんな楽な仕事は無いと思ってたし、ただ横に居てお話しして、それで月50万でしょ。昼間の仕事の何倍もだから。」

しかし、店で知り合った男性が結婚しようと言ってくれ、こんな店も辞めろと言われた。

「こんな仕事をしてたら、普通の人みたく結婚出来ないなと思って。」「だから辞めるっていう時もね、その店長と話し合いの上で辞めたかったんだけど、店長が絶対辞めさせてくれなかった訳ね。私が入って半年そこそこで、その店、女の子50人位いるんだけど毎週ベスト・テン発表するわけ。今回指名いくつで第何位とかね。私が3位になったのね。1位、2位の子はそこにもう3年以上もいる子なのね。で、私が3位になったということで離したくなかった訳ね。だけど、私としては、ちゃんと理由を言ったわけ。こうこういう訳で辞めたいんですって、で辞める1ヵ月前に言ってくれば良いっていう条件だったから、私も7月の末に言ったの。9月いっぱい辞めたいんですけどって。そしたら何だかんだ言って、どうせ店で知り合った客なんだろうって、そういうふうに言われて私も何かカーとしちゃって、それで突然辞めちゃったんです。」

辞めてから昼の仕事を探し始めた。59年7月のことである。アルバイトニュースをたよりに2、3週間で次の仕事を見つけた。川崎にある電気製品の工場で職種は検査工である。M電気に居た時と同じ様な仕事だが、雇用形態は2、3ヶ月間はパートで、現在は準社員である。正社員にしてくれる様話してはいるが難しいだろう。就労時間は午前8時半から午後5時までであり、たまに残業がある。手取り9万円で週休二日制をとっている。健康保険はついているが、厚生年金には加入していない。

<F 6>

19歳中卒女 岐阜県K市 T紡績U工場で紡績工

57年3月中卒時、札幌の他の工場を受験したが面接で落ちた。

「向こう（北海道）はあまり就職無いし」「（こっちに来ると決った時）すごく嫌だった。」「飛行機で帰って来れば会えるからって（施設の先生は言ったけど）金はうちらが出すのにすごく無責任だと思った。」

<F 6>はここで精紡の仕事をしている。主に難しい作業は「糸つなぎ」である。これは糸によりをかけている時に切れた物をつなぎ合わせるの「結ぶ」のではなく「より合わせる」のである。

労働時間は早番と遅番の時でかなり異なる。早番の時は午前4時半に寮母さんが起こしに来る。5時から仕事を始め、8時には朝食を取る。その後午後1時半まで休み無しで仕事が続く。仕事終了し昼食を取ると、定時制高校の授業が始まる。定時制高校には工場から専用バスが出ている。高校の授業が終了するのが6時半、それから寮に帰り夕食、洗濯、風呂を済ませ寝るのは10時頃である。

「遅番」の時は、午前8時の朝食に間に合う様に起きる。（しかし、早番の者が朝食を取っている時は

遅番の者が変わりに工場に出、早番の者の朝食が終ってから遅番の朝食となる。)午前中は学業なり習い事をし、午後1時半から仕事が始まる。途中夕食をはさみ、仕事が終わるのは午後10時である。それから洗濯、風呂をしなければならないので、寝るのは普通午前1時頃になる。

この早番と遅番は一週間毎に変わる。一週間早番が続けば、次の一週間は遅番というわけである。早番と遅番では「寝るのが遅くなる」から「遅番の方が辛い。」

賃金は手取り6～7万円、他に天引き貯金が3万円ある。

<F 8>

17歳中卒女 <F 6>と同じ紡績工場で紡績工

59年3月F園卒。「行く所無くて」「F 6もいたし」現在の紡績工場に入職。ゼン紡を担当している。職場の状態、労働時間などは、<F 6>と同様であるが、賃金は手取り月額44,000円である。「1年生」の時は4万円だった。日曜日は休みだが、たまに出されることもある。38°位熱があっても出る様な職場の雰囲気なのである。

<M15>

17歳中卒男 札幌で自動車塗装工見習い

59年3月、G学院卒園。中学に在学中は、実家のある苫小牧で建築関係の仕事に就こうと思っていたが、学校の先生の紹介で現在の自動車塗装工に就職した。車も好きだったから、建築関係の仕事でなくともよかったが、就職地は実家があり、しかも兄貴や友人もいる苫小牧が希望地であった。しかし、苫小牧の知人(民生委員?)は、苫小牧に帰ってくると親がいて、かえって仕事に差し支えるからと札幌に就職することを勧めた。小学校時代の先生は、東京に知人がいるのでそこに行かないかと誘ってくれたが、自分としては苫小牧に近い札幌を選んだ。

中卒後1年半、ずっと今の工場にいる。仕事の内容は主に事故車などの塗装で、事業所は白石区の厚別にある。冬場は事故を起す車が多いので忙しい。従業員は全部で13人で、事務を取っている人は社長を含めて4人、残り10人が塗装工である。そのうち4人が住み込みで働いている。

仕事は先輩に教えてもらおうし、わからないところは聞かすが、まだ全部覚えきれていない。まだ先輩とペアでやっているが、仕事の面で先輩や事務の人に怒られることがよくある。就労時間は普通午前8時半から午後5時半までだが、残業がかなりあり、夜10時頃までかかることも多い。一番遅い時は深夜1時までやったこともある。日曜、祭日が休みであるが、冬場は事故車が多く、忙しいので12月から4月までの間の祭日は休みにならない。食費、住居費、社会保険や生命保険等を引いた手取りは毎月3万円～5万円である。ボーナスは冬が1万5千円、夏が1万円だった。

<M10>

17歳中卒男 札幌でパン工場の発送仕分け

札幌でアパートで一人暮らし。59年3月、F園を卒園。中卒後、コンクリート型ワク大工の見習いとして住み込み就職をした。当初は3年間は辞めるつもりがなかった。自動車の免許をとり車を買うつもりで月々貯金をしていた。しかし60年7月に辞めてしまった。同僚や会社でも辞めるなど言われたが、人間関係のもつれ等もあって、辞める決心は変らなかった。仕事を辞めたあと「少し遊んでいようかな」と思い、すぐに次の仕事を探し始めたというわけではなかった。

園には帰りづらいので、中学時代の友人宅を泊り歩いた。9月初めから友人の父親の紹介で、Wサービスという人材派遣会社のアルバイトとして現在のNパンの発送仕分けの仕事に従事しはじめた。勤務時間は夜8時から朝5時までであり、週に2回ある残業の日は、朝の8時まで仕事をする。休日は土曜である。時給は知らないが、全部休まずに仕事に出ると15万円位になると思う。仕事中の休憩は10分間、20分

間、50分間と3回あり、50分間の休憩時に夜食のパンが出る。そのパンを食べて短時間仮眠をとる。いまのところこの会社には、ずっと居るつもりでいる。自分としてはアルバイトとしてやっているわけではないと思っている。

2ヶ月あまりの間に風邪で3回程仕事を休んだ。体温計は持っていない。医者にも行かず売薬で済ませている。社会保険は今どうなっているのか「知らない」

朝方帰って来て夕方まで眠るのだが、なかなか眠れない。8時間位ぐっすり眠れるのは週に一回位である。

以上8名が工場内での労働に就いている者であるが、この中でもいくつかのグループに分ける事が出来る。

<M13><M5><M7>はいずれも常雇の工場労働者であり、卒園者の中では相対的に安定した労働生活を営んでいると考えられる。しかし「毎月給料の明細書を見ると辞めたくなる。」<M13>という様に、低賃金が彼らの抱えている主要な問題の一つである。そのことは「働く割には給料安い」<M5>という感想に端的に示されているように、労働時間との関係で見ると一層明確になる。製パン工の2人は、早い時は朝3時から就労しており、変則時間常勤務の上に拘束時間がきわめて長い。また、通常の勤務時間の面では恵まれていると思われる<M13>の場合は退社後、アルバイトをするという二重就労によって低賃金をおぎなおうとしているのである。

労働内容の点から見ると、仕事を行なう上で専門的な技術が要求されるのは<M13>のみであり、製パン工の場合、技術教育を要しない単純作業である。従ってまた、「合わないのではないか」<M7>といった悩みを抱えることになる。また、製パン工の2人の入職のきっかけが、「卓球」であることにも注意を留めておく必要がある。

<F5>は同じ工場労働者でも「準社員」である。彼女は高卒後、大手電器メーカーのM電気に常雇として採用されるのであるが、その後の転職歴に注意する必要がある。まず後述する様に女子の場合、初職からの転職先はほとんどがウエートレスなのだが、高卒の彼女もその例外ではない。その後、男性関係のこともあり、すばやく東京で「夜の仕事」につくわけであるが、「とりあえず辞める気は無かった」と彼女自身が言う通り、普通こうしたケースはそのまま「夜の仕事」にとどまりやすく、また従ってこうした面接の際も極めて補捉にくい性格を持つであろう。彼女が「浮かび上って」来たのは、結婚を考えている相手が支えになっていること、また再就職先が見つかったこと、それも彼女が高卒で同職種の経験があり、かつ中小工場の多い地域であること等が有利に働いているであろう。こうした「運の良い」例でも「手取り9万」であり、「正社員になるのは難しい」のである。

<F6><F8>は中卒女子の中で最も多い紡績工である。紡績工は大工場のラインについている常雇の労働者であるが、次の点でこれまで検討した工場労働者と著しく異なる。それは入職した時点から一定の年月が経過するとその仕事から離れることが最初から予定されている職業だということである。紡績工は普通企業内定時制高校や専門学校（今日では短期大学も含む）に修学させる事を前提として中・高卒者を雇用する。そうして例えば4年間で定時制高校を卒業して退職する頃には天引き貯金もある程度貯まり、「結婚資金はこれで安心」（入社案内パンフレット）というわけである。

従って「紡績工」の生活を理解しようとする場合、その労働条件の劣悪さもさる事ながら、「退職後どうなるのか」といった点を含めて考えなければならない。そうでなければ、養護施設児童を「他に行くとこ無い」（<F8>）から紡績工に就職させても、それは問題を先送りする意味し

か持たない。

＜M15＞は、小規模の自動車修理工場の塗装工である。中卒後1年半、何とか続いているが、低賃金の上、やはり労働時間が長時間になることがわかる。(なお、本ケースが「何とか持つてる」理由については後に検討する。)

＜M10＞は同じ工場労働者でも、その工場に直接雇用されているわけではなく、下請けの会社のアルバイトである。初職は＜M15＞と同じ様に、中卒男子の代表的な就職先であるカタワク大工見習いである。注意すべきは無職の時の対応の仕方である。住み込みで就職した為、やめた途端に住居も失しなうという、文字通り「路頭に迷う」ことになり、余裕を持って次の職を探すことは許されていない。

本人は現職を「アルバイトでやってるつもりはない」のであるが、雇用形態は文字どおりのアルバイトであり、日銭を稼ぐ生活である。そして何よりその労働時間が深夜であることに注意せざるを得ない。これが17歳の少年の「職業」なのである。本人がいくら「本業」のつもりでも「ぐっすり眠れるのは週一回」といった状態が続けば、それは身体そのものをむしばむであろうし、その事は、すみやかにまた「路頭に迷う」ことを結果するだろう。

3)「屋外単純労働」従事者

＜M8＞

21歳高卒（専門学校中退）男 札幌で水道配管工

高校3年時の10月に札幌にある自動車会社の整備工を受験したが、不合格になった。そこで以前から「行ってもよい」と考えていた東京のN工学院電子学科に入学することを決めた。11月に新聞奨学生となり、12月には合格が決定。昭和58年3月、F園を卒園。

住み込み先の新聞店は川崎市内にあった。かなり大きな新聞店で奨学生だけでも4人居た。6畳の個室が与えられ朝夕食付きであった。住込み就労のための準備は奨学金から53万円借りて賄った。奨学生と言えども専業者と仕事内容はほとんど変わらず、「学校があるだけ専業より辛い」と言える。400軒を担当し、朝6時半に朝刊を配り終えた後、朝食をとり学校へ行く。下校は夕刊に間に合う様に急がなければならない。5時半から夕刊を配り7時頃に終る。夕食後は、普通折り込みを手伝うが、月末には集金に出かける。集金は担当している家の80%以上回収することがノルマとして課せられ、「もらえない分は給料から引かれる」から、月末の26日～28日はかなりきつく、夜10時ぐらいまでかかる。ただし拡張は配達員のノルマではなかった。給料は手取り7万であった。

専門学校へは1年目の半ばから行かなくなった。時間的、体力的にきついこと、「夕刊で早く帰らねばならないので友人とのつき合いが出来ない。」といった理由による。学校をやめてからは手取りは10万円になった。授業料は卒業すれば免除という規定だったので、前借りした借業金を返済する為にも、以後1年間、その新聞店に専従で働くことになる。

昭和59年9月に帰道。とりあえず帯広の母親宅に身を寄せ、喫茶店でアルバイトをしていた。札幌に来たのは12月末である。札幌に出たいという気持ちとこちらの方が仕事があるということが理由である。仕事が見つかるまでF園に置いてもらうことになる。「普通なら帰って来たってなかなか置いてもらえないのに、受け入れてもらえたのは、新聞奨学生がかなりきついことを先生も知っていたから」と考えている。

60年4月から現在の仕事に園の先生の紹介で入職する。事業所は札幌市清田にあり、兄弟で営んでいる会社である。従業員は8人であるが、社長の親類の人間が多い。50代が1人、あとは30～40代で、若いのは＜M8＞と17歳になる社長の息子だけである。紹介された時はあまり気乗りがしなかったが他に仕事も

無いし「やるしかない」と思った。

主な作業内容は「穴掘り」と雑役である。朝7時から夜8時か9時頃までやるのでかなりきつい。今でも完全に慣れているとはいえない状態であるが、最初の頃は非常に大変であった。日給は5,000円で6時以降は残業手当がつく。夜間の作業には夜間手当がつくが、事業所全体としても1ヶ月に4回、2～3人でやる程度であり、下宿の門限が10時なので、＜M8＞はまだ2回しか従事していない。それでも収入は1ヶ月15万～18万位になる。社会保険、生命保険には入っている。

休みは一応第1、第3日曜と決っているが、実際には全く不定期である。少ない時は月に1～2日、多い時は7日位である。仕事があるかどうかで休みが決まり、当日の朝でないとわからない。終る時間は遅いし、休みも不定期で、その上低賃金であり、同業の他社と比べてかなり条件は悪いと思っている。身内ばかりでやっているのだから、こんな低い労働条件でもやっていけるのではないかと考えている。

＜M7＞

17歳中卒男 札幌で「家の外壁張り」

59年3月、中卒後、東区の新聞店に住み込みで就職。

当初、近所でブロック工をやっている人が受け入れても良いとのことだったのでブロック工になりたかった。その人が出稼ぎで6月頃まで帰って来ないので、新聞店へはその間のつなぎのつもりで入ったが、5日間で飛び出す。「解らないから少し遅れるでしょ。それでいつきにガツと言われたから頭にきて」、誰にも相談せずにやめて、父親のもとへもどった。1ヶ月位何もしなかったが、父親に働けと言われて運送屋や果物店でアルバイトをした。アルバイトニュースで見つけたり飛び込みで探した。

9月に、(大工をしている)弟の友達の父親が、大工をやらなかと声をかけてくれたので、60年4月まで手伝う。その人の見習いであったが、賃金は月に6万円と決まっていたのに1ヶ月に1～3万円位しかくれなかった。また冬場には仕事が無かった。

Sという人の紹介で昭和60年4月23日にM建設に行った。家の外壁にウレタンが入っている板を張り付ける仕事である。昭和60年7月頃、今の親方がM建設をやめた時に一緒にやめて、現在は、他の1人と3人でT開発空間という所の下請けの仕事をしている。仕事は大体覚えた。

手取り15万位になる。道内各地に出張して仕事をする事が多い。厚生年金保険には未加入である。

札幌の市内で仕事をする時は朝5時半から夜5時位まで働く。休みは1件の仕事が終わった段階でとるが、雨の日も休みになる。しかし10月は2日しか休みがなかった。地方での仕事の場合、滞在費がもったいないので雨が降っても休みにならない。

以上2名が屋外単純労働に就いてる者である。まず両者とも初職からこの職業に就いたのではなく、何回かの転職の後に流入したのであるが、両方とも初職が新聞店の住み込みである点が注目される。ここで重要なことは、両者とも新聞店員を一時的な職業と考えて入職している点である。すなわち＜M8＞はなし崩し的に専業化したが、その取由は奨学金の前借りの返済の為であり、＜M11＞も6月にブロック工に就職する予定でそれまでの「つなぎ」のつもりで入職するのである。(この「新聞店」の持つ意味については後述する。)また、＜M8＞は次の職がみつかるまで数ヶ月間F園に身を寄せているが、これは前述の＜M10＞と同様に求職中の住居が彼らにとって大きな問題となっていることを示している。いずれにせよ、＜M8＞＜M11＞共に職を探す際一定の半失業状態、つまりアルバイトをしたりしなかったりといった期間を経ており、学歴の高低にかかわらず彼らが職を得ることの困難さを示している。

また、両者とも卒園者の中では相対的に賃金は高いと言えるが、雇用の不安定性や事業所の零細性、労働そのものが持つ「きつさ」や就労の季節性等を考え合わせると「割に合う」賃金では

ない。

4)「販売サービス」従事者

<F 7>

21歳高卒女 札幌で婦人服店店員

58年3月、H高卒業で卒園。商業高校だから就職口は沢山あった。事務職のつもりで車用品の会社の試験を受けたが、車用品の店頭販売をすることになった。入ってすぐ、「結局雑用だとか事務的な事だとか、そういうのだったからやってもつまらないし」と思う。

59年6月中頃に退職。やめる1ヶ月前に退職願を出して次の所を探していた。友人に「婦人服関係の仕事ないかな」と話していたら、アルバイトニュースに丁度希望する職種が載っていると教えてくれた。応募したところすぐに決った。東京に本社がある洋装店に正社員として再就職する。札幌市内の店舗は正社員は15、6人おり、自分のいる店には3人いる。基本給は12万5千円で、後は歩合制である。その他諸手当もある。本人は店での責任者であり、仕事が終わって帰るのは夜9時を過ぎる。

<F 1>

26歳中卒女 札幌でデパート店員

50年4月、中卒で東苗穂の製パン工場の工員になる。就職先については特に希望は無かった。中学3年生の段階では何がいいのか実際わからなかった。次姉が製パン工場で働いていたので先生から「姉さんのいる所が良いのではないかと」勧められて決めた。姉がいると姉妹で何かと比較されるから嫌だったが、やはり色々と「お前の妹は……」という形で比較され姉にも迷惑をかけた。

52年春、内地に行ってみたいと思い、次姉にも相談の上、長姉の居る名古屋へ転出した。名古屋ではウエートレスの仕事を貼り紙やアルバイトニュースで見つけた。長姉の借金の肩がわりをさせられ、その返済に苦労した。ホステスをするかたわら、昼間もアルバイトをしていたこともある。54年春、札幌にいる妹にお金を送ってもらい帰札幌した。

2ヶ月程した54年夏、喫茶店のウエートレスとして再度勤める。仕事を見つける時はアルバイトニュースだけが頼りだ。56年夏、客の男性との関係が原因で辞める。しばらくしてまた別の喫茶店に勤め出したが、中卒だからこんな仕事しかなかった。そこは、比較的長期につとめたのでレジ係をするまでになったが、支配人が変って居づらくなったので、59年12月に辞めた。

60年3月からGデパートの地下の食料品売場にメーカーの派遣社員としてつとめている。やはりアルバイトニュースで見つけたものである。時給470円で実働7時間、休憩は1時間とれる。休日は週に一日である。燃料手当、社会保険はつかえないので、同居している姉妹3人で国民保険に加入した。自分は体は丈夫だが、次姉はあまり健康でないのでは是非とも必要なのである。

<F 3>

23歳中卒女 札幌でデパート店員 <F 1>の妹

53年3月、中卒で卒園して美容室に見習い、住み込みで勤め始めた。

「何も解らなくて入った」という感じであった。従業員は先輩が1人と同期生が1人の3人であったが、先輩とは折り合いが悪かった。半年位たってから仕事も合わないし、炊事をさせられるのが嫌だったので辞めたいと思い、1年後の4月に辞めて姉の所どころがり込んだ。美容室での手取りは3万円であった。

54年8月まで失業していたが、アルバイトニュースで喫茶店のウエートレスの口を見つけ勤め、ここには翌年の12月までいた。この間、姉には反対されたが同じ喫茶店に勤めていた男性と同棲をしていた。55年12月に喫茶店を辞めてから1年ほど失業したが、同居相手のチリ紙交換を手伝ったりして、別に仕事を

探さなかった。しかし「時間を持てあまして」再度別の喫茶店にウエートレスで勤め、ここには1年2ヶ月居た。(56年12月頃～58年春)

58年7月頃、子供を身籠もったことがわかり12月に出産したが、養育できず里子に出すことになる。これを機に姉の所に帰り、少し生活が落ち着いた59年3月からYデパートに勤めはじめ、59年12月まで居た。60年3月から9月までの間はIデパートに勤め、9月から現在のMデパートの食料品売場にいる。デパートでの仕出事は全てテナントの臨時社員であり、前2つはアルバイト情報で見つけた。Mデパートの場合は、友達が貼り紙を見て教えてくれた。いずれも良い所が見つかるまで、しばらく居るつもりで勤める。

現在午前8時半から午後7時半までの勤務で、時給470円、月に9万円位になる。職域保険と厚生年金に加入している。最初の2年位は何も入っていなかった。休日は週一回あるが、有休はない。

<M1>

25歳中卒男 札幌で新聞店住み込み

中卒時入院していたため、51年7月に卒園し、同時に寿司屋で住み込み見習いとなる。この時は、月3万円ほどの収入であったから、医療費を支払うと赤字になっていた。12指腸潰瘍が再発したため、1月に辞めて2ヶ月位入院して手術を受けた。

「退院してから、体をならすために新聞店で少し手伝いをした。」

全快してから、昼間そば屋に勤めながら新聞配達をした。一時期新聞配達をやめて、そば屋と喫茶店のウエイターのかけもちを半年位やったが、以前の新聞店から「人が居ないからちょっと手伝ってくれ」と言われ、専業になる。北光→苗穂と店主と共に店も移っている。現在、勤続8年目になる。

朝刊、夕刊を配り、集金、拡張、事務、帳簿整理等もする。労働時間は朝の4時～夜の9時。昼間は事務をしている。

「(時間は)要領が悪いと中々作れないけどね。」

賃金は15万位。食費等引いて10万ちょっと残る。配達のバイクは自分持ちである。月々1万ちょっと10回払い。日曜の朝刊が終ってからが休み。

<M5>

21歳高卒男 <M1>と同じ店で新聞配達に住み込んでいる

56年3月、中卒で卒園する。おじ宅から高校に進学するも、おじと折り合いが悪く、高3時の58年12月におじ宅を出て園に身を寄せることになる。

高3時の秋、公務員試験に落ちた。学校ではB観光を紹介してくれたが、12月におじの家を出ており、「学校行かなかったから、そこの就職話もこわれて」しまった。1月から3月まで園で紹介された新聞店に住み込んで働き、高校卒業を向かえる。

高校卒業後、広島町の建材会社に就職する。社長とその奥さん、女の事務員と、<M5>を含めて4人の会社である。<M5>は、荷物の運搬したり事務をしていた。

「俺のやる仕事って限られておもしろくないと思って6月にやめた。(6月)中頃ですか。」

家賃はすでに払っていたから6月末までアパートには居ることが出来た。以前住み込んでいた新聞店に行ったら「そういう事なら少し泊って行けばってそこの社長が言ってくれたから、じゃ、お願いしますって2階に泊めてもらい、俺も働らかなきゃならないなって思って9月までやった。」

9月に新聞店の仕事を終って、アルバイトニュースで探したA設備という会社で12月までということでアルバイトをする。建物の暖房設備を付ける会社である。地方に出張が多かった。

「12月に入ったら現場休みになるから、金も余ってたから2ヶ月位、バイト探しながらブラブラしていた。」

「2ヶ月探しながら家の中でずっとゴロ寝してるって感じで、毎週毎週アルバイトニュース買いに行って、

で中々ね、夜の仕事って、そういうのって余り似合わないしね。たぶん使ってくれないんじゃないかな」
(脱毛症で毛が薄い。)

そうして仕事を探しているうちに、また新聞店の「手伝い」を始めることになる。

「3月位に朝刊だけ手伝うって事になってね。給料は5万位もらってたのかな。雪溶けたら、土方とかね。体使う仕事くるから、そういうの探そうかなって思ってたら5月位に人手が足りなくなって、本格的に手伝う様になって」5月から住み込んで専業となる。「拡張とか、そういうのって苦手だから嫌だって言ったんだけど、そんな自分のやる気しだいだからって言われて。」「前の会社、3ヶ月で辞めてるから今度は1年位やりたいなと思った。」

朝、夕刊の他に集金、拡張をしている。A設備にいた時は、出張が多く、夜中2時頃まで仕事をやってたことが多かった。その為アルバイト料は月に25万位になった。現在の新聞店の労働時間は朝の4時から夜の9時までである。昼は電話番号をしてるか集金に行ってるかである。

「拘束時間が長くてね。仕事はバラッバラってある感じ。」

「自分で時間作りたかったらその分、頑張って集金して次の日は集金しないでね。前の日やったやつを分けて当日集金したように店に出すとか」

賃金は食費とか引いて手取り5万ちょっとである。配達のパイクは自分で買われる。休日は特に無し。日曜の朝刊が終わってからが休みのようなものである。

以上5名が販売サービスに従事している者であるが職種の上から、「店員」と「新聞店住み込み」の二つに大別される。＜F7＞は高卒で初職から店員である。転職する際にも希望の職種を持っており、現在は店の主任になっている。

それに対し＜F1＞＜F3＞は中卒で、初職はそれぞれ製パン工、美容師見習いであるが、それぞれ2年、1年勤めた後ウエートレスを皮切りに「アルバイトニュースだけを頼り」に「中卒だからこんな仕事しかない」とウエートレス、臨時店員を転々としている。そしてその労働条件も＜F7＞の様な常雇の店員と比較すると劣悪である。

＜M1＞＜M5＞は共に新聞店の住み込み店員であり、それ以外の店員とその性格を大きく異にする。現在事務員の＜M4＞が新聞店に住み込みで高校修学をしたことからわかる様に、新聞店は長期に渡ってそこに居ることを予定されずに入職される性格を持つ。この2人も例外ではない。学卒時からの転職歴を見ると、何度か「新聞店員」に出入りした後に、いわば崩壊的に専業化してしまっている。

加えて、その労働内容、特に集金や拡張に伴う労働時間の長期拘束性はいわば、住み込みでないと成立し得ない性格を持つ。そして「紡績工」と同じ様に新聞店に住み込んでいる限りは、家庭生活、世代の再生産を含めた「正常な」社会生活を営める可能性は少ない。従って、＜M1＞がこうした性格を持つ職業に7年以上勤続している事に注意せねばならない。

また、二人の転職歴を見ると、＜M8＞や＜M11＞と同様に失業、半失業の状態が継続することがわかる。そうして場つなぎ的に2つのアルバイトをかけもちでやる様なことも出てくる。こうした状態におち入る可能性は、中卒であれ、高卒であれ、変わりがないのである。

5)「サービス業」従事者

＜F4＞

21歳中卒(高校中退)女 札幌にてスナックホステス

55年3月、中卒で卒園する。卒園後住み込みで洋裁の縫い子になる。その店に住み込んでいる人はもう

一人（園の卒業生）いた。「私がそういう仕事、好きだったから園の人も居たし、おいでとかずっと言われていたの」「私体弱かったから、向こうではすぐ返事もらえなかったから、住み込みだからね。でも先輩が良かったから、まじめにやってたから、だから入れたみたい。」

しかし、3ヶ月で飛び出す。「やめた理由は、すごくきつくてね。今まで同じ年代の子と一緒に居たでしょ。それがいきなり上の人ばかりと、あとおばさん連中ばかりでさ。友達いなかったの。それですごく仕事が辛かったし、住み込みだったからね。家の事もしなきゃなんなかったしょ。」「朝早く起きて、掃除してから仕事して、夜中まで皆で寝るまで。最後にお風呂まで洗ってね。寝てって感じではっきり言ってね、縫い物の仕事より家の仕事の方が多かったんだ。何かお手伝いさんみたいな感じで買い物行ったり、遠くまで買い出し行ったり、夜中でもね。つけ物出したりとか、少公女セーラムみたいだった。」「そういうのが耐えられなかったの。仕事がきつかったんじゃないくてね。」

「友達に言ったりしたけど、手紙のやりとりとか、だって外泊なんか出来なかったし、外出とかも出来なかったから手紙書いて。そこ辛いだったらね、やめなとかって皆言うでしょ。そんな時皆若いしさ、先生とかには話せなかったしね。私もね、思ったら突然行動する方だから、嫌と思ったらもう嫌だからね。そんな時（やめた時）もね、ものすごく嫌ってたしね。何か洋裁の仕事させられて、それ失敗したのね。それをすごく言われてね。何か色んな事ももう嫌だと思ってね。そのままの姿でね。逃げたっていうか出てったの。どこ行くのって言われて、ちょっとってパーと走って、タクシーに乗って、荷物も何も持たないでそのままの恰好で出てった。」そのまま倶知安の母親宅へ身を寄せた。母親が喫茶店をしているのでそこで手伝っていた。

その後高校に行こうと思い、札幌の父親宅に56年2月から身をよせた。2月からウエートレスのアルバイトをしていた。4月から昼間定時制のS高校に進学する。「先に仕事探したの。で学校行きますって」

しかし、父親の退職と弟の高校進学が重なり、＜M4＞が全部面倒を見なければならなくなり高校は1年で中退、57年より昼はウエートレス、夜はホステスとかけもちで働くようになる。この時は朝9時から翌日の朝1時まで仕事をしていた。

「もうやっていけないからって夜も働き出したの。それでやっていて一人で住んでもやっぱり苦しいから喫茶店にいたって10万もらえないから、だから昼と夜とやって」

現在、体を壊し60年夏より夜のスナックのみにする。夜6時から朝1時までである。

＜M14＞

19歳中卒男 札幌にて調理師

57年3月に中学卒業と同時にG学院を卒園する。中学時代から喫茶店がやりたくて、高校へは行かず調理師になろうと決めていた。卒業と同時に札幌のレストランで調理師の見習いをして住み込む。現在、そのレストランで調理師として勤めている。調理師は見習いを含め4人で＜M14＞は、社長の次に古い。労働時間は午前10時から午後9時までである。休みは決っていない。暇な日を取る。むらがあり多忙な月や7、8回休む月もある。長い休みは正月のみである。

基本給3万7千円、特別給、日曜手当等で14万5千円位になるが、諸経費が引かれて、手取りは9～10万位である。1年に1万円づつ昇給する。料理を覚えるのは「自分で本読んで勉強したり、他の店に行ってチョコチョコと食べてみてそれを真似してみたり」するなかである。

以上2名が「サービス業」に就いている者である。両者に共通しているのは労働時間が深夜に及ぶことや休日が一定していないことである。＜F4＞の事例のように、「縫い物の仕事が好き」で入職しても「家の仕事の方が多い」所で友人も居なければ、中学を出たばかりの児童にとって耐え難いものであろう。しかし、高校進学の志向を持ち、ウエートレスとホステスの二重の仕事

をしながら父親や弟の面倒を見るという経歴は、「ホステス」という職業から一般的に考えられる「不道德さ」からは全く縁遠いものである。

＜M14＞は希望の職である調理師として定着している。彼は「中卒で住み込んで手に職をつける」といった中卒就職者の型を唯一保持していると言える。しかしその彼にしても後述する様にまだ調理師免許は取得しておらず、不安定な「修業時代」は長く続くのである。

6)「主婦，無職者」

＜F 2＞

25歳中卒女 旭川で主婦 保険の外交員

51年3月に中卒でF園を卒園する。その後美容師専門学校に進学（卒業かどうかは不明）のち美容師見習いとして就労するも、「水商売」へ職を変わり、20歳で結婚するまで続ける。夫の転勤先である旭川へ転出後、何回か喫茶店のウェイトレスをする。60年4月より保険の外交員をしている。第2，第3土曜日が休みであるが、日中の時間はわりと自由に取れる。

＜M12＞

16歳中卒男 ＜M10＞の弟 無職

60年3月に中卒でF園を卒園する。高校に進学したかったが、自信が無く兄と同じ様にカタワク大工の見習いに住み込みで就職。

60年6月頃より高校に行くため仕事をやめて勉強したいと考える様になる。仕事がついて「半分（仕事をやめる）口実の様なところがあった」。9月上旬に赤平の母親宅に身を寄せ、高校受験の準備を始める。しかし狭い住居に祖父や妹等も同居しているという環境や自分一人で勉強することの困難さなどから、うまくいかず、10月上旬には札幌の兄のアパートに転り込んだ。

11月上旬、兄のところから兄の友人の父親の紹介でNパンの昼間の箱づめ作業にバイトに出るが、母親宅に帰るつもりで10日位でやめた。だが、母親には帰ることを拒否され、何もする事が無く、1日中6畳一間の兄のアパートの中でテレビを見てブラブラしている。

付記（なお、このケースは面接終了後、約10日後の11月下旬にF園に「兄と共倒れになる」と一時的に引き取られ、職探しを始めた。12月に入りアルバイトニュースで見つけた余市の青果店に就職。冬の間、東京近郊の住宅地で野菜を売り歩く仕事に就いている。）（61年1月現在）

＜M 3＞

24歳高卒男 無職 生活保護受給中 札幌在住 ＜F 7＞の兄

高3時にノイローゼで精神病院に入院。いったん退院するが55年3月、卒園と前後して再入院。57年6月に父の職場であった岩見沢市の製材会社の事務就く為退院するが、一週間後に三度めの入院となる。60年5月に退院。現在、生保を受給し妹のアパートのすぐ近くに住んで精神衛生センターに通所している。

＜F 2＞は現在主婦であるが、それまでの経歴は「水商売」を転々としており他の女子と同様である。現在結婚しているが、家計補助の為「ウェイトレス」「保険外交員」と不安定な雇用の職種についている。

＜M12＞は青少年失業者である。これまでも離転職の際、一定期間「無為」に過ごさざるを得ないことを指摘して来たが、彼は丁度その状態にあるのである。それにしても、16歳の少年が昼間からアパートの一室でゴロゴロとテレビを見て「ボーとしている」以外に為す事が無いというのは、いかに残酷な事であろうか。そして園に一時的に身を寄せ、園の職員の「指導」のもとで得られた職が「冬期間の野菜行商の出稼ぎ」でしかないのである。

＜M3＞は現在のところ、一般的に雇用され得るに足る労働能力を持たない。従ってその生活は社会サービスを含む社会関係に全面的に依存せざるを得ない。

3. 小 括

以上が養護施設卒園者の「労働生活」である。各項の終りにケース記録を読む際注意すべき点を掲げておいたし、何よりも各ケース記録の彼らの発言がその労働生活の「苦しさ」を語っているのだが、以下簡単にそれらから得られた知見をまとめる。

まず、卒園者の中では比較的高い位置にあると思われる高卒の常雇の労働者にしても、公務員などの極く少数をのぞいてその労働生活も厳しいものである。そこでは、“長時間の労働”が普通になっており、その割に“低賃金労働”を強いられているのである。

従って、不安定な雇用の下での卒園者の労働は一層厳しいものである。特に中卒者の場合「カタワク大工見習い」や「新聞店住み込み」の様なすでに「職業の切れはし」の様な職業からその社会生活を始めることが多いのであるが、転職をくり返していくうちに、ますます厳しい労働条件にある職業しか得られなくなる。そしてそのことは高卒者といえども例外ではない。

そして、その転職の型はきわめて特徴的である。男子は中、高卒を問わず、転職先は、「新聞店」か「アルバイトニュースがたより」のアルバイト的な仕事であり、その先も単純屋外労働や新聞店の様な極めて不安定な職種に流入せざるを得ない。女子の場合は一層はっきりしており、転職先は常雇の店員から同職種に移った一例をのぞいてすべて「ウェートレス」か「水商売」である。そして、その後は「ウェートレス」「水商売」「臨時店員」の間を移動し得るにすぎない。

加えて、転職の際、すみやかに次の仕事が決まるのではなく、一定の期間彼らが失業ないし半失業の状態におかれることが普通であることがわかる。「自立」させられた彼らは自らの手でその生活資料を得る以外は生活するすべを持たず、必然的に労働力の窮迫的販売を強いられることになる。その結果17歳の少年が深夜8:00～5:00というアルバイトについているという様な事態がおこるのである。そして、その事を一層促進する要因として、特に養護施設卒園者の場合「住居」の問題が大きいことが示唆された。即ち、住み込みで働き、帰る家を持たない彼らは職を失ったとたん住居をも失なうことになるのである。（この点は次章であらためて検討を加える。）

また、こうした「失業」の状態におかれた彼らは、その間、何もなすことがない「無為」の生活を強制される。「毎週アルバイトニュースを買って」「家でゴロゴロしてる」しか他に術がないのである。特に学校教育の他は未成年者、特に若年労働者に対する施策を全く持たない我国では、その矛盾は彼らに最も多くしわよせられるのである。^{1),2)}

そして、こうした離転職にかかわる問題として、重要なことはいわば「袋小路的職業」—(blind alley job)—というべき職種群の存在である。これまでの分析では、「紡績工」と「新聞店の住み込み」がまさに第1節でのべた規定にあてはまる。³⁾すなわちいずれもいずれ離職することを予定して入職しているということにおいて「何等永久的な仕事として存在しない」のであり、また紡績工が唯一身につける「糸つなぎ」の技術も、新聞店にいたという経験も何ら次の職業に生かされる可能性はなく「職業生活の発展の可能性」もまたうばわれているのである。そしてまた、紡績工はその後の職種を検討し得なかったが、新聞店の住み込みは転職後の職種をみる限りで同様の職業の範ちゅうから脱出する可能性が非常に少ないという面においても、まさに「袋小路」なのである。

こうした「袋小路的職業」が卒園者の職歴の中に多く見い出されたことは、彼らがその社会生

活のほとんど開始時点から、不安定就労層として固定化されることを意味する。そして、そのことは彼ら自身の「自立」への見通しにも深くかかわることであろう。

注

- 1) 我国と異なり若年労働者の失業問題が非常に顕在化している英国では、青少年失業者に対する救恤金の支給や教育訓練政策がとられている。しかし高山武志（「英国の青少年失業と教育」北海道大学教育学部産業教育計画研究施設研究報告書第25号、『産業と教育』第3号所収）によると、これらの教育訓練計画は実質的には「失業対策」として機能してしまっている。これに関して青少年の失業対策は労働力の供給の要因ではなく、その需要の構造に重点がおかれるべきだとの高山の批判がある。
- 2) 近年、日本における労働問題研究、特に社会保障や社会福祉に関わるそれは「高齢者問題」がその主流であり、若年労働者に関することはあまりにも語られることが少ない様に思われる。
- 3) この他にも、このケース分析で登場した「ウェートレス」や「臨時店員」「工場でのアルバイト」なども、その転職歴における位置からみて「袋小路的」な職業であると考えることができよう。

第3章 養護施設卒園生の「社会的ネットワーク」の構造

1. 「社会的ネットワーク」の意味と出身施設による「アフターケア」

本節では「施設」、「家族」との関係の考察を通じて本章での分析の視点を得たい。

それでは具体的に、彼らの「社会的ネットワーク」を構成するものとして、どのような要素が考えられるだろうか。

そもそも養護施設に入所した児童は一般の子供と比較して「家族」との関係が薄く、かわって「施設」との関係を持つ。またこの「家族」も、施設入所ということからわかる通り、いわば「崩壊」しまとまりが弱いものであるから、本来ならば養育者たるべき「親」と、本人と同様に被養育者である「兄弟」は区別して考えた方が便宜であろう。また親の代替の養育者たるべきであったと一般に考えられる「親族」との関係¹⁾も視野に入れられるべきであるが、この点についてはすでに第1章で示した様に、親族の多い者程進学に有利な条件となることがわかっている。その他在学、在園中の学校で得られた教師、友人との関係、また卒園してから新たに築かれるべき職場との関係や職場内外での友人、恋人、その他のサークル等をここでは彼らの「社会的ネットワーク」を構成する単位と考えておきたい。

もとより重要なのは、バラバラに分解された個々の「関係」ではなくて、個人を取り巻くその「関係の組み合わせ」、すなわちそのネットワークのあり方という事なのだが、その際ただ「関係」の有無や広がりのみではなく、その内実が問われる必要がある。

ところで前述の様に「養護施設卒園者」であるが故に施設との関係が重要になると考えられるが、施設で現状を把握している者の性格について第1章に於いて検討した。そこで得られた知見は「不利」な状態で卒園させざるを得ない者、従ってまた相対的に厳しい社会生活を送らざるを得ないと考えられるほど、施設における現状の把握がなされにくいということである。また家族との関係が希薄な者ほど、施設との関係も持ちにくいということも示唆された。そこで、施設との「関係」の内実にかかわる1つの指標として、卒園後の施設への相談、いわゆる「アフターケア」の有無について統計的に観察したい。

まず表3-1は具体的な相談の有無を卒園年度別に見たものである。卒園後、具体的な「アフターケア」を受けた者は全体の4割に満たない。各年度毎に大きな変動を見せないのは卒園後す

表3-1 卒園年度別施設への相談の有無

年度 相談有無	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
不 明	1 (10.0)	10 (25.0)	5 (12.5)	7 (17.1)	10 (21.7)	6 (12.5)	8 (23.5)	5 (13.9)	4 (9.1)	6 (10.5)	10 (33.3)	72 (16.9)
あ る	3 (30.0)	7 (17.5)	13 (32.5)	16 (39.0)	18 (39.1)	22 (44.1)	15 (44.1)	12 (33.3)	17 (38.6)	20 (35.1)	6 (20.0)	149 (34.9)
な い	6 (60.0)	23 (57.5)	22 (55.0)	18 (43.9)	18 (39.1)	21 (43.8)	11 (32.4)	19 (52.8)	23 (52.3)	31 (54.4)	14 (46.7)	206 (48.2)
計	10 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)	41 (100.0)	46 (100.0)	49 (100.0)	34 (100.0)	36 (100.0)	44 (100.0)	57 (100.0)	30 (100.0)	427 (100.0)

ぐに相談を持ち込む者が多い為と考えられる。そこで表3-2は卒園後何年位の時期に相談があったかを卒園年度毎に見たものである。

まず卒園後1年位までに相談を持ち込む者が多いことがわかる。また4年以上たつと、かなりその数は減少し、卒園後3年が1つの転機になっている。

表3-2 卒園年度別相談の時期

年度 時期	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
卒園後1年位の時期		2 (28.6)	4 (40.0)	5 (38.5)	5 (29.4)	7 (41.2)	3 (27.3)	3 (33.3)	10 (71.4)	15 (94.1)	1 (100.0)	55 (46.6)
卒園後2年位の時期	1 (33.3)		4 (40.0)	3 (23.1)	4 (23.5)	4 (23.5)	2 (18.2)	4 (44.4)	2 (14.3)	1 (5.9)		25 (21.2)
卒園後3年位の時期	1 (33.3)	2 (28.6)	1 (10.0)	2 (15.4)	3 (17.7)	5 (29.4)	5 (45.5)	2 (22.2)	2 (14.3)			23 (19.5)
卒園後4年位の時期	1 (33.3)				2 (11.8)	1 (5.9)						4 (3.4)
卒園後5年位の時期		2 (28.6)	1 (10.0)	1 (7.7)	2 (11.8)		1 (9.9)					7 (5.9)
卒園後6年位の時期				1 (7.7)								1 (0.9)
卒園後7年位の時期		1 (14.3)		1 (7.7)	1 (5.9)							3 (2.5)
計	3 (100.0)	7 (100.0)	10 (100.0)	13 (100.0)	17 (100.0)	17 (100.0)	11 (100.0)	9 (100.0)	14 (100.0)	16 (100.0)	1 (100.0)	118 (100.0)

相談内容を表3-3に見ると、職業に関する事が多くなっている。また「その他」は多くの要因が複合しているものをここに分類したが、その割合の多さは相談内容の複雑さを示している。また相談内容を相談時期別に見ると、職業に関する事、特に職場の人間関係に関することは卒園後すぐに集中しており、入職後の厳しい労働生活を想起させる。家族関係の相談はその絶対数は少ないものの各年次に分散している傾向がみられ、卒園後5年ないし6年たってもなお家族関係の不安定さが生活上の問題になっていることがわかる。

ところで表3-4、3-5はそれぞれ中3時の成績、卒園時の修学段階別に相談の有無を見たものであるが、それぞれ中3時の学校成績が高い者、また卒園時の修学段階が高い者程、卒園後も具体的な「アフターケア」を受けている者が多い事を示している。この結果は重要である。何故ならば、中3時の成績が低く、また中卒で卒園せざるを得ない者程具体的な生活困難、つまり

表3-3 有談があった時の卒園後の年数と相談内容

相談内容 年数	転 職	職場の人 間 関 係	家族関係	借 金	結 婚	保 障 人	そ の 他	計
1	21 (47.7)	5 (83.3)		1 (14.5)			20 (60.7)	47 (45.3)
2	11 (25.0)	1 (16.7)	4 (44.5)	2 (28.5)	1 (33.3)		6 (18.2)	25 (24.0)
3	10 (22.7)		1 (11.1)	2 (28.5)	1 (33.3)	1 (50.0)	5 (15.1)	20 (19.2)
4	1 (2.3)			2 (28.5)	1 (33.4)			4 (3.9)
5	1 (2.3)		3 (33.3)			1 (50.0)	2 (6.0)	7 (6.7)
6			1 (11.1)					1 (0.9)
小計(%)	44 (100)	6 (100)	9 (100)	7 (100)	3 (100)	2 (100)	33 (100)	104 (100)
不 明	11	4	4	1		1	11	32
計	55	10	13	8	3	3	44	136

表3-4 中3時の学業成績と卒園後の施設への相談の有無

相談	成績	不 明	上	中	下	計
不 明		3	1	19	49	72
あ る		4 (66.6)	7 (70.0)	42 (43.8)	96 (39.5)	149 (42.0)
な い		2 (33.3)	3 (30.0)	54 (56.2)	147 (60.5)	206 (58.0)
計		9	11	115	292	427

(割合は不明を除いて除してある)

表3-5 卒園時の学歴と卒園後の施設への相談の有無

相談の有無	学歴	不 明	中 卒	高 卒 (公)	高 卒 (私)	高 中 校 退	職 訓 卒	職 中 訓 退	その他	計
不 明		2	50	8	5	1	4	1	1	72
あ る			96 (37.8)	20 (51.3)	11 (50.0)	4 (57.1)	16 (43.2)		2 (33.3)	149 (42.0)
な い			148 (62.2)	19 (48.7)	11 (50.0)	3 (42.9)	21 (56.8)		4 (66.6)	206 (58.0)
計		2	294	47	27	8	41	1	7	427

(割合は不明を除いて除してある)

「アフターケア」を必要とする事柄を抱えている者が多いことが予想されるのだが、実際はそうした層程「アフターケア」という社会サービスから遠ざけられた存在だということを示唆しているからである。

それでは彼らは自らの生活上の困難をどの様に解決しているのであろうか。

一つには家族との関係の中で処理していることが考えられる。表3-6は在園中の一時帰省の有無毎に相談の有無を見たものだが、帰省が定期的に行なわれていた者、すなわち家族との関係が相対的に安定していた者には相談が無い者が多く、家族関係は卒園後の問題処理に一定の役割

表3-6 在園中の一時帰省と卒園後の施設への相談の有無

帰省の有無 相談の有無	不 明	ほ ぼ 定 期 的	不 定 期	全 く 無 し	計
不 明	2	23	21	26	72
あ る	2 (33.3)	41 (33.6)	52 (49.5)	54 (44.3)	149 (42.0)
な い	4 (66.6)	81 (66.4)	53 (50.5)	68 (55.7)	206 (58.0)
計	8	145	126	148	427

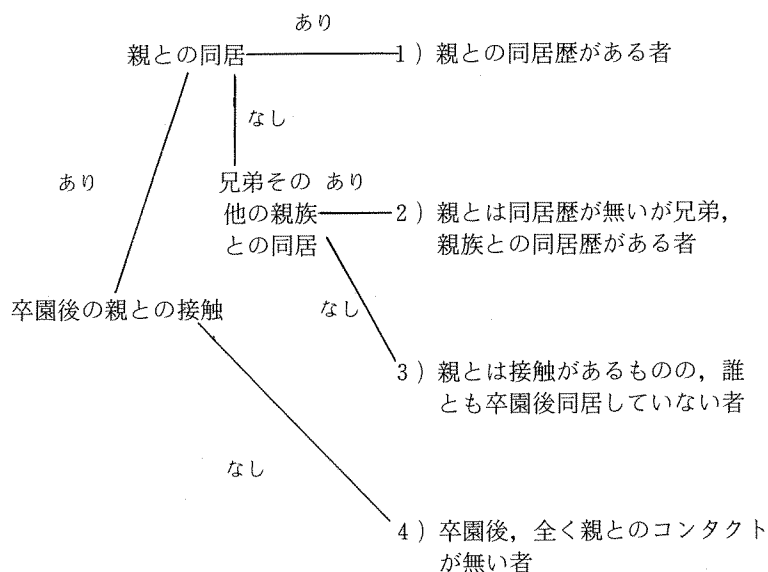
(割合は不明を除いて除してある)

表3-7 現在の家族との同居の状況

同居の有無	卒園年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
同居している		1 (10.0)	2 (5.0)	1 (2.5)	6 (14.6)	4 (8.7)	7 (14.6)	3 (8.8)	4 (11.1)	12 (27.3)	12 (21.1)	7 (23.3)	59 (13.8)
同居していない		2 (20.0)	11 (27.5)	15 (37.5)	17 (41.5)	20 (43.5)	25 (50.0)	19 (55.9)	19 (52.8)	24 (54.5)	34 (59.6)	19 (63.3)	205 (48.0)
不 明		7 (70.0)	27 (67.5)	24 (60.0)	18 (43.8)	22 (47.8)	17 (35.4)	12 (35.3)	13 (36.1)	8 (18.2)	11 (19.3)	4 (13.3)	163 (38.2)
計		10 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)	41 (100.0)	46 (100.0)	49 (100.0)	34 (100.0)	36 (100.0)	44 (100.0)	57 (100.0)	30 (100.0)	427 (100.0)

を持っていると言える。しかし現在の家族との同居の有無を表3-7にみると、不明、無回答の者を除くと8割近くが家族とは同居しておらず、家族との関係は全般的に頼りないものである。また表3-8は同居している者について同居相手を卒園年次別に見たものであるが、卒園後年数がたつにつれて同居相手は「親」よりもむしろ「兄弟」が選ばれている。従って、卒園後家族との関係は一定の意味を持つとはいえ、その内実はかなり希薄なものであることが予想される。

そこで次節での分析の手がかりを得るために、卒園後の同居の有無で分類を試みると以下の様になる。



ここで、あらためて養護施設卒園者にとって「同居」の持つ意味について確認しておきたい。これまで繰り返して述べて来た様に養護施設卒園者はその家族の基盤が崩壊した人々である。従って卒園と同時に「帰るべき家」を持たなくなるわけであるから、表3-9に見る様に「住み込み」で就職する有が圧倒的に多数を占める。逆に言う「住み込み」める所に就職先を求めざるを得ないのである。ところが前章で検討した様に彼らの労働生活は特に住み込みの場合、その多くが非常に厳しいものであり、その結果多くの場合転職を招く。表3-10は、転職の全体的な状況を見

表3-8 現在の同居相手

同居家族 \ 卒園年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
実 父 母		2 (100.0)		1 (16.7)	1 (33.3)	1 (20.0)	1 (33.3)	4 (100.0)	6 (60.0)	7 (70.0)	6 (85.7)	29 (55.8)
継 父 母			1 (100.0)				1 (33.3)		1 (10.0)			3 (5.8)
祖 父 母									1 (10.0)			1 (1.9)
兄 弟	1 (100.0)			4 (66.7)	1 (33.3)	4 (80.0)	1 (33.3)		2 (20.0)	3 (30.0)	1 (14.3)	17 (32.7)
おじ・おば					1 (33.3)							1 (1.9)
そ の 他				1 (16.7)								1 (1.9)
計	1 (100.0)	2 (100.0)	1 (100.0)	6 (100.0)	3 (100.0)	5 (100.0)	3 (100.0)	4 (100.0)	10 (100.0)	10 (100.0)	7 (100.0)	52 (100.0)

表3-9 卒園時の住居

進路 \ 住居	家庭引き取り (実父母)	家庭引き取り (実父母以外)	アパート	知 人 宅	住 込 み (寮)	そ の 他	計	不 明
進 学 者	34 (61.8)	6 (10.9)	1 (1.8)	3 (5.4)	7 (12.7)	4 (7.3)	55 (100.0)	7
就 職 中 卒	25 (10.9)	3 (1.3)	6 (2.6)		192 (83.8)	3 (1.3)	229 (100.0)	6
就 職 高 卒	5 (7.8)	1 (1.5)	11 (17.2)		47 (73.5)		64 (100.0)	1
就職 高校中退		1 (16.7)	1 (16.7)		4 (66.7)		6 (100.0)	1
就職 職 訓 卒	1 (2.6)		6 (15.4)		31 (79.5)	1 (2.6)	39 (100.0)	—
そ の 他			1 (33.3)		2 (66.6)		3 (100.0)	16
計	65 (16.4)	11 (2.8)	26 (6.6)	3 (0.8)	283 (71.5)	8 (2.0)	396 (100.0)	31 427

表3-10 卒園年度別転職の状況

卒園年度 \ 転職	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	計
転職なし	1 (25.0)	2 (25.0)	6 (35.3)	5 (31.3)	2 (9.1)	9 (36.0)	3 (18.8)	12 (70.6)	9 (31.0)	16 (48.5)	17 (81.0)	82 (39.4)
同 職 種		1 (12.5)			2 (9.1)	1 (4.0)	3 (18.8)	1 (5.9)	3 (10.3)	4 (12.1)	1 (4.8)	16 (7.7)
他 職 種	3 (75.0)	5 (62.5)	11 (64.7)	11 (68.8)	18 (81.8)	15 (60.0)	10 (62.5)	4 (23.5)	17 (58.6)	13 (39.4)	3 (14.3)	110 (52.9)
計	4 (100.0)	8 (100.0)	17 (100.0)	16 (100.0)	22 (100.0)	25 (100.0)	16 (100.0)	17 (100.0)	29 (100.0)	33 (100.0)	21 (100.0)	208 (100.0)

たものであるが、卒園後すぐの者でも2割近いものが転職しており、全年度を通すと6割強、それもその多くが初職とは全く関係ない他の職種に転職をしている。

住み込みで就職した養護施設卒園者がその職を離れることは、すなわち「住所不定者」になることを意味する。その際、前章でもかいま見た様に、一部の者は友人宅を泊り歩いたり、出身施設に転り込んだりするが、その多くはとりあえずの「避難先」を、その関係は希薄とは言いながらも親、兄弟の所に求めざるを得ない。

表3-11は上記の1)～4)の分類に従って面接終了者の職歴を総括したものである。

表3-11 同居歴と転職歴

	No.	年齢・学歴・性別	現 職	転 職 歴
卒園後親と同居歴があるもの	M12	16才中卒男	無 職	カタワク大工見習い→パン工場アルバイト→無職
	M11	17才中卒男	家の外壁張り [△]	新聞店員→運造屋・八百屋アルバイト→大工手伝い→現職 [△]
	F 4	21才中卒女	スナックホステス	洋裁縫い子 [△] →ウエートレス(俱全安)→ウエートレス→現職
	M 7	21才高卒男	製パン工 [△]	なし
	M 8	21才高卒男 (専門学校中退)	水道配管工 [△]	新聞店員 [△] (東京)→ウエイター(帯広)→現職 [△]
○ 親と家族とは同居歴がないが、兄の	M10	17才中卒男	パンの発送仕分け	カタワク大工見習い [△] →現職
	M 1	25才中卒男	新聞店員 [△]	寿司店店員 [△] →新聞店員 [△] →そば屋店員→ウエイター現職 [△]
	F 3	23才中卒女	デパート臨時店員	美容師見習い [△] →ウエートレス→店員→店員→現職
	F 2	25才中卒女	主婦・保険外交員 (旭川)	美容師見習い [△] →水商売→ウエートレス→現職(旭川)
	F 1	26才中卒女	デパート臨時店員	製パン工 [△] →ウエートレス・水商売(名古屋)→ウエートレス→ウエートレス→現職
○ 接 卒園後誰とも同居歴のないもの	M 5	21才高卒男	新聞店員 [△]	事務員→新聞店員 [△] →エアコン取り付けアルバイト→現職 [△]
	M15	17才中卒男	自動車塗装工 [△]	なし
	M14	19才中卒男	調理師 [△]	なし
	F 6	19才中卒女	紡績工(岐阜) [△]	なし
	M 9	20才高卒男	製パン工 [△]	なし
○ 接 卒園後誰とも同居歴のないもの	M 6	22才高卒男	公務員	なし
	M13	22才高卒男	クレーン保守・製備 工(横浜) [△]	なし
	M 2	24才高卒男	経理事務員 [△]	なし
	M 3	24才高卒男	無職(生保受給)	60.5精神病院退院 職歴なし
	F 7	21才高卒女	婦人服店店員	店員→現職
接 卒園後親と同居歴のないもの	F 8	17才中卒女	紡績工 [△] (岐阜)	なし
	M 4	21才高卒男	事務員	新聞店店員→事務員
	F 5	23才高卒女	電気部品検査工 (東京)	検査工→ウエートレス→「水商売」 [△] (東京)→現職

左に○がついているものは現在も同居しているもの。特に地名を示していない場合は札幌及びその近郊である。職業の右肩の[△]は住み込み就労、及び寮への入居を示す。

まず、多くが何らかの形でコンタクトを持っているが、親、親族と同居歴のあるものは、そのほとんどが転職歴のある者である。中卒者に特にその傾向が強く、転職したが同居歴の無い者は全て高卒者である。従って「同居」は「転職」という生活上の「事故」に対応する彼らの「社会的ネットワーク」のあり方を表すものの一つであると考えられるが、現在もお同居している者はわずか3ケースにすぎず、その「対処」も極めて一時的な性格のものであると考えられる。

以上の「アフターケア」の希薄さと、同居の持つ意味についての考察をふまえて、次節では彼

らの「社会的ネットワーク」を具体的に検討していこう。

注

- 1) 例えば P. Townsend は都市の老人の生活に於いて同居していない親族との関係が大きな意味を持つことを明らかにした。「The Family Life of Old People — An Inquiry in East London 1957」山室周平監訳「居宅老人の生活と親族網—戦後東ロンドンに於ける実証的研究」1974年、垣内出版。なお、こうした親族との関係の構造を Townsend は“Extended family”—拡大家族—と表現している。

2. 養護施設卒園者の「社会的ネットワーク」

1) 親と卒園後同居歴のあるもの

<M7>

21歳高卒男 千歳にて製パン工

昭和58年4月、就職して最初は札幌工場の寮に住んでいた。職場が札幌から千歳にかわり、千歳の実家から恵庭の工場に通っていた。しかし家にお金を入れるより、自分で独立した方が安上りなので安い部屋を探して実家を出た。家には最初1ヶ月に2万、のち2万5千円～3万位入れていた。

「貯金するお金も無くなっちゃうのでそれではダメだと思い、自分で部屋借りてやった方が良かった。」60年9月の末、何も相談せず「ボンと出て、そのまま移ったからって」家を出る。現在、お金は入っていない。

「俺ん家ひどいんだ。親父が全く働かない。こっちにお金借してって来るでしょ。借さないわけにいかないし、帰ったら帰ったで酒飲んでるしガキが多いんだ。4人いるけど1人T学園（精薄施設）に行ってる。あと3人は実家にいる。」お金をせびられるんじゃないかと思い、たまに顔を出してもすぐ帰ってくる。去年、中学生の弟が修学旅行中盲腸になって病院に一週間つききりだった。継母は家にいる3人の子供の世話でつきそえなかったのである。「ま、そういう時は時で仕方ないからあれするけど、お金だったら違うからね。」「実母は父と別れたショックでお酒飲んで川に落ちて死んだんだよね。だからおやじが好きじゃない。母さんの葬式費用も出してもらえなかった。その時は今の母と一緒にってたから。」

親戚とは余り連絡は無い。親戚の人には父がお金を借りたりして迷惑をかけたので信用されていない。「お前はこの家でめずらしくしっかりしてる」と言われる。千歳にいるおじさんの所にはたまに顔を出す。よくおこづかいなどをくれた。会社に入ってから、作ってるお菓子を持って行ったことがある。

友人は職場の人が中心であり、学校時代の友人は全く付き合いは無い。「自分で言うのも何だけど皆から好かれる方だ。よく皆と話すし、上の人とも話す。」職場では人間関係のゴタゴタはない。会社の同期の人から転職の相談を受けたことがある。また、引っ越しの際、職場の人にいらぬ物をもらって家具を少しそろえた。

仕事しながら今日どこか遊びに行くかとよく話す。しかし仕事が忙しくサークルなどは入れない。卓球部のみずっとやってる。仕事が終わってからが練習で、試合が近くなると練習も多くなる。

高校の頃、施設にいたから全々遊ぶことを知らず、就職して職場の友達と話が合わなくて困ったことがある。園の先輩である<M6>には、転職の相談にのってもらったり、勉強の仕方を教えてもらったりしている。

現在、友人の紹介で知り合い、付き合って1年半になる高3の彼女がいる。学校が終わってからたまに食事を作りに来る。H町の農協に就職が決った。将来結婚を考えている。しかしその彼女にも「家の事とか話さない」。

休みの日は、前はパチンコやってたけど、今はやめた。「全々行くあてないから、車で千歳まで行って

店見たり、レコード見たり位かな。」月に2〜3回飲みに行く。

園にはあまり顔を出さないが、先生にはよく「親父働いているか？」と聞かれる。家を出たこともその方が良いと言ってくれた。

去年の冬、交通事故を起こした。賠償金は保険で払ったけど、自分の車の修理代には12〜13万かり、会社の労金から8万借りた。また、会社の人にどう対処したら良いのか聞いた。園の先生には、処理が終わってから報告した。手伝ってもらおうとは思わない。園にいる時、タバコとか吸って怒られたりしたからもうあまり迷惑をかけたくない。

現在、特に何かあって困るという訳じゃない。「今独立して生活してるから服買うにも高いしね。そういう点で困るね。服も買えないし」

<M 8>

21歳高卒男 札幌で水道配管工

昭和59年9月、専門学校を中退し川崎から帰って来て、しばらく帯広の母親宅に身を寄せた。その時、母親にお金を出してもらい、車の免許を取りに行く。昼は木工所、夜はスナックで働いている。現在は、日頃あまり連絡しないし母親からも手紙が1回来たのみである。母親は再婚しており、2児をもうけている。継父は、「前の親父よりはマシ」な程度の「どうしようもない男」である。継父が気に入らないので同居の意志は無い。「離婚すればいいのに」とも思うが、異父弟を自分と同じ目に合わせるのかわいそうだ。F園に中3の弟が居る。先日一緒に帰省した折、しっかり勉強しろと言いつけさせた。

帯広から札幌に出たいという気持ちと、札幌の方が仕事があるので59年12月〜60年4月まで園に転がり込んで職を探していた。「普通ならなかなか園には置いてもらえないのに、置いてもらたのは新聞奨学生がかなりきついことを先生も知っていたからだと思う。」現在の職場は園の指導員の個人的なツテで紹介された。

現在の職場の人間は、プライベートな事には口出しをしないが、仕事の事ではかなり口うるさい。「やる気無いならやめても良いよ」とよく言われるので、非常に頭に来る。少々風邪でも、仕事には出る。皆そうしてるし、第一それ位で休んだら信用が無くなる。

休みの日は何もしないで寝てるか、友達と外に出て遊ぶ。高校時代の友人とはけっこう連絡がある。しかし休日が決っていないのでなかなか会えない。園の友人はお互い住所がわからないので交際は無い。

<F 4>

21歳中卒女 札幌でスナックホステス

昭和55年3月、中学を卒業して洋裁の縫い子に住み込み就職したが、その職場の人間関係はひどいものであった。「その家ね、下が家なのね。上がそういう縫い場って作業場みたくなくて、皆そこでやってるしょ。息子さんとかも居たんだ。何か、息子さんも住み込みも同じ家族みたいに見てもらえたら良いんだけど、何かすごいねえ、やっぱり区別があったの。そりゃそうかもしれないけど、食事も全々違ったし向こうで刺身食べてるから刺身だとか思ったら、サンマの缶詰めだったり、食べる場所も違うの。皆テーブルで食べるけど私達何かね、奥の汚ない部屋でね、テーブルで畳に座って食べたり、それとね、御飯もちろん作らされたり、作られるけど食事違うし。同じ仲間がいれば良いんだけど、一緒にいた子は住み込みの子もいたけど、その子はもう4年位そこにいた子で何でも出来てベテランだったからほとんど仕事してたからね。私だけやらされてたの。だからその子とも合わなかったっというか、年代も違ったせいか、何か悲しい事あっても辛くても誰も話す人がいなくてね。」

その職場を半年で飛び出し倶知安の母親宅に身を寄せる。当時、母親宅には姉もいた。現在母親は倶知安、姉は苫小牧にいるが現在もたまに連絡を取り合っている。

母親宅には半年余りいた。その後高校に行きたいと札幌に出て来て、父親と同居する様になる。また、F園に在園していた弟も卒業後、父親宅に同居して高校に進学することになる。しかし、父親はあてにならず、＜F4＞が一家を支えていた。「それでね、うちのお父さんも何かボーとした人なんだ。何か私が全部やってね。それやらなきゃ皆何もしないって感覚で、うちの弟も頼りっぱなしで学校行きたくないとか言い出してさ、生活苦しいのも一生懸命学校出しているのもそういう解らないの、そういう事言い出してもう嫌になった。」

58年11月に父親宅を出て男と同棲する様になる。しかし59年の暮れ、父親のアパートの大家さんから電話があった。「何かリューマチになって体壊して働けないって」「父親は一人で生活していて、私が気付いた時には電気は付いていない。家賃は貯めるわで、私が思いあまって自分の家の近くに父親の部屋貸りたんだわ。」

30万位あった借金も払う。部屋を借りるお金はなかったので姉に借りた。また、スナックの客にM区役所の人がいて、父親には生活保護を受けさせてもらう様に話す。「すごく良い人で親身になってくれてね。」「生活保護って簡単に出ないんだって。まして娘はもう働いているしね。養なえることは養なえるでしょ。だからダメみたいなんだ。でもね、一応うまくやってあげるって、で今生活保護もらってるの。」

現在、父親の所にはあまり訪問しない。「時間が無いからね。たまにね、家が近いからね、店とかその辺で会うからね。」

父親を自宅近くのアパートに移した時、弟は鑑別所に入っていた。そのことは母親から連絡が来たのみで、父親からは何の連絡もなかった。弟は鑑別所を出てから苫小牧の姉宅に住み、姉の夫の建築の仕事を手伝う様になる。しかし、姉の夫はタバコも吸わず、仕事にも厳しい人で、弟は長続きしなかった。

「今年（60年）の正月、遊びに来て就職したいと言ったんだけど、私ももう面倒見れないし、疲れちゃったから、お父さんの事もあるしね。だからお姉ちゃん所来たってね。あんた働かなきゃならないし、お姉ちゃんが食べさせてあげるわけにはいかないしって言ったんだけど、それが何か自分は邪魔にされてると思ったらしくて、何かそうやって言ったんだよね。俺は結局、邪魔者なんだって言って、苫小牧に帰ったんだけど、今思えばかわいそうだなって思うて。苫小牧に帰ったんだけどね、姉の夫と一緒に生活するの嫌だったみたいで、住み込みで働いたの。自分で探して来て。何かチリ紙交換。それでまずはお金を貯めてね、札幌に来るって言ってたんだけど、けっこうその人ともうまくいったみたいだけど、4ヶ月程前にその人から夜中に電話来てね。寮の人達と3人位でいなくなっちゃったって。だからね、内地に良い仕事の当てがあって皆で行ったんじゃないかって、職場の人が言ってたんだけど、連絡も来ないしね。どうしようもないから連絡来るまで待つしかないねって言って、一人じゃないからね。25位の人と、30か40位の人が一緒だって言うから、子供同志でいなくなったんじゃないから、搜索願いを出すあれじゃないからって連絡来るの待ってたんだけど」しかし、現在弟の行方はつかめていない。

＜F4＞は中学の時からホルモンのバランスが崩れやすく、入院して甲状腺の手術をしたこともある。卒業してからも医師に手術が必要であると言われた。「私、入院なんか出来ないって粘って毎日点滴とか打って、薬飲んで栄養剤とか打たれて」「やっぱりお金無いし、入院したらお金かかるし。」「一日、二日具合悪いと休んだだけ。」このとき、母、姉には相談した。

＜F7＞とはよく会う。施設にいた時から仲が良い。同じ年である。＜F7＞は園との窓口になってる。しかし園には卒業後一度も行っていない。S高校をやめる時にも話をしに行こうとは考えなかった。自分の担当の保母もいなかった。「どっちかって言うと、そういう事あまり相談しないもんね。」

<M11>

17歳中卒男 札幌で家の外壁張り

昭和59年3月、中卒後就職した新聞店を5日で飛び出し、白石の父親宅に転り込んだ。現在も白石に父親と中1、小6、小3、小1の弟妹が4人いる。60年4月まで同居していた。今でもたまに顔を出す。父親にお金をあげることもある。今、父親は自動車整備の仕事をしている。帰っても父親とは、たまに仕事の話をする位である。親戚の所にはあまり行かない。以前に法事があった時、初めて親戚に会った。母親とは全々連絡がない。祖母は白石に一人暮らしであり、たまに父親宅に来る。祖父はねたきりで入院している。

現在、付き合っている人間は、職場の親方とYさんである。この3人でやってる職場なのである。親方は現職の前のアルミの仕事に失敗して離婚した。元ヤクザである。良く面倒を見てもらっている。相談事をするとしたら親方である。Yさんは妻と子供の3人暮らしである。自分の近くのアパートに住んでおり、食事の面倒を見てもらっている。35歳位。今住んでいる部屋を紹介してくれた。どこに行くのでも3人で行動する。

休みの日は昼まで寝て、午後から親方の家に行く。「何もする事ないから、トラックの荷物整理したりとか。」

中学時代の友人とは全く付き合いがない。昭和60年8月31日からYさんに誘われて宗教団体に入った。入ってから自分の性格が変わったと思う。そこではボランティア活動などをする。

仕事を病気で休んだことはない。工作中、落ちてケガなどをして、病院には行かないで、ほったらかしておくのである。

園には昭和60年の冬からたまに顔を出す様になった。最初の仕事をやめた後は、園には色々迷惑もかけ、連絡を取りづらいものだ。

<M12>

16歳中卒男 無職 <M10>の弟

60年9月上旬、4月から勤めていたカタワク大工をやめ、母親の元で高校入試の準備をするために赤平に行く。しかし住居の狭さ、母親の男性関係が不安定であることなどから1ヶ月で母親宅を出ることになる。母親は病院に勤めているが、給料は7万ちょっとで経済的にも苦しい。また、8月末に交通事故を起こし、かなり借金があった。その為に<M12>が高校進学のために貯めていた15万の貯金も使われてしまった。

10月上旬には、札幌の兄<M10>の所に母親から片道の旅費のみをもらって出てきた。その後、母親から何回か送金があった。11月中旬に来札し、赤平には帰って来るなど釘を刺された。

兄は1つ年上で現在、札幌で一人暮らし。夜、バイトをしている。知人を通してバイトを世話してくれた。赤平にいる異兄妹は小学校5年か6年だが、正確なことは知らない。また、実父が最近見つかったと聞いた。何か仕事を世話してくれないかと思う。

現在は毎日、何もせず部屋の中でゴロゴロしている。友人にも居所は教えていない。自分自身、自分の住んでるアパートの電話番号も知らない。

以上5名が親との同居歴がある者である。

まず<M7>は、最初工場の寮に住んでいたのが、父親の家から職場に通う様になる。しかし家にお金を入れたり、「お金をせびられる」のが負担で親との扶助関係を自ら切ることになる。弟が病気の時の看病等は「仕方ない」けど「お金だったら違う」のである。つまり彼の「自立」にによって「親」の存在はむしろ桎梏となり、彼は自らそれを断ったということになる。

また彼の日常の付き合いは「職場」が中心である。「製パン工」の労働時間の不規則性が職場以外の人間とのつきあいを難しいものにしている。結婚を考えている彼女にも「家のこととか話さない」のであり、一見交際範囲がそれなりに広く「職場では好かれる」彼も本当に何でも話せる人となると、かなり限られるであろう。

残りの4ケースはいずれも住み込みの初職を辞めた後、親の家に身を寄せている。しかしいずれも数ヶ月で転出を余儀なくされており、親自身の生活の不安定性を示しているとも言える。

まず<M8>は川崎から北海道に帰って来て帯広の母親宅に身を寄せるのであるが、そこにも長居出来ず、職のあてのないまま卒園したF園に一時身を寄せることになる。急いで仕事を見つける必要から、F園の職員が現職を紹介するわけであるが、前章で述べた様にこの様な不安定階層への就労は希薄な社会的ネットワーク、特に住居が無いことと無関係ではない。彼は職場ではそう強い人間関係を築いておらず、休日も高校時代の友人と過ごしたいのであるがいかんせん「休みが決っていないのが辛い」のである。

また、こうした取り合えず頼るべき所の不安定さと低位の労働への入職は<F4><M11>とも同様であるが、<F4>のケースには特に注目する必要がある。まず住み込みで入職した所の劣悪な労働条件と共に、希薄な職場での人間関係が明らかである。加えて、一担身を寄せた母親の家から高校進学のため来札すると、父親、弟を経済的に支えることになる。こうしたいわばデメリットをこうむる家族関係は、その後の彼女の長時間の労働や、病気になっても休むことを自己規制する様な態度を余儀なくし、そして結局は父親と弟を自分から、「切り離す」ことになる。その後、父親に生保を受給させ、それを自分が「被害」をこうむらない為の一つの「安全弁」にしているわけだが、弟の場合関係は全く切れたまま弟自身も「孤立化」せざるを得なくなっている。

<M11>の日常的な交際は職場の人間を中心とするが、その職場にしても「親方と3人」といった零細、かつ不安定なものであり、そうした不安の解消を「宗教団体」に求めることになる。

<M12>はこの中で最も孤立化している。彼は高校受験の準備をしようと母親宅に身を寄せるのだが、母親自身の生活の不安定性からうまくいかず、むしろ母親になけなしの15万円を使われてしまう。結局、母親に見放なされ兄宅に頼らざるを得ないのだが、兄である<M10>自身も17歳で深夜のアルバイトに就いている状態であり、弟の生活を支える余裕があるとは考えられない（この点は後出）。<M12>は「何もせず部屋でゴロゴロしている」のみの生活に追い込まれているのであり、友人との付き合いも無く自分自身が住んでいるアパートの電話番号すらそらで言えないのである。これは<M12>が能力的に劣っているからではない。自分の電話番号を他人に教える必要が全くない生活をしているからなのである。

2) 卒園後親との同居歴はないが兄弟、その他の親族と卒園後同居歴のある者

<M1>

25歳中卒男 札幌で新聞店店員

母親は青森の実家にいる。昔入院した時は入院費を出してくれた。現在、あまり連絡しない。姉は母親のところへけっこう行ってる様だ。「向こうの方にいとこもいるし、親戚もけっこう居るから（母親との同居は考えていない）」「しかし、その親戚には一度会ったことあるけど、あと会っていない。」

兄貴は今自衛隊におり内地に行っているから、連絡が取れない。札幌にいる3人の姉宅にはたまに遊びに行く。最初の仕事をやめた時姉宅に、居候していたこともある。上と下の姉は結婚して子供がおり、現

在看護婦をしている。「働いてもお金間に合わないみたい。」まん中の姉はまだ結婚していない。この姉には相談事等を持ち込んだことはない。

園にはたまに連絡するし、年に1回位は行く。「休みの日には、暇でどこも行く所ないし、でも園に行ったら又、暇だからちょっと座って誰か先生いたら少し話して、園に行ってもする事ないし」。職場では月2,000円積み立ててキャンプ等に行ったりするが、相談事等を持ちかけたことは全くない。

バイクが好きでモトクロスをやっていた。今では日帰りでツーリングに出たりする程度である。モトクロスは「体力がなくなってきた」今はやっていない。よくケガをして骨にヒビ入れたりした。しかし仕事は休まないし、医者にも行かない。今でもバイク仲間とは付き合いがある。中学を出た時は、けっこう遊んだけど、今は夜遊びに行ったりしない。第一体がもたない。休日は一人で居ることが多い。学校時代の友人は全々会っていない。

<F7>

26歳中卒女 札幌でデパート臨時店員 <F3>の姉

4人姉妹の三女で、現在長姉を除く3名で同居している。小1の時、両親が離婚して長姉は家出した。中卒後入職した製パン工をやめて、名古屋に行く時長姉を頼っていったのだが、長姉と同居したのは最初の2日位で、長姉は男と同居する様になる。また、長姉の借金を肩代わりして返済する羽目になってしまった。月に6万位、長姉のかわりに払っていた。札幌の次姉の所にもサラ金から電話がいくので返した方が良さだろうと思ったのである。返済するのに2年かかった。その後、長姉が離婚した時に、お金の無心をして来たが、札幌で暮らすだけで精一杯で余裕もないし、何かしてもらったこともない。長姉の世話は一切したくない。

札幌に帰って来てから次姉と暮らす様になった。この次姉のことは頼りにしている。でも、相談事等はあまりしない。決ってから言う。幸せになって欲しい。この姉をおいて自分一人で結婚出来ない、と思う。

以前、名古屋から旅費を貯めるまで帰れない旨、連絡したら勤めて1年目の妹(<F3>)がなげなしの10万円を送金してくれた。妹には普通の物は与えてあげたいと思って来たし、それが生きがいになっている。自分自身にハリが出る。

母親は札幌におり別に家庭を持っている。次姉が母親を嫌っているの、あまり連絡をとらない。継父がいる限り会いたくない。自分は母親のことを母の面と「女」の面と半々で見ている。親戚とはほとんど付き合いがない。祖母が亡くなった時に連絡があったが、仕事もあるし行かなかった。姉や妹は親戚に会ったことがある様子だ。

休みの日は家にいることが多い。喫茶店に勤めていた頃に、その喫茶店に食品を卸していた会社に勤めていた男と知り合う。2つ年上である。夜は彼の家にいることが多い。彼は母一人、子一人の母子家庭で、母親は水商売をしている。彼の母親は自分の事を気に入ってくれている。相談事等もしろと言ってくれる。来年(61年)の6月頃には結婚したいと思っているが、今は籍は入れられない。彼の母親に借金があるし姉の事も心配だからである。

同年代の人とは飲みに行ったりすることなどの、話が合わない。酒は飲まないし昔の父親を思い出すので酔っぱらいは嫌いである。

名古屋に居た時も1日に2つの仕事をしていたから、誰かに相談する余裕なんかなかった。相談事はほとんど誰にもしない。姉にも結果だけ言う。困った事と言えば、とにかくお金が欲しかった。姉が入院した時も、お金がなくて結局姉の貯金を使ってしまった。誰にも頼らないでやって来た。あまり過去を振り返りたくないの、園とは関わりたくない。

<M7>

23歳中卒女 札幌でデパート臨時店員 <F1>の妹

現在28歳と26歳の姉2人と同居している。長姉は名古屋にいるがほとんど付き合いはない。二人の姉のことは頼りにしており、「結婚しても姉の近くにアパート借りていつまでもそばに居るよ」と冗談をたまに言う。相談事にものってもらふ。母親は、以前は1ヶ月に1回位来ていたが、今年(60年)になってから全く来ていない。相談事等もしない。親戚の大体の居場所は知っている。しかし全然連絡はないし、こちらからする意志もない。

美容室に勤めていた頃、やめたいと中学時代の友人にたまに電話していた。しかし現在は全く連絡なし。付き合いがあったのは卒業後の1年位である。職場で知り合った友人も、付き合いの長い人は一人だけである。

休日は週に一日ある。友達と出歩くか家にいることが多い。長い休みはほとんど取れない。サークル活動などもしたことがない。誘われて勤労青少年センターに行ったが、仕事が忙しく一度きりになっている。

園には入職してすぐの頃は仕事をやめたいとたまに電話していたが、実際やめてからは電話しづらい。転職の時はやめてから他の人に話す。58年12月、子供を出産し、養子に出した時、園の先生に7月頃から色々相談にのってもらったり、相手との仲に入ってもらった。(以下、園の職員のY先生からの聞きとり)。

58年7月に退職して旭川に住んでいる、在園中直接担当だった保母に連絡があった。内容は、子供を身籠って5ヶ月になるが、育てる自身がないし、相手ともうまくいっていない。中絶出来るだろうか、というものであった。当時、相手の男性が他の女性とも付き合っているのが発覚し、<F3>は姉のもとに身を寄せていた。妊娠が発覚してから、相手は行方不明になり、居所がつかめないので、Y先生が話し合おうとしてもなかなか話が進まなかった。相手の親に電話しても、「息子の問題だ」と取りあおうとしない。相手は<F3>の次姉にもお金を借りており、返済しようとしないので、姉妹間でも相手に対する不信感がつる。中絶は母体にとって危険なので、生む方向で考える。<F3>は相手に不信感を持ちながらも、何とか生んで家庭を持ちたいと考えていた様だ。

そのころ、旭川に居る元担当の保母の友人が東京で養子を欲しがっていることがわかり、養子に出すことに決めた。Y先生は乳児院に入れることも考えたが、<F3>の今後の生活を考えると、子供との関係をすっぱり切った方が良くだろうと判断した。

出産ぎりぎりまで出産費用が準備出来なかった。<F3>は相手の親の所にも行ったが、3万円もらったのみである。姉も自分のことで精一杯なのだが、結局出産費用は姉の貯金から出した。ベビー服等も一揃い揃えた。

出産は58年12月上旬である。女の子だった。子供が生まれると、<F3>の養女に出すという決心がにぶり、方針が二転、三転した後、12月25日に東京から引き取りに来た。その後しばらくして生活が落ち着いた頃から<F3>はYデパートに勤めに出た。一年後のクリスマスには、何か子供にクリスマスプレゼントをしたいと言ったので、Y先生が一度だけだよと念を押して許した。

<M10>

17歳中卒男 札幌でパンの発送の仕分け <M12>の兄

最初の仕事であるカタワク大工をやめる時、2つ年上の同僚に相談し、やめるなど引き止められたが決心は変わらなかった。仕事をやめた際、赤平にいる母親宅には長居できず、園には行きづらいので中学時代の友人の家を一週間づつ泊り歩く。泊り歩くうちに友人の父親に仕事を世話してもらった。また、アパートを借りる時も紹介してくれ、その人には色々世話になった。金も借りている。母親には「金歯を入れるから」と5万円「取られて」しまった。

中学の同級生に片思いの子がいる。12月はクリスマスや誕生日があるので彼女にプレゼントを買わなければならない、仕事を休めない。

今の仕事を始めて2ヶ月余りの間に、風邪で3回休んだ。医者に行かず売薬で済ませる。社会保険には加入していない。体温計も持っていない。

一つ年下の弟（＜M12＞）が60年10月に無職で転がり込んで来た。アルバイトを世話したが10日程でやめてしまった。食費等、一切面倒をみなければならないので苦しい。自分が部屋の中をきれいにしておくのに弟は散らかすのみでだらしない。今年中に出て行ってもらわねば困る。

園にはあまり顔を出したくない。前の仕事をやめた時を相談しなかったし、住所不定の時も園には泊る気はなかった。行ってもガツツリ怒られるに決まっている。事実、園の近くでウロウロしていたところを職員とばったり会って園に呼ばれ、メチャクチャ言われた。自分の事で園に相談する気はないし、今までなかった。

しかし、先日、仕事がない時に泊り歩いていた友人宅にあいさつ廻りをした折に、園にも菓子折を持ってあいさつに行った。世話になった所にあいさつに行くのは当然だし、何よりも転がり込んで来ている弟の事がある。現在、弟の事でかなり困っており、園に相談の電話を入れた。

＜M5＞

21歳高卒男 札幌で新聞店店員

おじ宅から高校に通っていたが高3時の12月、おじとけんかをして、弟と2人で飛び出した。以後、近くに住んではいるものの全く連絡していない。一緒に家を出た弟は現在、H製作所に勤めて内地にいる。

母とは去年、久しぶりに会った。その後、居所がわからなかったが、先日たまたま電話が来た。「徳島に居るから、こっちの仕事、手伝いなさい。」と言っている。再婚して防水の仕事をしている。在園中は祖父母宅に帰省していた。現在祖母は発寒で入院している。見舞は去年から行っていない。

おじ宅を飛び出した後、＜M6＞の家に1週間位転がり込んだ。おじさん、おばさんの所に一緒に話に行ってくれ、また、園と連絡を取ってくれた。＜M6＞の家から園に来て弟と2人で1ヶ月位いた。どこか2人で住み込みで働ける所がないかと先生に相談したところ、＜M1＞のいる新聞店を紹介してくれた。

たまに職場の皆で飲みに行く。その時の代金は給料からさし引かれる。店のおやじに相談事はしない。「熱あってもちょっと位なら配達行くし、飲みに行っても次の日、具合悪くても配達しないとダメだ。」

付き合っているのは中学時代の友人が多い。車を持っており、夜中に車で遊びに行き、朝そのまま仕事に出ることもある。しかしガソリン代がかかるので遠出は出来ず、せいぜい支笏湖（札幌近郊の湖）に行く位である。

＜F2＞

25歳中卒女 旭川で主婦、保険外交員

小さい時、養女に出たが折り合いが悪く施設入所となる。結婚式の時、相手の親が養父母が出るなら式を挙げても良いというので、養母に出席してもらった。養父は来なかった。養父は土建屋の社長をしている。今でもたまに連絡する。実母のことは、「私の母親は私を捨てたから、そんな母親でもなんでもない」と思う。実兄、姉もいる。

夫とは札幌で知り合った。夫の実家は札幌で、夫は大卒の会社員である。旭川の支店に転勤になり、こっちに来た。以前から同棲していたが、転勤を機に結婚した。結婚して5年たつので倦怠期である。家庭が壊れそうになったことがある。その時、仲の良い奥さんに相談した。子供は夫が日頃の生活態度を改めない限り作る気がない。

夫と知り合った頃には、すでに夫の両親は離婚していた。母親は東京にいてまだ会ったことはない。電

話でよく話すが、とても良く出来た人で「あの人にはもったいない位」である。夫の事で相談などもする。

美容学校の友人とは全く連絡はない。園の友人も全く連絡をとっていない。休日は、夫婦もしくは一人でパチンコ屋に行く。サークル活動の経験はない。昔、水商売をしていた時に客に勧められてゴルフをした。道具も持っているのでまたしたい。先生について習ったこともある。

園には、仕事を変わる時など別に何も話さない。「しかし、居場所だけは必ず教えます。」1年に1度位、園の先生に近況報告をする。結婚式の時は園の先生にも出席してもらった。

以上6名が親とは卒園後同居歴がないものの、兄弟、親族等との同居歴がある者である。うち<M1><F1><F3><M10>の4人はそれぞれ兄弟との同居歴がある。

まず<M1>は、中卒後の初職をやめ、入院した際の入院費を母親に出してもらったり、また、退院後姉宅に身を寄せるなど、母親や姉を生活の支えにしてきた。しかし現在は母親とはほとんど連絡はなく、兄も居所が不明と希薄な家族関係である。また、友人もバイク仲間に限られており、「モトクロス」をやめてからは一人で過ごすことが多い。病気やケガの際もめったなことでは医者に行かない。

<F1><F3>の姉妹は、もう一人の次姉と共に3人でお互いの生活を支え合っている。しかし同じ姉妹でも<F1>は長姉にむしろ、かなりのデメリットをこうむり、その結果「長姉の世話は一切したくない」と切り離している。また2人共、母親や親戚との関係は希薄なものである。

また両者の異性との関係には注意すべきである。<F1>の場合、結婚を考える男性がおり、相手の母親を含めた深い付き合いにあるものの、相手の母親の借金があるうちは結婚に踏み切れないと一歩距離を置いた態度をとっている。<F3>の場合、同棲していた相手との間に子供が出来た事が、姉妹間では処理し切れなくなる。園の職員の助けをかりて「里子に出す」という自分から問題の原因を切り離す形で解決している。いずれの場合も生活上の不安定さが生み出した人間関係である点で共通している。

<M10>の場合は同じ兄弟との同居でも<F1><F3>と意味が異なる。彼自身、仕事をやめた後、施設にも母親の所にも長居せず、友人宅を転々とする希薄な「社会的ネットワーク」しか持たない、その結果、紹介された職も極めて不安定なものであるが、そうした極めて脆弱な生活基盤しか持たないところに弟である<M12>が無職のまま転がり込んで来たわけである。その面倒を17歳の彼が長期に見れるはずはなく、「今年中に出て行ってもらわねば困る」のであり、「あまり顔を出したくない」園に相談を持ち込まざるを得ない。

<M5>は卒園後おじ宅から高校進学していた。しかし、卒業直前におじ宅を飛び出しその後、職と住居を転々とするのであるが、ここでも希薄な「社会的ネットワーク」が現在の袋小路的な職業につく一因となることがわかる。そして現在もせっかく給料の大部分を（5万のうち4万）ローンにつぎこんで車を持っても、全く遠出は出来ず、中学時代の友人と夜出歩くという「社会参加」の手段にすぎないのである。そのみが彼の交際範囲である。

<F2>は他の5例とは異なり、結婚して夫と同居している。一見安定した結婚生活を送っているが、自分の養父母とも折り合いも悪く、また相手の母親にもまだ会ったことはない。施設には連絡だけはするものの、その他のかかわりを持つわけではない。相談相手も仲の良い奥さん位で、休日は「パチンコ屋に行く」のみである。

3) 親とは接触があるものの、誰とも卒園後同居していない者

<M2>

24歳高卒男 札幌で経理事務員

父親は名寄にいる、全く連絡はない。顔も覚えてない。母親は精神病で芦別の病院にいる。外来扱いでヘルパーとして病院の手伝い等をしてる。たまに札幌に出て来る。現在40歳で、58歳までそこにヘルパーとして居ることが出来る。

姉もF園の卒園生で現在25歳である。岩見沢で結婚して1児をもうけたが、出産直後に精神病が発病し、60年4月に入院。「岩見沢の病院に入院していた。すぐに退院したが、手に負えないと夫に離婚された。僕が保護者ということで岩見沢まで行った。その時、会社の上司に相談して2～3日位休みをもらった。姉が目を見せない不安定な精神状態だったので、園のS先生に姉を入院させ、生活保護を受けさせる手続きをもらった。」

母親の義理の姉が苗穂にいるが、姉の入院の時はそこに相談することなど全く思いもよらなかったし、時間的にも余裕がなかった。姉が入院してから一回行ったが、世間話をする程度である。

職場は経理課で、課員は5名(女性2名)である。「人間関係の面など、世渡りする上では表面には出せない。」

現在住んでいる会社の寮には2人ほど、相談事ができる人間がいる。仕事の相談はするが、家族のことは話さない。プライベートなことはほとんど話をしない。

休日は寮にすることが多い。「土曜飲みに出た日は、ずっと寝てる。普段は10時位まで寝て、掃除、洗濯等して、友達と行き来したり。」飲みに行き行って知り合った彼女がいる。たまにデートをする。しかし、母や姉の事があるので結婚は出来ないだろう。高校の友人とはけっこう連絡をとりあう。

盆などに園に行っても、知っている人間は帰省で帰っているので面白くない。<M9>には、けっこう連絡する。また、寮に入る前に一人暮らしをしていたが、部屋を借りる時に、園の先生に保障人になってもらった。

<M10>

21歳高卒女 札幌で婦人服店店員 <M3>の妹

兄の<M3>は高卒後精神病院に5年間入院し、60年夏に退院した。現在精神衛生センターに通っている。<F6>が自分の近くに住まわせて、生活保護を受けさせ、食事の面倒などを見ている。「退院してどうなるかって言ったら寮みたいな所に入るという話だった。そういうのを考えるとやっぱり病院の続きですよね。それだったら、その後勤めるっていても、何か特別の斡旋なんかもあるみたいけども、一般の社会に触れない生活っていうか、じゃ、本当にこれから働いて、社会になじもうとするならもう、社会復帰出来ないって、そういうのだったら。本当に勤める事だけ考えて、それで病気が治るっていうのを考えるんだったら、世間に出て生活した方が一番良いと思ったから、それで一緒に住むとか色々考えたんだけど、それだったら、今の私の部屋も狭いし、どっか引っ越しするお金も、退院をせまってるから、急には出来ない。それで、来年の話とかだったら、お金を貯めてから考えたけどもそうじゃなかったし、だからそれだったら生活保護受けて、だから別居が条件だから同居したんだとダメだから……1人でないとダメだから。全く一人っていうのもまずいと思ったし、又病気がいつ発病するか知らないし、それも危ないと思ったら、やっぱり知ってる人と身内の人がいて、近くにいて一人の生活がちゃんとやっていけて、それが一番良いと思ったから。」兄はセンターから4時頃帰るが、自分は9時過ぎになり、それから食事を作るので遅くなって悪いと思う。食費は入れてもらっている。

父親は精神病院に入院している。「ずっと何年も会ってないし関係ない。別に思い出すこともないし、

私はお兄ちゃんしかいないって思ってるから。同居なんて考えたこともない。」父親には住所を教えていない。

現在の職場は女の子が3人で、その中の責任者である。園には転職の相談などはしにくいので、決ってから言う。前の仕事をしていた時に、友達とたまに「やめようかと思ってるんだ」などと話していた。「やっぱり何かと相談するのは身近な人とかなっちゃうもんね。」

兄が退院する時は、住宅を探したり、生活保護受給のことで園の先生に世話になった。「あてにならないとかじゃなくて、居た時は居た時、出たら一人でもう20歳過ぎてるんだし、大人だし、又そこはそこなりの問題とかけっこういるでしょ。何かかんかやってるんだろうし、卒業した私達までが、そんな一人で決められなくて。私は自分で出たんだから、自分でやるもんだって。」

<M3>

24歳高卒男 無職 生活保護受給 <F7>の兄

高卒直後から約5年間、精神病院に入院していた。今年(60年)5月に退院する際、妹(<F7>)の意向で妹の近くに住んで食事の面倒等見てもらうことになった。妹の所に毎晩行って、夕食をとり、次の日の昼の弁当をもらってくる。生活保護費も妹が管理している。

父親からは2回目の入院先を退院する1ヶ月前に引きとりたいと連絡があり、退院するが、すぐに3回目の入院をしてしまった。父はアル中であり、右目にガラスが刺って見えないので身体障害者の年金も出ている。その年金を利用して、一度妹と父の友人とで小樽に旅行に連れて行ってもらった。しかし、父親は札幌に帰る時、大酒を飲んで倒れた。それを見て父親と交際をしない方が良いだろうと妹と話した。以後、父親には連絡を取っていない。一度、入院している時に「借金の返済にあてるために妹のボーナスがなんとかならないか」と無心をしてきたが、相手にしなかった。現在は自分達の居所を教えていない。現在、父親は精神病院に入院している。

現在、精神衛生センターで月、水、木、金の週4回、9時から3時まで生活部で生活訓練を受けている。火曜日は病院に通っている。

精神衛生センターの友人や入院先で知り合った人と交際している。特に入院先で知り合った33歳の男性と親しくしている。自分の事を真剣に考えてくれるので頼りにしている。現在彼は入院中で、職を探しているところである。外出した際など、<M3>の部屋に来る。

休日は友達の家遊びに行っていることが多い。以前は一日中家でゴロゴロしていた。また、友人に勧められて「阿含宗」に入信した。

入院していた時は、1ヶ月に1回位、園に泊まりに行っていた。また、父親の事で園の先生に相談にのってもらったり、退院してアパートを借りたり生活保護を受ける際、先生にかなり世話になった。

<M6>

22歳高卒男 H町公務員

札幌市白石区に実父がいる。「一回しか親の所に行っていない。小4の時別れて中1以来ずっと会ってなかった。」「一回行ったんですけど、それ以来4年位行っていない。疲れるんですよ、特に。全くの他人だったらもっとやりやすい。他人でもないし、完全に親子というわけでもない。だから少し気を使って疲れるんですよ。一回行ったら、どっと疲れて帰ってくる。」「あっちからは全く連絡なし。4人目の再婚相手がいる。そっちはそっちで家庭がある。」「年に一回、葉書きか電話位する。」「しばらく会ってないから、行った方が良いのかなあ。」

継母が余市に居る。物心ついた時には、その人が母さんだった。異父弟も2人いるが、去年初めて行った。手紙のやりとりは弟達とやっていた。中3の時以来、久しぶりに義母と会った。昔は可愛いがっても

らった覚えがあるが、今は賀状なども来ない。「親戚とは（会うことは）まずないですね。」

職場はH町教育委員会の社会体育係であり、やりがいのある、また理解のある職場だと思う。園の後輩が相談事を持ち込んで来たりした時、係長に相談して休みを取らせてもらう。「まわりは自分が園に居た出は知っている。色々相談にのってもらい、面倒も見てもらっている。」「ただ、園と違うなっ感じたのは1人なんです、職場では。アパートに帰った時、あー1人だなんて」「（自分がうまくいっている理由は）第1に職場。役場に入られたのがだいぶ違う。公務員はクビが無いし、いかに可愛がってもらうか、嫌われない様にするか、良い先輩を見つけるかという事が大事。高校の時はこんなこと、考えなかった。社会に出ればわかる。良い人にめぐり会ったからそう思うんだろう。」

この役場を受験する動機は、小さい頃からやっていた卓球であった。「役場でやって、あと小、中学生に卓球を教えている。」「卓球を通して色々な人を知って来た。で、役場にも入れたと言えるから。」

また、現在H町青年会の事務局長をしている。職場の先輩に誘われて入った。広報などで呼びかけて行事には70～80人位集まる。会員は16人である。

風邪をひいて寝込んだ時、友人達が良く来てくれた。「友人が増えた。友達が多いので僕はもっている様なもの。」高校時代の友人も休みの時などよく来る。高校の時はクラスの中心的人物だった。自室に人を集めるのが好きでよく宴会をする。

また、園にもよく顔を出し、後輩の面倒もよく見る。「先生方の頼みをなるべく手伝っていきたい。頑張っているやつはいっぱいいるけど、俺が一番手伝いやすいし。」園の後輩が仕事をやめた時など、園に行かずに＜M6＞の所に来ることがよくある。「2年目の12月に3件、＜M5＞、R、そのあとS、園の方には一応連絡している。園に行きにくいので自分の所に来る。」「高卒だと頭回りますからね。中卒だとわからない。ずるさが無い。」「もう少し、何て言うか、（自分から）にくまれることないんじゃないかと思う。外面的に見栄を張ることが多い……。」

（園の事は）あまり隠さない。「それでへんな目で見える様なやつは友達にしたくないと、むしろお前のとこ人が多くて楽しいねと言われたことある。」「小さい頃、うらやましかった。（しかし）園のおかげで友達付き合いも良くなった。」

このようになり広い交際範囲である。しかし、生命保険の受け取り人は自分にしている。今、死んだら保険金は借金の返済にあたる。

<付記>

面接終了後の60年11月に交通事故を起こし、老女を一人死亡させてしまう。職場を中心に減刑嘆願署名がおこり、かなり広い範囲で署名が集まった。現在（61年春）、異例の軽い処分で、H町役場に続けて勤めている。

<M9>

20歳高卒男 札幌で製パン工

去年（59年）の10月末、江別の牧場に住み込みで働いていた父が蒸発して困り、園の先生に相談したことがある。父は軽度の精薄である。「やっぱり親だからいなかったら困るし、もう年だから、年金とか保険とか考えなきゃならないし。」父親が建築の飯場にいる時に連絡が来て、元の牧場に連れ戻した。今は落ち着いている。「あまり会わない。」「母さんが小さい時に死んでから（父親は）おかしくなってきたな。」ローンの保障人は親になってもらっている。「居なかったら他の会社に就職するのちょっと難しいから、そういうこと関係なかったら（親が）いなくてもいいと思ったことがある。」「自分に深く係わってくれたらいた方が良く、関係なかったらいなくてもいいと思いますね。それは、園にいた時から思っていた。」

牧場の人、自分が小学校の時から知っているから、父親の事なども相談出来る。厳しい人である。し

かし話はしても力になってくれるかは疑問だ。お金は貸してくれない。

親戚は、「父さんの事あまり良く言わないし、父さんも色々と転々としていたから、知っている人少ないんじゃないかな。自分もよくわかってないですよ。せいぜい帯広の人を知っているけど、あとは余り知らない。父さんも身の廻りの事、俺に話さない。」

妹が神奈川の方にいると聞いたことがある。一度会ってみたい。腹違いの妹がまだ2人いるはずだ。そのことは中学の時に知った。

現在いる焼成部門は20人位の職場である。今年は新人に対するチューターをやった。入ってすぐケンカをしたことはあるが、どちらかがすぐ折れる。年取ってる人は中卒が多いけど、今はほとんどが高卒である。職場ではうまくいっている。自分は明るくて目立つ方だと思う。職場の人とはよく仕事のグチなどを言い合う。しかし、親の事などは話さない。話してもそれで助けてもらうこともないし、話す必要もない。寮の友人は自分が施設にいたことは全々知らない。高校の時も園にいることを友人に教えなかった。

上司にもプライベートなことは話さない。現在、会社の卓球部に入っている。しかし、あまり練習にはならない。「仕事の時間、皆バラバラだから合わないんです。」「試合が近くなれば、1週間前にチョコチョコと。」年に10試合位あるが、休みが取れないと出れない。「仕事やめるまでは、卓球続けます。卓球部やめるってことは、(卓球の技術をかわれて入社した以上)出世コースもやめるということだから。」

高校の卓球部の友人とはたまに会う。週に一度位は飲みに行く。休日は女友達とデートしている。そうでない日は寮でゴローとしている。

転職の相談事などは園にはしにくい。「ちょっと話しにくいですね。いろんな先生のグチ聞いてるでしょ。よけい話しづらい。」

<M13>

22歳高卒男 横浜でクレーン保守、整備工

母親は自分が6歳の時に離婚している。帯広にいるが自分は戸籍から抜けているので、親密な相談事は出来ない。去年の5月に浦河まで帰った時も寄らなかった。今年(60年)の1月頃、ちょっと連絡した位である。余程の事がない限り連絡しない。そもそも母親からは、高校を卒業してから初めて連絡があり、1度会ったきりなのである。

父親はどこにいるのかわからない。「どこに行っているか全々わからない。こっちから連絡しようもないし、向うがどう思っているのかわからない。」

日高に父親の兄弟がいるが、相方とは連絡はとらない。「昔、俺のおやじはあまり良くなかったらしいですね。だからこっちからも(親戚に)連絡取りづらいね。」「一番顔を出しやすのは、本別のおばさんの所ですね。一時期、小1の時に世話になったことがある。」しかし、今は全く連絡がない。実弟が帯広の母親の所にいるが、あまり連絡は取らない。「何年も離れて(暮していると)兄弟って感じはしないんですね。」

職場の班は7人。班長がいる。班長はわりと面倒見が良い。「班長がうまく指導しないと、会社にいてもつまらないと、ただ仕事やってればいいって感じで、つまらないんですよ。」班長は50歳位。いろんな相談にのってくれる。同じ班の10歳年上の先輩にもよく話をする。2年前に係長に仕事をやめたいと話したことがあるが、考え直せとさとされた。

バイクに乗るのが好きだった。57年7月に免許を取って、すぐに2回も免停をくらった。今年の3月にスピードの出しすぎで、横断歩道で子供をはねて免許が取り消しになって以後、バイクを止めた。子供は全治6週間の骨折であった。示談は保険屋にまかせた。罰金の10万円は、バイクを売った代金の18万円でなんとかなった。事故を起こした時、上司に相談にのってもらったし、たまに寮の同僚や上司に5千~1

万円位寸借することもある。

休日はこの頃、パチンコをしている。パチンコに行かない時は寮でテレビを見てる。

施設には、相談事はしない。「もう、(お前は) どうしようもないという言い方をされていたから、相談出来ないって感じ。」園にいた時に先生には良く思われていないから相談しづらいのである。

北海道には昔つき合っていた暴力団もあるし、行きづらい。

<M14>

19歳中卒男 札幌で調理師

57年3月G学園卒園。苫小牧に父親と兄がいる。兄とは中卒時、進路について電話で話をした。「兄さん、(今は) 何やってんだろう。もう4年も会ってないからね。」他の兄ともあまり会わない。別にこれといった用事も無い。

父の家に、正月には一応顔見せに帰る。父とは中卒時に初めて会った。それまでは両方連絡を取らなかった。卒園時も今更進路について相談する必要もないと思った。

住込み先の社長の家族とは最初からうまく行った。仕事が終わってからお酒を皆で、ちびりちびりとやる時など、話をしたり相談にのってもらったりする。

仕事を始めた頃先輩と合わなくて、やめようと思ったこともある。社長が中に入ってくれるでもなく、ただ言われるままに我慢しかなかった。しかし、ケンカはしなかった。「それ一回やったら、とっても居なくなりますから。」

「休みの日は午前中は寝てるんですよ。その前の日にはドッと騒ぎに行きますけど、昼から掃除と洗濯をやって、街をブラブラ見たり、友達の所へ行ったり。」職場に朝野球のチームがあり、他の店の人と試合をする。しかし、プライベートな相談などはしない。「まあ、あまり(交際は) 無いです。たまに(その店に) 食べに行ったりする程度で。」

学校時代の友人との交際は無い。「そういうの無いね。こっちも(住所が) わかんないし、あっちもわかんないしね。」

施設への相談事なども「余りないですね。」

<M15>

17歳中卒男 札幌で自動車修理工場の塗装工

実父は厚真にいがあまり会わない。兄は苫小牧で自動車修理工をしている。<M15>はこの兄を非常に頼りにしているし、仕事の面でも支えになっている。また、姉が小樽と定山溪に各一人いる。小樽の姉には以前、借金をしたがその返済でトラブルがあって以来不仲である。定山溪の姉も以前はたまに行ったが、この頃は何をしているのか知らない。

中学卒業直後の6月か7月頃、車に乗り事故をおこして補導された。この時は姉に相談した。

小学校時代、5、6年の担任だった女の先生がとても良くしてくれる。今でも頼りになる。小学校卒業の時や中学校の時も、自分の知人のいる東京へ行かないかといってくれた。今から思うと小学校5、6年の頃が、一番落ち着いていて良い時期だった。

プライベートな話は、職場の先輩にすることが多い。中学校時代の友人がたまに札幌に出て来て会う。高校をやめて札幌に住んでる者もいる。「俺の連れは不良ばかり」である。

苫小牧の兄の所に自分用の車を一台持っており、たまに乗りに行く。以前、兄の友人達と「ツルんで」走っていてバトカーに追いかけられたことがある。

休みの日は寝ていることが多い。

去年11月に職場の先輩に誘われて宗教団体に入会した。社長に反対されて、現在その団体の新聞も取っ

ていないし、集会にもあまり出れない。朝のお勤めは何とかやっているけど、夜は疲れて寝てしまう。

園の事には関心がない。今さら関係ないと思ってる。園の先生にプライベートな話をしてもわからないと思う。

<M10>

19歳中卒女 岐阜で紡績工

2人弟がおり、上の弟はF園を卒園後、現在行方不明。「ラーメン屋で働いているとのことだったので、(60年)夏帰った時、探しに行ったけど、やめていなかった。」上の弟とは、園を出てから全く会っていない。連絡は、以前入院した時一回電話をくれたのみ。

下の弟はF園に在園中である。時々電話するが、札幌に帰ってもなかなか会えない。

寮では現在、部屋長をしている。新聞も部屋で取っている。わりと好かれるタイプだと自分では思う。職場に彼がいる。2対2のグループ交際である。しかし寮の人間関係は必ずしもうまく行くことばかりではない。「先輩とかすごく恐くて、けっとばしたりすごいんだもん。」会社やめたいという時は、会社の人とはよく相談にのってくれる。一回「寮出」したことがある。岐阜の友達の所に泊めてもらったが、2日で見つかって寮に帰された。やめていく人間はとても多い。「うちの代で60人位入っていたのが、今10何人になって。」「高卒で(紡績工場に)入るなんて不思議だね。けっこう施設から来た子、いるよ。おとなしいからすぐわかる。」家の事などの話になると、すごく困る。

寮母さんは「(あなたは)寮から来たから寮生活の事がわかって良いね」と言ってくれる。しかし、寮生の間では寮母さんの評判はあまり良くない。

学校は1日4時間で科目は、国、数、日本史、化学、保育、英語である。英語が嫌い。保育は面白い。文化祭が近いので練習している。朝早くか、夜は6時5分に終わってからの練習になる。会社の偉い人や卒業した先輩とかが見に来る。彼氏はよんではダメと学校で言われている。クラブ活動は一応あるけど、皆疲れているから参加している人は少ない。「うちもやったけど、続かなかった。」

嫌なことがあった時などは、やはり友人が相談相手になる。

小さい頃から首が悪く、こちらに来てからも約一ヶ月間入院した。職場の人もけっこう見舞に来てくれた。しかし普通は、熱があっても自分から仕事に出る。「休みたいんだけど、給料減るのが嫌なもので無理して出ちゃうとかね。」それで結局、体を壊して5日も6日も休んだりする子が多い。

休日は、テレビを見たり友人に電話をする。外出する時は後輩と買い物に行くか近くの遊園地に行く。寮にはあまり人は来ない。外で会うことが多い。

園にはよく電話をする。「サイン帳を見てなつかしくなって、声を聞きたくなると電話する。帰りたくなったら園に頼る。実家に帰るのが嫌だからである。」「(家に帰ると)毎日毎日、私の機嫌とりですごく嫌だ。」

以上9名が、卒園後親とは何かの接触があるものの、誰とも卒園後同居歴がない者である。

まず<M2><F7>の2名は共に肉親に精神的な疾患を持つ者を抱えている。<M2>は母親と姉がそれぞれ精神病院に入院中であり、また<F7>は兄である<M3>が長期入院から退院したばかりで、生活訓練の途上にある。この2名の肉親に対する対処の仕方には共通点がある。すなわち、両方とも母親な姉、兄に生活保護を受給させ、前者は入院、後者は自宅の近くに住まわせている。つまり経済的にデメリットをこうむる家族との関係を、生活保護を受けさせることによって、直接経済的に負担をこうむらない形にして一定の関係を維持している。この点は、例えば前出の<M10><M12>の兄弟が何の社会的な支えもないまま同居し、兄が弟の面倒を全てみることで逆に「共倒れ」の危険をはらんでいる状態とは大きく異なる。この点において、前出の父親に生活保護を受けさせて自宅の近くに住まわせている例と似ているが、ちがう点は<F

4>はスナックの客の中にたまたま区役所の人間がいたという、いわば偶発的契機によって可能だったのに比して、<M2><F7>は、彼らにとっての一つの大きな社会的支えである施設の職員を介していることである。こうして「社会資源」を活用することによって自己の生活を保持しているのであるが、その背景にはこの2人の職業生活が相対的に一応確立していることがあげられる。しかしいずれにせよ、相方とも将来の結婚等を考えると、こうした家族関係が大きな影響を持つことになることは想像に難くない。

<M3>は父との関係を断ち、姉である<F7>や生活保護、精神衛生センターであった「社会的ネットワーク」の中でのみ、かろうじて自己の「生活」を維持している。

<M6><M9><M13>の3人は、高卒男子で転職歴もないのであるが、いずれも親との関係を一定の距離を持って、さめた目で見ている。<M6>はH町の公務員であり、その交際範囲が職場、卓球仲間、青年会、施設と大きな広がりを持っている。その交際範囲も職場に根を持っている。労働生活自体の安定性と、こうした広い「社会的ネットワーク」の存在をもってはじめて彼自身をして、「先輩や、友人が多いので僕はもっている様なもの」と言わしめているのであり、またそうだからこそ親に対しても「そっちはそっちで家庭がある」と考えることができるのである。また、本調査後に起こした自動車による人身事故への職場での対応は、こうした「社会的ネットワーク」の機能を計らずも実証した。しかしこうした相対的に広い交際を持っている彼にしても「生命保険の受け取り人は自分」なのである。

<M9>も軽度の精薄である父親に対しては、他の会社への転職の際の都合とか「そういうこと関係なかったらなくても良いと思ったことがある」と、一応コンタクトは持っているものの、かなり距離を置いた関係である。しかし彼の場合、<M6>とは違い、職場では一応「うまくいってる」としているものの、自分が園にいたことを全く話せない。従ってそこはつつこんだ「プライベートな相談」の場とはなり得ていない。

<M13>は、親や親族とのつながりはほとんどない。これは勿論、居住地が横浜であり、親族は北海道の郡部にいるという地理的な要因もあるが、横浜からわざわざ浦河を訪ねた際にも、帯広の母親の家に、寄らなかったのである。彼の人間関係は職場が中心となっているのであるが、2章で見た様にその職場も「毎日賃金の明細書を見るとやめようと思う」のである。

<M14><M15><F6>は、中卒で住み込みで就職した初職先にとどまっている。従って3人共一応、兄弟とのコンタクトを持っているものの、そこに頼っていかざるを得ない事態を経験していない。

<M14>は札幌で調理師をしているが、苫小牧にいる父親や兄との関係は「中卒時に始めて会った」り「もう何年も会っていない」ものである。従って職場での人間関係が一層重要になるが、彼はそのことに自覚的であり、ケンカなども「それ一回やったらとっても（職場に）いれなくなりますからね。」とかなり自制している。

<M15>は<M14>と同様に札幌に在住し苫小牧に親と兄、加えて定山溪と小樽に姉がいるが、苫小牧の兄との関係が重要である。兄は弟と同じ自動車関係の仕事をしており、「将来、一緒に仕事をしよう」と声を掛けてくれるのである。勿論兄やその友人達との交際も無免許で「ツルンで」車を乗り回し、パトカーに追いかけられる様な行為を含むのだが、彼にとっては重要な精神的支えになっている。そして気に掛けてくれる小学校時代の存在と共に「卒業してすぐ無断で車を乗り回してぶつける」様な生活が何とかもっているよりどころとなっている。

<F6>は岐阜で紡績女工をしており、一応継父の所に帰省するものの、地理的に遠いことも

あり、日常的な交際は職場に限られてる。寮では部屋長をしており、「わりと好かれるタイプ」とはいうものの、その寮生活や学校生活は会社の労務管理の手段となっている。寮での先輩との関係も「けっとばしたりすごい」のである。〈M14〉〈M15〉と同様、園から遠い場所に就職しているが、前二者がほとんど園との交流を持たないのに反して、彼女は弟が在園中ということもあり、よく電話で園の職員とも話をする。しかし前章でも述べた様に紡績工の生活は期限付きの寮生活であり、そこを出てからの支えになり得るかは現在の施設をとりまく条件下では疑問である。

4) 卒園後全く親との接触がない者

〈M7〉

21歳高卒男 札幌で事務員 〈F5〉の弟

父親とは全く連絡がない。「来たただじゃおかないよ。金だって欲しいとも思わないし姉貴にやれって。」姉〈F5〉とは2年位会ってない。電話をたまに掛けてもいないし、こっちも留守の時がある。相談事などもしない。

中卒後おじの家から定時制高校に進学したが、一年後そこを出て新聞店に住み込み就職し、全日制高校に再入学する。おじさんは、「全日制高校へ行ってくて言ったら怒って口もきいてくれなかった。意見合わないというより簡単に物を言うと思われていた。」今でも住んでいる所が近いから盆、正月など行ったりする。新聞店に住み込んでいた時も、貯金する金を持って行く時や、呼ばれた時には顔を出していた。

職場の同僚との付き合いは、「(相談事) などがたまにありますね。同期の大卒の人とは、あまりないですね。プライベートな事は仲の良い人に話すのが良いから。」職場のサークルは、「野球とかあって、あまりやってないけど」また、レクリエーションは、「多いみたいです。(自分は) 遠くに行くのには参加したことはない。」ボリング大会等には参加するし、また、全国の同じ職場の野球大会に一回行ったことがある。

中学時代の野球部の人とは「皆、大学行ってるから」ほとんど会っていない。新聞店の住み込みの時の仲間とは、一人付き合っている。あとは就職したり、大学行ったりして電話もあまりわからない。

読書が好きで園にいる時から小説などを買っていた。仕事が終わったらブラブラしているか本を読んでいることが多いが、今は免許を取りに行っている。デートなど街中の美術館に行くことが多い。

あまり相談事を他人にしたことはない。「窮地に追い込まれることってないから。修学旅行がある(というようなお金のかかる場合には)、おばさんの所に(相談に) いったけど。」

知っている子供もいなくなったので、園にはほとんど顔を出さない。今年のゴールデンウィークにちょっと行った位である。「保障人とかはおじさんがなってくれると思う。なってくれなかったら、園に世話になるしかない。」

〈F5〉

23歳高卒女 東京で電気部品検査工 〈M4〉の姉

56年3月に施設を出てから、それまでの反動で友達と遊び歩くようになった。「朝の5時、6時まで遊んでいて、そのまま会社に行くことなどしょっちゅう中だった。」そういう生活はしばらく続いたが、58年7月頃から、会社を無断欠勤する様になる。その時、6歳年上の女性に親身になって相談にのってもらった。しかし結局、やめる時は誰にも言わなかった。

58年11月頃、ある男性から愛人になることも強要されて、逃げるように東京へ出た。その時は知れるのが恐くて、友人にも全く連絡しなかったが、最近、やっと連絡を取る様になった。「あのね、その頃ね、

私の知ってる人が居たわけ。40位の人かな。その男性はもう結婚していて、子供もいるんだけど、私の友達がその男性の2号さんだったのね。で私はそれを知ってたの。でその男性は、私と一緒に飲みに行ったり、個人的にじゃなくて皆でワート。その人がある会社の社長なんだけど、自分の愛人になれって言われて、その会社やめる時もすごく探し回られたわけ。だから、その時隠れてたわけよね。友達のアパートに居て、ずっと外に出なかった。私の友達が愛人だったから、そういうのもあったしね。私、彼女の事、好きじゃなかったし、そういうふうになる気もなかったから、で最初は嫌だったんだけど、しつこくて、要するに私が他の土地に行けば、どんな事しても探してやるって言うんですよね。で北海道にいたんじゃもうまずいかなと思って、それで女性週刊誌に載ってる、求人っていうか、夜の仕事とかね。それを当てにしてこっちに来て。だから、こっち来て最近ね、友達にも連絡するようになった。だけど私の友達も皆、その男性の事知ってるから、あの人だけには言わないでって、どっか飲みに行行って、その人とばったり会って、私がどこ行ったか知らないかって聞かれたら絶対に言わないでねって。それで弟にもそういうふうに言って。」弟だけにはその年の12月に連絡した。

おじさんとは、東京に来てから全く連絡をとっていない。賀状、暑中見舞は出しているけど返事も来ないから、カンカンに怒っているだろうと思う。「和解したいって思うけど、出来ないんじゃないかな。」

「夜の仕事」をしていた時に客として来た彼と知り合う。日大を卒業して証券会社に勤めている。「夜の仕事」を辞める様に言われ、アパートを借りる時も敷金、礼金等を出してくれた。付き合ってた3ヶ月位で結婚したいと言ってくれた。「自分は一人で育って、一人っていうか、(それに比べて相手は)一人息子だから大事に育てられて、世間の荒波にもまれてないっていうか、私とは全く逆でしょ。(私は)年のわりにはしっかりしてるって言われるし。」現在、近くのアパートに住んでいる。食事など作りに行ったり、なかば同棲している様な生活である。

彼の両親は今年の4月に奈良に引っ越した。東京にいる時は、「毎週、日曜日に行ったんですよ。今はたまに電話のやりとりとか、手紙書いたりとか、あとこの間、誕生日にわざわざプレゼントを送って下さって。びっくりしましたよ、よく覚えてくれたなと思って。」初めて両親に会ったのは去年の11月3日のことである。両親の結婚記念日にケーキを持って家に行った。今年の結婚記念日には、お揃いの湯飲み茶碗を送ったが、3月頃から父親が結婚に関してしぶい顔をする様になった。以前は夜も遅くまでほつき歩いていたからだと思う。そこで彼が門限を作ってくれた。門限を作って真面目になろうと思っている。

こちらから園に連絡したのは、今年(60年)の7月頃である。「来た時からもう帰りたくて、帰りたくて仕様がなかったし、でももう半分あきらめた感じで、もう帰れないなって、で最近になってやっぱり。」「結婚するとなったら親替わりになるったら園長先生とY先生になっていただこうかなと思ってから、式の時にも来てもらいたいなと思っている。連絡してね。やっぱり彼の両親に対しても両親の顔をたてるって訳じゃないけど、一応親が居なくなってから、親替わりとして園長先生が色々として下さったから、だからこっちで決まりましたって色々で連絡して。式の日取りも決ったらこっちで一応挙式する予定だから来ていただこうかなって思って、だからそれには、ちょくちょく連絡とかしなきゃ。」

仕事を辞める相談は、絶対出来なかった。「ブライドがあったって言うか、まず第1に女の子で高校に行っていたというのは私が始めてみたいなものだったからね。あそこでは。それで高校行って就職試験に受かって、M電気って言う一流でしょ。やっぱり期待が大きかったみたいなの。それに係わりもあったでしょ。うちの会社とF園とのボランティアを通じて。期待が大きかったっていうかね。施設の先生方に相談したってやめるなって言われるのがわかってたっていうか、自分でそう決めつけていたから、園の先生方には相談もしなかったし、たまに遊びに行けば、楽しいですなんて言って」

M電気に居た時は、上下の関係がわからなくて、口のきき方など苦労した。しかし、そういった上下関

係は東京に来てからがもっと大変だった。現在の職場では、「最初はとまどったけど、今はけっこう楽しくやってるし、別に隠す必要もなかったから聞かれたままにね。親がいないんだって言ったし、一人で生活してるって言ったし、大変だねって言って、野菜とか分けてくれるんです。」

<F 8>

17歳中卒女 岐阜で紡績工

姉は札幌で看護婦をしている。1年目の正月と2年目の夏に帰省した。「(手紙は)出さない。色々あるからめんどくさい」姉からの連絡は、「お盆の前とか時たま」である。会社を辞めたいなどたまに話すが、姉の家に帰省しても落ち着かない。「ほっとしない。料理などがあまりわからないから、ねーちゃんのいない時には困る。」

仕事は先輩に教えてもらった。1年生は最初10人いたけれど今は3人しかいない。寮の部屋は5人部屋であるが、先輩の部屋長で嫌な子がいる。

相談事は、労務職員のYさんや寮母さんにすることが多い。しかし「うわさになる」ので職場での相談事もあまり出来ない。また電話は先輩が使ってしまった、混んでいて利用できないことが多い。

遊びに行くのはほとんど工場の人達と一緒に、他の人とは知り合う機会がない。しかし、職場の人ともあまり話は合わない。「幼稚園行っていないので、その事が話題になると、あーまたかと落ち込む。」「その話から抜けるの。話に入らないの。」

長い休みは正月と盆に1週間ずつ。その時は札幌の姉の家に帰省する。日曜日は近くに出歩いたりする。給料日のあとは、服などを買いに岐阜まで行くこともある。そうでない日は寮でブラブラしていることが多い。

卒園後、全く親との接触がない者は以上の3名である。しかし、3名共いずれも兄弟との接触を持っている。

<M 4>は卒園後、1年間おじの家に住み込んで定時制高校に通学していた。従って、おじとの関係は強い様にも思えるが、それも「全日制高校に行きたい」と希望しただけで壊れてしまう。彼の職場が相対的に安定しており、その同僚にも相談事を持ちかけたりするのだが、「保証人」などが必要な場合にはいくら不仲になったとはいえ、やはりおじさんにたのまざるを得ない。姉の事は全く当てに出来ないし、おじさんがだめだったら「園に頼るしかない」のである。

<F 5>の場合、東京へ「夜の仕事」を頼って転出せざるを得なくなった過程を見ると、その社会関係の不安定さが直接の原因になっている。東京では「夜の仕事」の店の寮に暮らしていた。再び交際範囲が広がり出したのは「結婚」を意識し出してからである。すなわち相手やその親、親しい職場、施設や道内の友人等である。しかし、相手の父親は「結婚」に関して消極的な態度をとっている、札幌のおじさんとも和解出来ないなど、それが再び崩れる危険性をはらんでいる。

<F 8>は17歳の紡績女工である。彼女の場合、同じ紡績工の<F 6>と比較しても特に周囲から孤立している。ただひとりの肉親である姉のもとへ帰省した時でさえ「ほっとしない」のであり、その姉も本調査の為に出身施設から連絡を取ってもらったところ、すでに職場を変っていて連絡不能だったのである。

3. 小括

本章で得られた結果は、以下の様にまとめることが出来る。

まず親や兄弟との同居は、住み込みで働き、職を失うとただちに「住所不定者」たらざるを得ない彼らの一つの「避難場所」である。しかし、その親や兄弟の生活自体が不安定なものであるから、彼らがそこに長期に滞在することは許されず、極めて経過的な性格を持つ。それはまた、すみやかに次の職を見つけることに駆りたてられることを意味し、「袋小路」への入り口に立つことになる。失職して親族との同居が不能な場合、友人宅を転々とするか園に一時的に身を寄せるしかなく、「袋小路的職業」へ流入する傾向は強まる。また、転職にかかわらない同居の場合も、それは多くの場合むしろデメリットをこうむる関係になっている。

同居歴が無い者でも中卒者でいまだ未成年の者の場合、その職業生活も必ずしも安定していない者が多く、今後、転職歴がある者と同様の経路をたどる可能性が高い。

それに対して成年者で同居歴が無い者は、全て高卒でかつ、職業生活も相対的に安定している者である。その「生活事故」への対応も同居という形ではなく、社会的サービスを利用し、自分に直接問題がふりかかってこない形で処理している。また、職場を中心とした「社会的ネットワーク」の構造が強いものも見られた。

全く親とのつながりを持たない者でも、兄弟とのつながりは持っている。しかし、それらの関係も当座の「避難場所」にさえなり得ないものが見られる。

この様に、彼らは程度の差こそあれ、家族や親族の支えを当てに出来ないし、むしろデメリットをこうむる関係におかれている。そしてたとえ何らかの支えになり得ても、それは極めて一時的な性格のものである。そのことは、彼らをして失職と同時に「住所不安者」たらしめるものであり、彼らの職業生活の不安定性を一面で規定している。そして職業生活の不安定性は次の失職を招く。つまりこれらは相互規定的な関係を持って「袋小路」を形成しているのである。

それではこうした家族や親族との関係の希薄さをおぎなうべき他の「社会的ネットワーク」の構成要素の性格はどうであったか。職場との関係は、そこを中心に広い社会的な交際の範囲を形成している極めて少数の例を除けば、大方は職業そのものの不安定性に規定されて、そこでの人間関係も強いものではない。また、若年者にとって精神的にも特に大きな位置を占めるであろう友人との関係も、学校時代の友人とはその進路の違いから連絡が無い者が多く、新しい友人には、腹を割って「施設に居た」ことを話せる者が少ないのである。

また、「親替り」だった出身施設と日常的な交流を持っている者は極めて少数である。彼らにとって出身施設はなるべくできるだけ相談事を持ちかけるのはさけない所であり、最後にどうしようもなくなって、「転がり込んで」行く場所なのである。施設の側では、制度的な不備などから、それに充分な対応は出来ず、卒園者の「社会的ネットワーク」の弱さを積極的に補完する役割を果たし得ていない。

むすび

小論で得られた知見を整理すると以下ようになる。

第1章では「養護問題」は不安定な就労状態にあり、社会的に孤立している現代の貧困層の子弟の養育上の諸困難を代表する問題であること、また施設児童の多くは不安定な就労形態、低賃金な労働条件のもとで、卒園後の生活を支える社会サービスを欠いたまま、いわば「強制的に自立」させられる存在であることが明らかにされた。

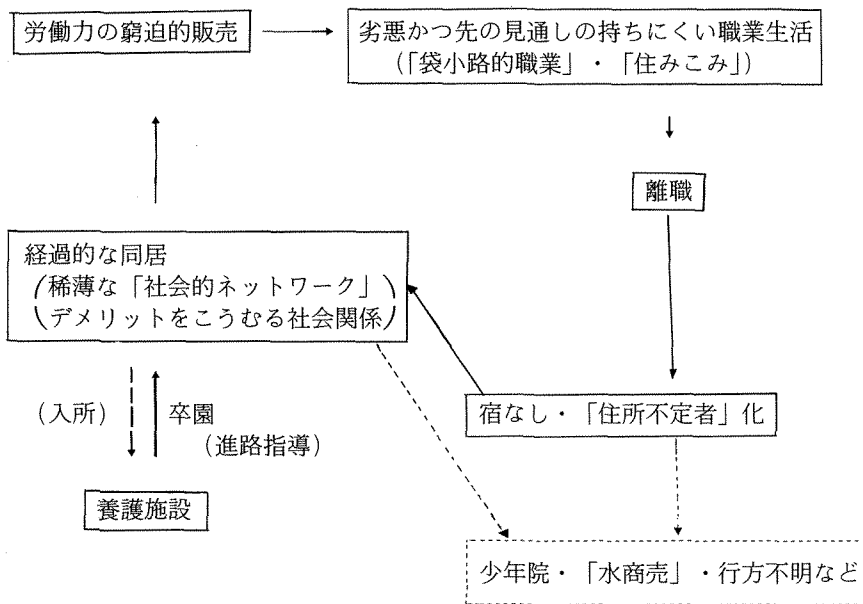
第2、3章ではそうした卒園者の生活構造を事例が通して検討されたが、そこに見い出された

事実は、不安定かつ先の見通しの持ちにくい労働生活と、自己の生活を「防衛」するにはあまりに脆弱な、「社会的ネットワーク」の構造であった。そしてさらに重要なのは、これらが相互に規定性を持つことが具体的には「失業＝住居不定者たること」と「親族との同居」の関係の分析を通して明らかにされたことである。

養護施設卒園者の生活の基本的特徴は、こうした低位な労働生活と稀薄な「社会的ネットワーク」の相互規定性により形成される「袋小路」的性格にある。この点が、養護施設卒園者の「生活」の中にいかに「貧困」への「固定化」の契機があるかという課題に対する小論の結論である。

このことは現代の貧困者の「社会的孤立性」を示唆する。かつて永野順三やO・ルイスが描き出した貧困者の生活は、貧困であるからこそそれへの対抗としての親族、地域社会の結びつきが強いものである。今日では、貧困が諸個人を孤立させる方向に作用し、そのことが「長期・固定性」の一つの契機となっているのではないか。

こうした「袋小路的生活」をシェマ化して示せば以下の通りである。



小論において残された課題は以下の諸点である。第1に、貧困の「世代的再生産」の過程を明らかにするための「生活」把握の方法の検討である。貧困層の生活にとって子供の生活の持つ意味は、この点の検討を持たないと明確にし得ないだろう。この点の詳細は前述（序章注の2）したので繰り返さない。

第2に、小論で明らかにした様に、養護施設卒園者の生活の基本的な構造が「袋小路的生活」なのだとすると、当然にもそこから脱脚し、「自立」した生活を営む客観的、主体的条件を明らかにすることが課題となる。小論でとられた「生活構造」概念をより発展させる形でこの点を整理すれば、以下の様になる。

まず小論で行なって来たように、個々の「社会的ネットワーク」の構成要素と個人との関係のみならず、それらの要素が個人の「生活」においてどの様に構造化されているのかが分析されねばならない。「生活構造」の中に位置づけた「社会的ネットワーク」の概念をより精微なものに

することを通じて、「自立」の基礎になる「社会的ネットワーク」とは何かが問われなければならないのである。

次にそうした「社会的ネットワーク」を自ら構成していく「力量」は何かということが問題となる。自らの「生活」を強じんなものにしていく中で、「貧困」に対抗する「主体的力量」なり「主体性」がいかに存在し、また形成され得るのが問われなければならない。

その際、以下の点に留意されねばならない。小論で示した事例には、非常に劣悪な労働条件の職場からの離職という「主体的選択」が、結果として「袋小路」の中に位置づくことを導く例や、自ら親との関係を断つなど「主体的」に「孤立」することでかろうじて自己の生活を維持し得ている例などが見られる。また、自ら「貧困」をのりこえようとする様々な試みが、その「貧困」ゆえに失敗する中で、自己の将来に対する「主体的」な展望を持ち得ていないものが多く存在する。

このように、今日「貧困」とは、諸個人を「孤立化」させ、生活における「主体性」、「自律性」を奪っていく中で、自らの将来の展望をも持ちにくくさせるものとして現われる様に思われる。もちろんこのことは、今後調査研究を進め分析を深めていく中で実証すべきことであるが、現実の「貧困」は「主体性」を奪う形で存在するのではないかという視点抜きでは、「貧困」を克服し得る「主体」を論じることは現実性を持たないだろう。

本調査は札幌養護施設研究会との共同作業により始めてなし得たものであり、各施設の先生方、調査に御協力頂いた卒園者の方々に深くお礼申し上げます。なお小論での集計作業において北海道大学大型計算機センターのSPSSプログラムを使用した際、北海道立千歳高等学校の吉川経教先生に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。